
縁

黒金蚊

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

縁

【Nコード】

N5200U

【作者名】

黒金蚊

【あらすじ】

これは、変化の物語。

主人公、古賀海斗は蝶を追いかける。それは、蝶が命を運んでしまふから。両親の命を奪い、妹の意識も奪って行った。全てを捕まえて殺さねばいけない。そして、こんな残酷な世界など壊してしまいたい。かつての海斗はそう思っていた。

海斗は高校入学直前して、一人の少女と出会う。その少女に一目惚れをし、もう一度だけでも会いたいと願っていた矢先、入学式で自分よりも遅刻してきたのはその少女、土岐多咲乃だった。

古賀海斗を変える存在。誰よりも優しく、金髪碧眼にして武闘派である天城優希。温厚にして冷酷、副生徒会長の朝倉和泉。お姉さん幼女にして中二病、そして幼馴染である生徒会長、神坂恭子。

五人で過ごした、たった八ヶ月だけの学園生活。

これは、変化の物語。五人の変化の物語。

杏縁

ヒラヒラと舞う蝶を夢中になって追いかける。

幼い頃に一度はした事があるのではなからうか。

俺は生まれて十五年以上経つが、未だに蝶を追いかける癖が抜けない。幼い頃は、ふと気付くと知らない所に居るなんて事は日常茶飯事だったので、歩いて行ける範囲なら今でも覚えている。

——なんてことがあつたら嬉しいのだが、別にそんな事はない。恥ずかしながら、未だに迷子になる事も多い。そこは引越してきたばかりなので目を瞑っていたきたい。喻え幼い頃に居た町だろうと。この癖のお陰で、俺は彼女に出逢えたのだから。いきなりだが、話は一カ月前に遡る。

花の憂き世は、着々と卒業式を終え、未だ見ぬ歴史に立ちほだかる門前で、歴戦の戦士達が受験というヴァルハラを推す事に躍起となっていた。半年前に推薦という選ばれし者の武器によって、ヴァルハラへの道を切り拓いた俺は、いつもより大人しい携帯に新居の門番を任せ、引越し先である町と逍遙していた。

見渡す限り田畑が広がっている。これこそ日本の原風景ではなからうか。

素晴らしい外観だ、本当に。

泣けてくるほど何もない。「こんな所に高校を建てるなよ」と、理事長の胸ぐら掴んで唾を飛ばしてやりたい思いに駆られる。さすがにもうそんな暴挙に出ることなどないであろうが。

田舎道を歩いて行くと、見上げる程度には大きい鳥居が建っていた。その鳥居は黄色く、車道の真横に佇んでいる。そういえば、かの出雲大社の大鳥居も緩い股下に舗装された道だったか。景観が損

なわれると抗議する場所を間違っているんじゃないのか、ニッポン。以上、どうでもいい事でした。

緩い股下を潜ってやった先には、豪壮な総門が聳え立つ。どうやらそれなりに謂れのある神社らしい。

短い参道の先には境内が広がる。そして奥の方には、珍しく鎌を奉納しているのが見られたはずだ。——そんな気がした。

境内に辿り着くその時、俺の視界にあいつが入ってしまった。

そう、揚羽蝶。正確にはギフチョウであろう。しかしそんな事は些細な事。あれは俺の手によって散るべきなのだ。ドンとこい、蝶常現象。

……我ながらお恥ずかしい。今のは忘れてくれ。

「くっそ……あの蝶どこ行っただろ……」

不覚ながら、俺は蝶を見失っていた。知恵を持っているのではないかと思うほど上手く撒かれてしまったのだ。俺に恥をかかせるだけかせて撒くとは、まさに蝶常現象。

参道脇の小さな祠の前でつい溜息をいつてしまう。

「君も迷子なの？」

ふと、草陰の向こうから澄んだ声が聞こえた。今の溜息を聞かれたのだろうか。消すか？ 消すのか？ 自分。

「実は私も迷子なの……どうしょっか」

どうやら俺に話しかけているわけじゃないようだ。では、誰に話しかけているのだろうか。俺にはその真相を確かめる義務があるのではなからうか！ と俺の本能がはやしたてる。

——いや、そんなどうでもいい事は気にせずとりあえず覗きたかった。エロくない意味で。

草陰から顔を出す。その瞬間、三毛猫が俺の脇を通っていった。「待つて！」

三毛猫が飛び出してきた場所から、さらに何かが飛び出てきたかに見えた。

——視界が揺れる。

「痛つてえ……」

何が起きたのかすぐには分からなかった。視界の隅が暗くなりつつ、景色は軽く揺れていた。そしてこめかみ辺りに鈍痛。前方では誰かが小動物の様にいじらしい呻き声を出しながら小さな手で頭を覆っていた。ここでようやく、俺はぶつかったのだと悟った。

「ご……ごめんなさい」

謝れる程度なら大丈夫だろうが、俺の頭突きで病院に担ぎ込まれた奴等を何人も知っている為に、不安は拭いきれなかった。

「いや、いい。それより本当に大じょ——」

ところで、一目惚れというものを信じる人はいるだろうか。俺はそんなもの信じていなかった。

確かに外見などは己の美的感性を刺激するだろう。しかし、そんなものは十年や二十年という代物である。結局のところ、大事な部分はその人の性質である。そして、性質というものは時間を掛けてこそ見えてくる。

——そう思っていた。この時までには。

視界の揺れが収まると、目の前に現れたのは少女だった。やや肩まで掛かった艶のある髪。乱れる前髪の合間から覗かせた大きな瞳は涙ぐみながらも落ち着きをたたえている。

外見だけではない。彼女は真っ先に俺の心配をしてくれた。一度も呻く事もせずに。今もなお俺を心配そうに見ている彼女の眼差しは、それが当たり前であるかの様だ。

蕩けていく俺の脳は、辛うじて彼女の第一印象を導き出した。

——大和撫子。

日本男児が、いや、全世界の男が惚れないわけがないだろう？ 残念ながら、それからの記憶はほとんど無い。微かに、一緒に歩いた記憶があるが、名前も年齢も聞いていない。もちろん連絡先など聞いているはずもない。聞かなかった事を今でも後悔している。だからこそ今、淡い期待を抱いているのだ。この三年間の学園生活で、彼女にもう一度逢えたら……と。

なんて現実逃避はここまでにしておこうか。実はそんなことを考えている場合じゃなかったのだ。そう断言させていただきこう。

昨日、ようやく悪友が寮入りした。あのバカは全てを同居人である俺に任せ、地元ですつと遊び倒してこつち来なかっただけである。鈍く痛む頭をあげると、周りは既に明るかった。転がる空き缶と共に、悪友の置き手紙と、封のあいた睡眠薬が転がっていた。

今日は入学式。詰まる所、遅刻である。

悪友は確信犯だ。後でこのテロ行為には、法の名のもとに報復してみせようではないか。

しかしながら日頃の善行のためか、急げば間に合うであろう時間。頭が相当痛い、いきなり遅刻魔のレッテルを貼られるよりはよっぽどマシだ。会場の講堂までもう少し。時計を見ると残り二分。何とか間に合いそうだ。

入学式なう。

全ては立花の計画通りだった。俺が講堂に着いた時、入学式は既に理事長の挨拶にさしかかっていた。そんな中、勢いよく扉は開かれたのだ。誰が開いたのかは聞いてくれるな。自己嫌悪に陥るからな。

全ての視線が俺に集まり、その視線は次第に冷たくなっていく。そして沈静を破り、響き渡る大爆笑。その中でも一番良く聞こえたのは我が悪友、立花の笑い声。そして俺は教員に連行され、初日にして理事長率いる教職員による説教が待っていた。

教員からの総攻撃を甘んじて受けた後、教室へ行くために今年の担任になる教員の後ろを歩いていた。

「ウチはアンタの行動良かったと思うわあ。もう大爆笑やんかあ。うらやましいわあ」

褒められてもちつとも嬉しくないし、エセ関西弁が癪に障る。立花に比べたら頭文字Dの連載ページぐらい薄っぺらいものだけだな。「ここやあ。今日から君の通う教室う」

担任は微妙に建て付けの悪いドアを強引にスライドさせた。最後まで勢いを緩めないで隣で大きな風船が割れたかの様な心臓に悪い音が廊下に響く。

「今日の英雄の御出ましい！」

教室に流れていた時は一瞬止まったが、すぐに加速した。あちこちから聞こえる笑い声。横隔膜のアクセルをベタ踏みする立花。俺と同じクラスなんてどこまで俺を追い込む気なのだろう。ある意味ストレスの発散元が傍にあるとも取れるが、同時にストレス製造機なので、プラマイゼロどころかむしろマイナスである。

「まゝ笑いもとったんやから出席取るばい」

エセ方言が西へ移った事はクラス全員がスルーした。クラスの冷静なスルーにもあえて触れないエセ担任は次々に名前を挙げていく。「古賀あ」

俺の名前が呼ばれたので一応は返事をしたが、それだけで周りは笑いを我慢しているような雰囲気だった。

エセ師がその後も名を呼べば、それに応じる様にやる気のない声で呼ばれた生徒達は返事をしていく。

「土岐多あ……土岐多あ？ 土岐多咲乃お」

教室には一つ空席が残っていた。病欠でなければどうやら俺の同類と思われる。今度土岐多とやらと熱く語ろうか。無論、羞恥のどん底へ突き落とした立花をどう責めるかでだ。

今の気分と相反する爽やかな風が、開かれた窓から吹いている。体が少し冷たくなって来た頃、まだ周りの俺への視線は気になるものの、時間の経過と共に俺の席から右前方の空席へ移っていく。やはり皆も未だ見ぬ土岐多の存在が気になるのだろう。

そんな時、ドアは静かに開かれた。

「すいません。遅れました」

慌てる様子もなく入ってきた彼女。見るのは二度目だった。何も悪びれる様子もなく教室に入ってきたその人は、一ヶ月前に神社で出逢った彼女そのものであった。彼女は座席表を確認し終えると、無音の教室を後ろへ迂回しながら突き進む。

クラスの皆が注目していただろう。彼女はその中で俺の視線に気付き、柔らかに微笑んだ。

開け放たれた窓から吹いていた風は、もう止んでいた。

式縁

ひぐらしのなく頃に、ようやく俺の思考能力は回復した。時期的にひぐらしもうみねこもないが気にしないでくれ。

何はともあれ俺は生まれて——そう、生まれて二度目の恋をしているわけだ。一度目については触れないでいて欲しい。俺の中では黒歴史なんぞね。

「ユウカナリアさん、大層キモくてごめんなさいって言え」

いきなりマニアックなネタなので状況を説明しよう。

寮に帰ったらしい俺と立花。この恋する男子の横で、立花にしては珍しく、真剣に何かを製作している矢先に発したと思われるのが先程の言葉である。俺はハルヒコ氏でもないし、元木氏でもないよって言われた通りに口に出す必要はないと判断する。

「機・魔術師／＼エンチャン。ー／＼全十九巻発売中だよ！タグには是非もって評価されるべき、と書きこんでくれたまえ」

うん、宣伝ありがとう。ただ動画にはならないと思うぞ。しかも宣伝したからって色んな危険が回避されるわけでもないし。

立花はそんなツツコミも受け付けないというオーラを纏い直し、作業を再開していた。

これほど熱心な立花を見るのは非常に珍しい。いつも向けるべきベクトルを間違えているだけな気はするが。

「……で、何作ってんの？」

器の出来た御方なら訊ねる事はないと思うが、俺はお世辞にもそこまで人間出来ていない。持ち前の好奇心からつい口にしてしまった。

——口にしてから気付く事もある。

こいつは大の女好きだった。ヒントは、立花が触っているのが電子手帳という事だ。立花もそこまで察知したのか、軽く笑っただけだった。

キモさでは良い勝負だろうな。

「それにしても咲乃ちゃんか。確かにスゴかったな。可愛いのはもちろん、俺様の緻密なプランを見事に崩すとは」

「そういえばそのプランとやらの御返しがまだだったね」

「アハハハハ　まあいゝじゃない　時効だよ」

辞世の句は継ぎ終わったようだ。

「某教授が習っていた伝説の通信空手、受けてみよ！」

この日、男子寮で紅い桜が散った。この出来事は、後世に「遅刻魔さんの祟り」と呼ばれる学園七不思議のひとつとして語り継がれる事になったとかならなかったとか。

桜が散った頃には、月の煌きが雲の合間を縫って漏れ出ていた。

ここ数年で大分丸まったとは自分でも感じてはいるのだが、破壊衝動に駆られる時もやはりある。

解消方法としては二つ。その一つが立花に犠牲になって頂く事だ。勿論、ヤツによって引き起こされたエピソードもある。そう、あれは丁度三年前の事だった――

――と、回想しようと思ったが立花がキモいだけであり、脳の毛細血管が詰まりそうになる一方なので割愛させていただこうと自我は訴える。

立花も使い物にならない時、もう一つの方法で気を紛らわせる。

それは、世界を五感で堪能し、世界と共に周る伝統的趣味。

即ち、散歩である。

無人の最寄駅から徒歩三十分近くかかるような僻地に高校を建てたお陰か、九割近い学生が寮生活をしている。その全てを一か所に集めている故、自然の中に居座る広大なコンクリートの山が、田畑の合間に棒立ちしている。寮の辺りを散策していると改めて実感出来る。

こんな何もない場所に建つ猿投高校は、駆け込み寺とも呼ばれている。言ってしまうえばワケあり学生が集まる高校だ。いや、猿投高校が拾ってくれるというのが正しいのかも知れない。

俺もその一人というわけだ。立花のバカは、来なくても良かったのにわざわざ付いてきやがった。本当バカとしか言いようがない。涙がちよぎれる美談である。

——本当は単に高校受験全部落ちただけは無いだろうかと推測している。

そんな事を考えて、かれこれ一時間近くは歩き回っただろうか。既に陽は猿投山の西方へと落ち、月も昇っていた。いつもなら落ち着けるはずなのだが、立花の今日の所業を思い出すと未だに気分が晴れない。何とかして気を紛らわせなければ。

とりあえず地に伏して、星を見上げてみた。

「ふはははは。これぞ西宮正明のON THE GROUNDの世界だ」

.....。

何やっているんだ自分。しかも本来は親指からみた世界だから見上げちゃ意味ないし。

気恥ずかしさを消すには転がるに限る。転がるに限る。大事な事だから二回だ。

何かが背中にあたった。硬過ぎず柔らか過ぎず。これはそう、土岐多さんの頭と同じ様な心地よさだ。此処でまた逢えるなんて運命としか喻えようがない。

星よりも輝く土岐多さんを見上げる。

「近くに精神科の病院があるのでですけど、紹介しましょうか？」
そこにいたのは、知らない人。

アレ、ドチラサマデスか？

「それとも、奇人を装った覗き魔でしょうか」

うむ。現状を伝えるのなら、椅子に腰掛けている声の主の足元に転がり見上げている俺。足を組んでいる事も相まって、角度的に

椅子と赤いチェックの布の間が見えそうでもある。

なるほど、絶賛覗き中だ。これはマズイ。

潔白を証明する為にも、何事も無かったかのように雄大に立ちあがってみせる。

頭の中では【通報しました】という画像がスライドショーとなつて流れているが、このポーカーフェイスは易々と崩れない。

「まあ、少なくとも後者ではないのは分かっています。先程から眺めていましたから」

正面で座っている彼女は、夜空よりも暗い漆黒の髪を腰までおろしていた。月に照らされている顔は、薄明かりながらも整っているのが見て取れる。コロコロと笑う彼女は、美しさだけなら土岐多さん以上。少なくとも、そこいらのアイドルと比較すると、相手は黄色いつなぎを羽織るAD以下の扱いになるのは目に見える。

彼女は黒真珠の様な瞳を見せて、再びコロコロと笑いだした。

「お悩みがあるのなら、お聞かせ下さいませんか？」

笑顔だけで燃料気化爆弾を投下されたかのような破壊力。

この御方は、危険だ。

薄らいでいる妄想マイ土岐多さんが、セコムばりの警報をかき鳴らしている。これ以上目視しては死んでしまうに違いない。

生きる為にも視線を下ろし、地面に助けを求めた。しかし地面は助ける事など皆無であり、それどころか穢れ無き御美足を運んできなさったのだった。

「ちよつとぐらい、いいじゃないですか」

目を伏せた事によつて捕捉出来なかった御方が、吐息と共に耳元で囁いた。近い、顔近過ぎ。あとキメ細かすぎ。そして、再び開かれた艶やかな瞳に吸い込めれていく錯覚に陥る。

無言という最期の抵抗を試みてはみたが、遂に破られる事となつた。あの御方が耳に息を吹きかけたのだ。

妄想は月の光と同じように、雲で掻き消された。

「冗談です。もう大丈夫そうですね。また何かあれば生徒会室にお

越してください。御話を伺う程度なら私でも出来ますので」

知らぬ間に、御方は手を伸ばしても届かない位置まで離れていた。ふと我に返ると、胸中にあつたはずの身体を駆け巡っていた立花への殺意は消え失せていた。単に彼女に戯弄されていた感は拭いきれないが、何故かそれが嫌ではなかった。

「それでは、また逢いましょう。古賀海斗さん」

見ず知らずの彼女が何故俺の名前を知っているのか。その疑問が脳内で言葉に変換される頃には、彼女は闇に溶けて消えていた。仄明るい夜空が照らすのは、俺と彼女が落としたと思われる生徒手帳だけだった。

参縁

授業が始まった。正確にはまだ毎時間自己紹介をしてばっかなわけだが。

自身の自己紹介ならいい。四限目はなんと、隣の人の紹介ときた。まだ顔を合わせて二日目の奴の紹介なんて名前すらうる覚えである。しかし、俺にとって一番の問題だったのは、俺を紹介する隣の席に居座っているミイラ男だった。何を隠そう、立花薫だ。

それはそれはもう赤裸々に俺の中学での武勇伝を語ってくれた。それはもうある事ない事語り放題。お陰様で、クラス中から塩分十%を含んだ塩水の凝固点より冷たい視線が俺へと降り注いでいる。

あの野郎には後で絶対に包帯の中へ凝固した岩塩を擦り込んでやると決心しつつ、昼休みになると同時に立花の軌跡を辿りながら、脱兎の如く教室から飛び出した。

まずは立花なんかより飯である。

年功序列という悪しき習慣を叩き割る為、購売へと疾走し真つ先に焼きそばパン（ソーセージ入り）を仕入れる。先輩に先譲れ？そんなもの知った事か。この世は先手必勝である。

そのついでに、同じ思考回路を持つ立花を跳びヒザで仕留めておいた。

さて、買うには買ったがどこで食うべきか。教室には戻りにくいというか戻りたくない。立花にトドメを刺すべきだったと今更後悔。右手を腰に当てるとポケットの中の硬い物に当たった。入っていたのは朝倉和泉と書かれた生徒手帳。昨日の話から、生徒会室にいるという事は生徒会のメンバーなのだろう。というより、あの風格は会長にこそ相応しい。

生徒会長にもなると、生徒手帳が半日も無いのは何か問題な気がする。あの御方に万が一もあってはいけない。そんな思いが身体中

を奔り、俺の足は場所も分からぬ生徒会室を目指して動き出した。

動き出してはみたものの、生徒会室は全く見当たらない。このままでは昼飯の時間すら怪しくなってきた。幸い焼きそばパン（ソーセージ入り）なので、行儀が悪かろうが校内で食い歩きしてやろうという思いが沸き上がる。とりあえずラップは外しておこう。そしてたら一口だけ噛り付いてやろう。いいか、一口だけだ。なぜならば、そこに至福があるのだから。

階段を降りつつ綺麗にラップを剥いていく。さあ、焼きそばパン（ソーセージ入り）ちゃん、これで君はもう裸同然だ。恥ずかしいかい？ 大丈夫、痛いのは最初だけさ。

それでは、いただきま……

俺の目の前を、ちっこい子がトコトコと横切った。その子には全身に黒いモザイクが掛つていた様に思う。俺の網膜から視覚野の間に掛けられた黒いモザイクが。

いいや、俺は何も見えていない。何も見ていないんだ。さっきのは幻覚だ。二日酔いなだけだきつと。

おっと、こんなんでは素肌を晒され続けている焼き（略）に悪い。今度こそ頂きま……

「あつ、危ないいいいい」

真上から声が降ってきた。そう、階段の上から。

何事かと思つて見上げてみる。

あ…… ありのまま今起きている事を話すぜ。ピンクが落ちてきているんだ。な…… 何を言っているのか分からないと思うが、俺も何が起こっているのか分からない。ただ一つ確実なのは、俺は焼き（略）を守らねばならないということだ。昼飯的な意味で。

咄嗟に昼飯を持った右手を天に掲げ、布の質量とは思えない速度で迫るピンクを避ける。

全ては順調に思われた。

なんと、ピンクが動きやがった。

ピンクの延長となつてゐる白い何かの顎を穿つ。

嘘です。どう見ても白い脚でした。

これ程見事な当たりは過去を顧みても一度も無い。意識を保つのがやっとで、降立つ王者に為す術も無く押し潰された。

「ゴメンゴメ……」

黄金の冠を戴く王者が軽く謝罪を入れる。何の王者なのか。検証の為、揺らぐ世界の中を見渡す。

いや、見渡す以前に目の前に居た。日差しに輝く滑らかな金色の髪に、恐山宇曾利山湖の様に澄み渡った碧眼。そして白い肌に端正な容姿。それは間近ながら西洋人形かと思える程であつた。

しかあし。その見入ってしまうような碧眼は俺を捉えてはいなかつた。宇曾利山湖の見据える先をゆっくりとなぞって行く。終着点にあつたのは、焼（略）だつた。

あむつ。

事もあるうちに、此奴は反り立つこの子に噛り付きやがつた。繰り返そう、愛しいこの子の初めてを奪いやがつた。なんという所業、なんという鬼畜。過去の俺でもここまではしない。

——した事ある気もするが、そんなのは気のせいだ。

「いやあ、ちつこいのに追いかけてご飯食べれてなかつたんだ。サンキュッ」

そんな事情なんか知らん。首根っこ掴んでも吐かせてやりたい。しかし、視界はまだ揺らいだままで、立てるところか言葉も発せられない。こんな状態でも立ち上がれるプロの格闘家つてすげえ。

「今はちよつと無理だから今度お礼するね。じゃっ」

足音が遠ざかる。

残されたのはレイプされた焼きそばパンと、なす術無く見ていた俺だけだつた。この雪辱は必ず晴らしてみせようではないか、あの西洋人形娘め。

頭横から生える金色の双尾を揺らして去っていく人形を消えるまで見据え続けてやつた。消えた以降も、まだ立ち上がれそうにない

ので、噛られたパンをそのまま食べる事にした。幾人かの生徒がそんな俺を見つけては、顔を引き攣らせながら遠ざかって行く。確かにここ数年でテンションのブレーキが壊れたと自分自身思うが、ここまで引かれるとさすがに落ち込む。全部立花の所為なのです、お許し下さいマリア様。

そんなどうでもいい事を考えながらなんとなく眺めていた先。入り込んだ先に生徒会室と書いてあった。

分かり辛えよ。

頭はガンガン響き、気持ち悪い。しかし、あの御方をこれ以上困らせてはいけないという使命感が何処からか沸いている。その想いが一手一手生徒会室へと手繰り寄せていく。はい、這いつくばって生徒会室に向かう人って異常だよね。扉まで辿り着く頃には立ち上がる事も普通に歩く事も出来るまでに回復したからいいよね。

力無く扉をノックする。というか何故ここは鉄扉なのか問い詰めてもいいだろうか。そこまでは厚くなさそうではあるが。

「はい。どうぞ」

ドア越しから漏れた声だけでわかる。澄み切っていて、遠くからでも聞き取りやすい声。あの時の女性、朝倉さんだ。観音開きの鉄扉をゆつくりと開ける。あの……正直、重いです。

最初に飛び込んできたのは、逆光だった。朝倉さんの後光ではなく、物理現象的な逆光。

思わず目を細めてしまう。

逆光の中にある細長い人影こそが御方、朝倉さんなのだろう。

「こんにちは、古賀さん」

目が慣れ始めて気がついたのは、部屋の一面が前面ガラス張りという事実だった。

直射日光を遮っている朝倉さんは昨日と変わらずコロコロと笑っていた。こんなに具合が悪い今でもよく分かる。この御方は人類でもトップクラスに美しい。土岐多さんや先程俺の屍を越えていった西洋人形よりも。全員美人である事には変わりないが、例えるのな

ら土岐多さんは絵に描いた大和撫子。西洋人形は西洋人形。朝倉さんはサン・ピエトロのピエタといった所だろうか。黒髪に黒瞳という当たりは大和撫子らしいのだが、スタイルも胸以外は素晴らしく、何より女性としてのしとやかさとしたたかさを持ち合わせた女傑。ちなみに、他が完璧過ぎて「胸以外」と表現しただけであり、胸自体も程良い膨らみはある。

生徒会長である朝倉さんが俺の名前を知っているという事実には恐怖はあるものの、朝倉さんを眺める事が出来るだけで眼福というものだ。俺なんかにはこの御方に触れるどころかこれ以上近づく事すらおこがましく思う。

「今お茶いただけますのでお待ちください」

棚から取り出されたのは藍色の抹茶碗だった。上に行くほどに濃い藍となつて見た目も非常に美しい。

「萩焼でこの色は珍しいんですよ」

手は止まらず、されど優雅に、湯気を濛々と立ち上がらせながら抹茶碗に湯を注ぐ。茶筌で軽く注ぐと湯を捨てた。

「あの…いいんですか？ 珍しいみたいですし、そのうえ高そうな抹茶碗なんですけど」

「つつい敬語っぽくなってしまう。敬語なんてよく分からないので雰囲気ではないだろうがね。」

「器というものはどれほど綺麗でも、使われてこそ本当の味を出せるんです。使われる為に作られたのに飾られているだけなんて、器が可哀想だと思いませんか？」

そこでようやく朝倉さんは顔を上げた。

「それと、生徒手帳ありがとうございます。そちらに置いていただけます？」

それだけ言うと、すぐに篩にかけながら抹茶を茶碗へと入れ始めた。

右ポケットに閉まっておいた生徒手帳を木製の折りたたみ机の上に置きながら、これまでの全てが確信犯であろっ朝倉さんの計画に

俺の背後で、足音が右から左へと移っていく。足音のする方を常に背中にするように一歩づつ回れ左を行う。

「恭子。私は今、落胆しています。何故でしょう」

「そんなの知らないもん」

「いいですか。この席は会長専用」

「だから、ボクの席」

「私は副・会長です。ほら、会長という文字が付いているでしょう」
待て待て待て待て。つくば市の風力発電風車が一周するぐらいは待ってください。

完璧人間の朝倉さんを差し置いてアレが会長。

なるほど。冗談きついぜえ、とつつあん。

「副会長は副会長！そこはボク専用なのっ」

「三倍速くなれそんな赤を基調にしているのがいけないのです」

「椅子の色っ！」

眺めてみる。朝倉さんの横でピョンピョンと跳ねているモヤモヤしたアレは、やはり実在しているという事なのか。

先の抹茶のお陰か、平常心は残っていた。モヤモヤのモザイクを少しづつ取り払っていいこうじゃないか。

いいか。ゆっくりとだぞ。

まず、髪は短く切り揃えられており、ボーイッシュという言葉が体現している。また、左手首から腕の関節までの間は、大きなリストバンドが目立っている。背もとてもなく小さい。どのぐらいかというと、俺と大差ない朝倉さんの胸元ぐらいしかない。そう胸元ぐらい。

「古賀さん、後でお話があるのですが」

「」

確かに胸の方に視線をやりましたさ、ええ。

「古賀？」

アレが遂にこちらを振り向いた。顔だけは隠そうかと試みたが、朝倉さんの妖刀村正を彷彿させる刃の様に研ぎ澄まされた視線に動

けなかった。

「奇遇だね和泉。ボクもかー君にはお話があるんだ」

今までずっと朝倉さんの掌で踊っていたのだろうか。もし、そうだとしたら俺は声を大にして言いたい。

黒歴史を掘り起こす事だけは勘弁してください。切実に。

そんな想いは数秒後に打ち碎かれ、俺の意識はどこかへ消えた。

肆縁

黒歴史に触れられてから何日が経っただろうか。僕の初恋を暴くだなんてそんなあ。

——よくあんなのを好きになった事があるものだ。俺虐められてばっかだったぞ？ 大丈夫か、昔の俺。

とにかく、人として生まれながら人ではない、天照大御神に匹敵するであろう神々しさを纏う現代神、和泉之姐さんが近くにいないとフラストレーションが爆発しそうだ。何でも朝倉だけは止めて欲しいと顔を近づけながらおっしゃったので、姐さんと呼ぶ様にした。姐さんは依存性が高過ぎなので要注意。

後光を浴びられぬ殺伐とした心に、安らぎを与えてくれるのは土岐多さんのふつくしい笑顔だけだ。

そんな土岐多さんのふつくしい笑顔を眺める土岐多さんは久し振りにだ。人である土岐多さんはやすらぎ度アップである。

遅刻は当たり前で休みがち。彼女を拝める日は国民の休日にすべきではなからうか。席が自分の方が後ろという残酷な運命に置かれているので笑顔はあまり見えないものの、ふつくしいオーラはみとれる。

「ホンマ金はええわあ。ボンボンの人にはわからんかなあ」

ふつくしさを汚す輩。確か今は政治経済の時間なのだが。しかも昼休み前とあって殆どの生徒が聞いていない。まともに聞いているのは立花ぐらいだろう。

「おつ。もうすぐ終わりやないかあ。ウチはもう食堂行くんやけどお、アンタらはチャイム鳴って二分待ちい。たっちゃん監視頼むわあ。お礼はずむでえ」

相変わらずこの人は……。妙な嫌がらせ付きだし。それにたっちゃんって立花、お前どこまでの関係に……

「気になるか？ アルファベットで表すと——」

「すまん。黙れ」

全く……年上好きなのは結構だが節操というものは持つてくれ。
「まあ聞けよ。センサーと仲良くなるのは常識っしょ！ Sランク級の美人！ 性格も一見変人だが、お前だって一夜を共にすれば単に面白い人に——」

阿呆な演説をしている後方で誰かが動いた。俺のその視線に気づいたのか、立花も俺の視線を追った。

そこに見えたのは、本来の機能を全く果たさずに飾り物と化したネクタイと、同じ様な細身の男。クラスメイトの奥村孝太が、教室のドアへと向かっている所だった。

まあ、教員の嫌がらせに合わせる必要もないしな。

「奥さん、ちよいと待ちな。その一線を越えちまうと命の保障はしかねますなあ」

立花の口調が突然変わっていた。しかも目を細め、顎をさすっている。三文でも高いと思わせる大根以下、ごぼう程度の演技力。

「ほう。俺を殺すっていうのかい。それによあ、おめえさんにこれ以上の悦楽を味わわせる訳にはいかんのよ」

どんな悦楽か知らんがお前も乗るな奥村。いいか、ストリートフアイターならまだしも弱そうな二人がやりあってもなんの楽しみもないんだからな。

どうでもいい、本当にどうでもいい。立花と奥村の睨み合いで滔々と時間は過ぎていく。生唾は呑み込むほど出ないし、掌は一向にしめらない。チャイムの音も当事者二人だけの間に流れる緊迫感を消すことは出来なかった。既に何人かは前の扉から何事も無く出て行っている。残りは弁当を広げていた。俺も姐さんからお手製お弁当というものを偶々享けたまわったので、美味しく戴いている。これがまたマジで美味しいのなんの。

——上手く餌付けされているのは気のせいだ。

「おーすっごい美味しそー」

少し高めで可愛い声。振り返るまでも無かった。声の主は土

岐多さんに違いないのだから。

「えへへ。一緒に食べてもいいかな？」

春の到来。それは突然だった。何故俺なんかに声をかけてくれたのだろうか。そんな疑問など彼女の笑顔で溶けきってしまったね。

「是非是非」

全力の肯定に、土岐多さんは隣の席を借りて机を正面にくっ付けた。

ふおおおお。こんなに間近で……見つめ合つと素直におしゃべりできない。J・SRAC? 何それおいしいの？

土岐多さんが弁当を開ける。もしかして土岐多さんの手作り料理が入っているかも知れない。

——その中身にいくら俺でも絶句。

いや、このぐらいじゃ俺の想いは揺るがないぜ? ああ、揺らぐもんですか。決して己に言い聞かしているわけではないからな。勘違いしないでよね!

揺らぐもんかっ。

「わたしちよつと手先が不器用で」

あまりにも幸せそうで、こちらまで暖かくなりそうな笑顔。でも、ちよつと手先が不器用だからって弁当に錠剤の詰め合わせはちよつとレベルが違うんじゃないかな。ジャラジャラ? ナニコレ? サプリメント? アブナイオクスリ?

「いただきます」

豆よりも滑りやすいであろう栄養素の塊を、器用に一粒ずつ口に奉納する土岐多さん。正直言いたい事は沢山あるけれど、その姿は理屈なしに微笑ましくもあつた。あつ、お水どうぞ。

チャイムが鳴ってどのくらいの時間が流れただろうか。姐さんによる餌付け(受身)タイムは終わったものの、土岐多さんはまだサブリの山を登頂中だった。一口一口丁寧にサブリをお召しになる土岐多さんからふと視線を外し、後ろを見ると二人は未だに睨み合っ

ていた。

立花が瞬きをした一瞬のスキをつき、遂に奥村は動いた。

「まだまだ甘い！ 瞬きは不規則にしなければ時に勝敗を分けるものだ。覚えておきたまえ少年！」

奥村がドアに手を掛けたその時、ドアは勝手にスライドされた。

奥村が掛けているのは逆のドアが。

「ぴぎやあああああつ」

「おつ。すまん」

見事に奥村の指を押し潰したのは南風原将。蔑称、キング・オブ・リア充（立花談）。何でも将来有望な女優さんとお付き合っているのだとか。

顔は勿論ガタイも非常に良く、女生徒にも人気も高いながら、ひたすら一途を貫く男。そこが人気をより高めている。何故か俺を見る時の目は冷めている。非常に冷めている。今向けられている視線だってものつそい敵意を感じる。

「古賀。人形みたいなのが多分お前を探してたぞ」

人形みたいなものって何だ。人形みたいなものって。

心当たりはあるけども。

しかし、今は土岐多さんと一緒に居られる数少ない時間なのだ。

優先すべきはどちらかなどと、血迷う事などありえない。現状維持である。

そんな想いを込めた、ワンタッチケトルの湯よりも簡易で熱い視線を土岐多さんに注ぐ。

土岐多さんは俺の想いを受け止め、微笑んで箸で摘んだピンク色の橢円サブリっぱいものを差し出してくれた。

「これはね、筋肉がやわらかくなるやつなんだよ。ぐにやぐにや」

いえ、結構です。っていうか筋肉ぐにやぐにやって気持ち悪いよ！ 絶対口に出せないけどもっ。

「ごめん土岐多さん。ちよっといつてくるね。本当、ごめん」

天使の微笑みに悪魔の薬。

居たたまれなくなつた自分が取つた行動は、逃亡。

土岐多さん、本当に、本当にごめん。サプリの山は正直無理でした。

教室から出てきたものの、場所までは聞いていなかったの、そこらをつろつく事にした。どこで探してたか聞いとくべきだった。携帯を持つと、こういう詰めの部分を見落としやすいと思う。その時に連絡取れちゃうから集合とか曖昧なままにならないだろうか？よく携帯を部屋に置き忘れる俺の説得力皆無な論理。今日はちゃんと持ってきた俺偉い！何の役にも立ちませんがね。

「見つけた！」

暇つぶしの脳内独り言タイムをしていたら、ようやく西洋人形が現れた。極楽へと導かれそうなその瞳は、曇りがかっている。

「昨日はゴメン。大丈夫だった？」

西洋人形は軽く合掌だけすると、軽く変色したアゴをまじまじと見つめてきた。

「うん。良かった、大丈夫そうだね」

これが大丈夫かね。その碧いガラス玉くり抜いてやろうか。

焼きそば（略）の恨みもあり、珍しく素直に手が出してしまった。

突き出された双の指を宇曾利山湖へ沈めようと試みたのだ。

死角から貫いたはずの指は虚空を切った。それと同時に何かが首筋に迫って来る。危機感が、左手を動かした。

鈍痛。しかし、直撃はしていない。黒いソックスは俺の左腕によつて遮られていた。斬首刑から逃れた事に宇曾利山湖の瞳は大きく開かれていた。

「……すまん」

先日、アゴを強打しておいての先程の態度に一瞬我を失ってしまった事を悔いる。

彼女は不動明王の様に動かない。仏批判とかじゃなくて語感だけで選んだだけです。

失礼。現状を整理させて頂こう。俺の眼潰しを避けた彼女はそのままハイキックを繰り出した。結果は首ではなく左腕で止まり、脚はそのまま左腕に置かれている。

つまるところ、その、丸見えなのだ。何がかは聞かないでくれ。青少年の健全な育成を見守る為にも答えられない。

視線に気がついたのか、彼女の視線も次第に俺の顔から床へ、そして俺が見ているモノへと移っていった。

グチャッ。

プチッとかグチャッとかいうレベルじゃないんだ。グチャッ。

暗転。数拍置いて激痛。

「プギヤアアアア」

眼潰し未遂の報復は眼潰しになった。目ん玉挟れているんじゃないかこれ。

「変態……」

言い放たれた一言を断固否定したいところではあるが、転がってでもないと目の痛みに全意識が集中してしまう。

しばらく待てば視界に光が戻り始めたものの、焦点は未だに定まらないままだ。どうしてくれる。

犯人である彼女は、痛み付けた相手を見下しながらも、俺のあまりの動きに怖気付いたのか、その場で動かない。

「ゴメンゴメン。でも今のはアンタも悪いわよ」

「……至極、正論でございます」

「アンタ名前は？」

記憶を辿ってみよう。南風原はなんと言ったか。

そう、「人形みたいなのが多分お前を探している」。

「知らないで探していたのか」

「知ってるわけじゃない。聞いてないもの」

「さっきクラスメイトから俺を探してるって聞いたんだが……」

「ああ、何人かに聞いたのよ。焼きそばパンを食べる時に興奮するような変態知らないかって」

南風原。俺に対する嫌悪は思い込みではなく本物だったのか。多分俺とか言っていたし。

「アンタってクラスメイトにも変態って思われてるのね」

言葉には力がある。いくら思っけていても言っけてはいけない事もあるのだ。

——物凄いい傷付くんです。

と、のたうちまわりながら表現してみた。

「まあどうでもいいや。携帯出して」

無視というトドメを刺され、従順な羊と化した俺は携帯を取り出す。

他人の携帯をこともなげに使いこなす彼女。持ち主の俺ですら電話とメールぐらいしか知らないのに、なにか色々とやっている。やがて、自分の携帯と向かい合わせるといふ奇行まで起こしていた。掠れた視界なので確証はないがそうに違いない。

コイツ……頭大丈夫か？

「はい、返すね」

携帯、返還。しかし、眼球に加え携帯まで純白の指先でレイプされた俺には最早何も残ってはいない。

「じゃあまた後で、海斗。蹴りを止められたのには正直驚いたわ」

それだけ言っくと彼女は消えた。茫然と立ちつくす俺の手に戻った携帯のディスプレイには、天城優希という名と連絡先が表示されていた。

伍縁

人には長く感じる曜日があるのではないだろうか。それが月曜という人は土日を遊びつくした人なのではなかるうか。個人差はあるが。

そんな心理学チックな今日は金曜日。休みが待ち遠しい俺にとって、最も長く感じる曜日だ。さらに付け加えさせていただと、今はようやく昼休み。何故か優希がクラスに来ているところだ。

「海斗って今週の日曜暇？」

「覚えといたほうがいいぞ、優希。週の始まりは日曜からだ」

優希との雌雄を決する再会を果たしてから一週間程過ぎていた。

優希はいきなり海斗と呼んできたが、俺にはどだい無理な芸当であり、優希と呼ぶ様になったのは先日語る程でもない、実にくだらなかつた事件後からだ。

「結果を言わせて貰うと暇じゃない」

「えー。隼人にドタキャンされて暇なのよ。だからさ、何とか……ならない？」

傍から見ると、優希は数多くの男を侍らせており、俺もその一員と化している。

「隼人たる人物も知らんし、それ以前にそんなこと言われてOK出す奴が居ると思ってるのか！」

優希は俺の後ろを指差した。振り返れば血の涙を流している立花を始めたクラスメイツが見えるだろう。イザナギも黄泉の国から帰る時はこんな気持ちだったのかもしれない。

「そう。ダメなんだ……」

思わぬ所からの声。土岐多さんだった。

一目惚れのような感覚は長くて一年しかもないことをご存知だろうか。詳しく覚えてないが、ラジオでそんなニュースを聞いた記憶がある。これ、豆知識。

「土岐多さん、何か用でも？」

ここ最近、遅刻はするものの毎日学校に来ている土岐多さんは、昼休みに俺なんかも誘ってくれる。まあ、優希という余分なものも付いているし、サブリ弁当には未だ強い抵抗が残るが、一緒に食事をするというのは大きな進歩ではなからうか。

「なんかアタシと対応違うくない？」

「気のせいだ」

土岐多さんと俺より仲良くなってるんだ。嫉妬のひとつやふたつもしたくなるっての。

不意に、右後方から何か、気持ち悪い怨念のような何かが噴き出す。

いや、わかりきっている。あいつだ。何をしようとしているか瞬時に理解したものの、時既に遅し。

「コイツ週一で妹のところに行ってるんだぜ。妹想いのシスコン兄貴だなあ」

立花の野郎。無理矢理会話に入るため俺を売りやがった。しかもわざわざ誤解を招きやすい言いまわし。まさにマスゴミの鏡だな。

それに週一で妹に会うようになったのはこっちに来てからで、たった二カ月そこいらの事だ。中学の頃は距離的な問題もあって、たまにしか会う事もなく、立花と出会う以前は会ってすらいらない。

「それでこそ海斗よ」

優希は俺の右肩に手を乗せ、諭すかのように呟いた。

一体俺をどんな色眼鏡で見ているんですか、優希さん。

「妹さん……ダメ？」

何がダメなのかよくわからないが、多分妹の具合はどうなの？と解釈しておこうと思う。

——いや、事情を知るはずもないからそういう解釈も違う。

なにが「ダメ？」なのかサッパリだ。

この二人の質問に同時に答えられる言葉はすぐに浮かんだ。事情が事情なので口に出そうか戸惑ったが、この二人ならいいと思えた。

「今も病院で寝てるよ」

優希が小さくなり、バツの悪そうな顔で俯いてしまった。

優希が多くの男を侍らせているのは、逆ハーレムの為ではない。詳細までは知らないが、父親の面影が重なる男と仲良くしたいだけなのだ。先日、俺はその事を知った。俺が優希と呼ぶ様になったのもあの時からだ。

「ねえ、アタシも一緒に病院行っちゃダメ？」

この唐突な発言を理解するまでに時間を要した。さらに、どう答えるか時間を要す。妹は俺の問題であって、優希には関係無い。さらに、妹に会いに行つたつて反応してくれるわけでもない。

「ゆーちゃんと一緒にいい？」

土岐多さんまでに言われてしまうと答えはひとつ。ハイ、ヨロコソデ。

しかし、それでも俺の口が動いたのは幾分か後だった。

「ありがとう」

確かにこの言葉は素直な言葉だ。だが……

「じゃっ俺もいいよな」

「お前はダメだ。ア・リ・エ・ナ・イ」

心の引つ掛かりはバカの所為で有耶無耶になった。こういう時、実に気持ち悪くなる。

「とても興味深いお話ですね」

架空の花が辺り一面に咲き乱れる優しい微笑み。しかして、近づけば花々は枯れてしまうだろう。それほどまでに猛毒。

いつの間にか姐さんがいた。

姐さんとは毎日と宣言してもいいであろうほど一緒に散歩してるので、そちらの諸連絡だろうか。

「混み入つてるところ申し訳ないのですが、生徒会室に来ていただけますか？」

俺は何もしていない。そう、きっと何もしていない。そう俺は信じている。やっぱり俺は無罪だ！

「入学式の件の罰則がようやく決まりましたので。土岐多さんと天城さん、貴女方も御同行をお願い致します。それと妹さんの件ですが、私も御一緒させていただいてもよろしいかしら。恭子もお連れします」

有罪でした。

妹の所へは、姐さんも連れて行った方がよさそうである。むしろそうしろと俺の脳下垂体が命令を出している。姐さんの満開の笑みを見せつけられては、断る事など出来ようか。大脳のレッドアラートをみすみす見逃す事など、この俺に出来るはずもない。

「是非」

ついでに、姐さん特製弁当をいただきに生徒会室へ赴いた。

「和泉くくおくくそくくい」

こいつは、制服が乱れることも気にせず、レッドカーペットでゴロゴロしていた。本当に昔と何ら変わっていない。こいつの精神年齢はあの時から成長していないのだろうか。

そんな些細な事など気にしないと、姐さんはいつものようにコロコロと笑っている。

「恭子。明日は何か用事ありますか？」

恭子はピタリと動きを止め、猫のように軽やかにカーペットに座った。

「病院行こうと思ってたけど、構わないよ」

恭子 + 病院”。

答えは全く出なかった。落ち着いてもう一度計算してみよう。うん、何度目の計算になるだろうか。式自体が間違っているしか考えられない。

「ブツブツ。ボクは病気じゃないよ」

その発想はなかった。なかった。きっと思考される前に選択肢か

ら排除されていたのだろう。

「では明日よろしいですね？」

「まかせろ！ うっ……ボクの邪気眼が疼くぜえ」

恭子は大きなリストバンドを触りながら再びゴロゴロと動き出した。ちらちらと見える青と白のストライプが目にも毒なのであまり見ないようにしておこう。

「では、まず古賀さん」

俺はどうやら姐さんのお陰で不問となった。あれだけ大々的な事件を揉み消すのは、いくら姐さんといえど時間を要したことだろう。貴重な時間を俺なんかに費やさせてしまっただけで申し訳ない。

土岐多さんは度重なる遅刻への訓戒という名目。恭子の口調は完全に棒読みだった。生徒会長を今すぐ変えた方がいいと思う。

優希に至っては、制服の着崩しの生活指導だった。姐さんの口からではあったが、姐さん自身は許容範囲らしく、数秒の出来事であった。副会長を名誉会長にした方がいいと思う。

——そんな彼女達は、明日どんな反応をするのだろうか。眠り続ける俺の妹を見て。

陸縁

男子寮の門を潜り、自室に戻ると同居人はうつ伏せで寝ていた。床に。頭の中身こそ新生児ではあるが、うつ伏せ寝で死ぬほどヤワではない。

何も言わず足で転がすと、床が濡れているのに気付いた。

「はあ？」

動く気配のない立花を顔が見える様に半分転がしてやると、目・鼻・口から水分がとめどなく溢れていた。正直ドン引きする醜さである。

「……何してんだよ」

洗濯機の前で山になっている服よりもくしゃくしゃな顔をした立花は、何も言わずに半回転し顔を伏せた。

横腹を強めに蹴り上げ仰向けにさせる。しかし、立花は何も言わずに床を濡らしに戻る。

幾度も同じやりとりをしたものの、終わりが来ないのでこちらから折れる事にした。

「分かった。ちゃんと話を聞くから」

立花はようやく首を九十度傾け俺を見た。

「本当に？」

「本当に」

「本当の本当に？」

「その流れは勘弁してもらいたいが、本当だ」

「うん、わかった」

顔を袖で拭いながらようやく立ち上がった立花はベッドへと戻ってきた。

なんとも面倒くさい奴だ。

「まあ、冗談はここまでにするわ」

落ち着け俺。ここは我慢だ。冗談だなんて解っていた事だ。そう

だろ、俺。

「あまり生徒会には近づくな」

いきなりの事で思考が止まってしまった。

「はあ？」

「生徒会には近づくなって言ってるの！」

何を言っているんだこいつは。俺がハーレム状態なのが許せない
とでもいうのか？ お前はどこかと言えばお姉さん好きだろうが。

それに、あれは決してハーレムではない。俺が蛙で姐さんが蛇。
そして俺は蛇の巣に迷い込んだ。そんな関係である。

そんな事を言おうと思ったが、立花の顔は何時になく真剣で茶化
せなかった。

「まずは理由を聞こうか」

立花は命の次に大切であろう電子手帳を俺に差し出した。

「朝倉和泉。彼女程の人に男共が寄って来ないなんて不思議だと思
わないか？」

美し過ぎる故に、遠くから眺めるのが精一杯というような簡単な
理由は思いついたものの、蒸発で覚悟で彼女に近づく人もいるはず
である。そうになると、全ての男が近寄らない理由はこれといって浮
かばなかった。

「そもそも、生徒会が二人ってオカシイと思ったんだよ」

立花は頭を掻きながら、そう呟いた。

「生徒会が二人？」

未だ見ぬ隠れキャラとかが居るとかじゃなかったのか。

立花は電子手帳を指して口を動かした。

「朝倉和泉が他のやつらを追いだしたんだ」

電子手帳にも、その旨が書かれていた。

元をただせば、生徒会は学生の自治組織だった。副会長であった
朝倉和泉は何を思ったのか、生徒会を部活動の一つに格下げし、六
人いた生徒会役員のうち、当時の生徒会長をはじめ五人を追放。空
いた会長の座におさまるかと思われのだが、そこには神坂恭子を置

いて、己は今なお副会長として会長の補佐を務めている。

——姐さんらしいといえば姐さんらしい。が……

「こんな事で男が全然近寄らなくなったとは思いがたいんだが……」
この程度で驚く輩は、姐さんの事を直視した事のない盲目野郎だ
けだ。

「実はな、一番の問題は、当時の生徒会長なんだ」

「当時の生徒会長？」

「先輩方は皆揃えて口を噤むんで、聞き出すのにちよいと時間か
つちまつたけどな」

話したくない程の何かが起こった。姐さんが避けられるのはその
ためだという。妄想しただけで恐ろしいわ！

「朝倉和泉が元会長を殺したらしい」

隣の部屋から、物音が聞こえていた。

聞こえていた。

未だに聞こえている。

「はあああああああああ？」

警察沙汰？ あ、いや。姐さんなら捌き切る可能性も。いやいや
いやしかしさすがにそれは。マテマテマテおチツくんだ。

「命を奪ってまではないらしいけどな」

「で……ですよねー……」

十余年の人生で最も長く、深い溜息が出る。

そうだよ。よくよく考えれば仮にそんな事を起こしたとしても、
姐さんが自らの手を汚すようなマネをするワケがないじゃないか。
そう、たとえば刺客を放ったとか。それだけの動機をたきつけたり、
餌付けなんかして上手い事手なづけたり……。そう、俺みたいな感
じで。

……あれ、俺？

「わかった事は、元会長は朝倉和泉のお気に入りだったという事と」
それもどつかで……見た様な。

「ある日を境に、元会長が消えたという事だけだ」

自然と背筋が伸びた。立花に向かって正座にもなっている己に少し驚いた。

「その後に役員全員追放と来た。だからこそ、先輩方は朝倉和泉に近寄らない」

多分ではあるが、全て本当の事だろう。

「だから、もう生徒会には近づくな。咲乃ちゃんなら生徒会なんて関係なく仲良くなれるだろ」

立花の話は正論である。それに、俺の事を考えてくれている事も解っている。

それでも俺には、姐さんと恭子と会わない日常なんて、もう想像出来なくなってしまうている。

「ありがとな」

立花に電子手帳を返してやる。

「何処行くつもりだ？」

電子手帳を受け取りながら立花は不審そうに尋ねた。

「散歩行ってくる」

もう立花もとづくに知っている。姐さんと俺が毎夜一緒に散歩している事など。

「お前なあ……」

「ありがたいと思ってるが、俺は姐さんを信じたいんだ」

立花は大きく跳ねあがり、俺に背を向けベッドに横たわった。

「それに、生徒会が二人だっていうなら、少しでも手伝いが必要かも知れないしな」

「あー、はいはいさいですか。行ってらっしゃいませ、ごしゅじんさま」

立花は既に俺を背にしたままうずくまっている。

「誰が捨てても、俺が付いていつてやるからよ」

くぐもった声は、確かに俺の耳に届いた。

「気持ち悪いわ、馬鹿が」

それでも、本当にお前と出逢えて良かったと思うよ、立花。

心の中で感謝しつつ、静かにドアを閉じた。

夏も本番に近づき、黄昏時をふらつくには半袖でも心地良い気温となっていた。

寮の近くにある、街灯が照らすベンチが姐さんとの集合場所になっていた。そこは、初めて、姐さんと会った場所である。まだ姐さんは来ていないようで、先程聞いた話について耽りながらベンチに座った。

そういえば、初めて会った時は既に日が暮れていて、この街灯の白い光が姐さんを照らしていた。虫が集まっている街灯を眺めながらそんな事も思い出していた。

「あつ」

街灯の周りを飛ぶ、一匹の蝶を見つけてしまった。

あれは殺さないといけない。でないと、大切な人を連れてかれてしまう。

近くに転がっていた拳程の大きさの石を手に取り、狙いを定め振り被る。

暖かな手が、右手首を掴んだ。

「姐さん」

俺を止めた姐さんは、首を横に振った。

「迷惑になります」

姐さんは、暖かい手を緩めようとはしない。締め付けられる右手から、石が零れ落ちた。

「まずは座りませんか？」

姐さんの顔は優しさをもちつつも、至上命令の体であった。

悠々と座した姐さんに続いてベンチに座る。お互いの視線は、電灯に舞う蝶を捉えていた。

「蝶を殺そうとする理由、お聞きしても構いませんか？」

姐さんは既に俺の過去を調べ尽くしているのだろう。理由についての想像も出来ているのだろう。ただ、確信が無いだけ。

「蝶っていうのは命を運ぶんだ」

「確かに、蝶が人の生死や靈魂に関連するという観念は世界各地にありますね。無論、日本にも」

「実際に運ぶんだ。いや、違う。奪うんだ」

あいつらは奪って行つた。俺の両親を。

「一理あるかも知れません」

「一理？」

姐さんに振り向くと、姐さんは蝶を見続けていた。

「どうせ、俺の過去も調べているんだろ」

「ですが、さすがに蝶が飛んでいたことなんて調べようがありません」

定規がなくとも、点と点があれば線など引ける。例え戦が歪になろうとも。姐さんはわざわざ俺に定規を用意させてまで、真線を引かせている。目的は一体……。

「私は、縁を運ぶ存在と考えています。縁を運ぶに奪うは真。奪うに縁を運ぶは偽。故に一理です」

「縁を……運ぶ？」

姐さんはようやく振り向き、俺を見返した。

「あの蝶が、私達の縁も持って来ているといいですね」

氷を溶かす、春の息吹の様な穏やかな笑み。

「そうだね」

姐さんは普段通りコロコロと笑いだした。

今なら普通に聞けるんじゃないだろうか。

「姐さん、ついでに聞きたい事があるんだ」

「なんででしょう？」

真顔の立花が蘇る。

「元生徒会会長の事なんだけど……」

姐さんの目が微かに開かれ、黒真珠が煌く。

「さすがは立花さんという所かしら。想像以上の早さですね」

姐さんは再び黒真珠を隠し、コロコロと笑いだした。

立花。お前何故か評価されてるぞ。

「本当……なんですか？」

「古賀さんが何処まで情報を得たのか不明瞭ですから、本当か否かとは申し上げられません」

姐さんの目は再び蝶を追いかけ始めた。それに倣い俺も追いかけ始める。

「ですが、彼を壊したのは私。それだけは間違いありません」

「その人は今……どこに？」

「その精神病院を退院した以降は存じません」

案の定というべきか、元会長は精神的に追い詰められてしまっていたようだ。

「退院はしたんだ」

「ええ、なにぶん一時的な事でしたので」

姐さんは事実のみを挙げていた。姐さん自身の想い。答えるとは思えなかったが、それでも聞いてみたい。

「姐さんはさ、その人の事好きだった？」

「私が彼の為に出来る事は、朝倉和泉という存在を思い出させないようにつくこと。それが、私の償いなのです」

姐さんは今、元会長を見ているのだろう。

蝶が電灯にぶつかり力を失くしたが、気絶から覚めたかのように、また羽根を懸命に動かし灯された光へと舞い戻る。

「ですから、私にはもう彼を愛する資格などありません」

何も言えなかった。姐さんは今でも元会長が好きなのだろう。それなのに、姐さんは元会長を諦めた。

姐さんは壊したと言ったが、好きな人を壊すはずがない。何かが原因で壊れてしまったのではないだろうか。

この事を口に出すのは躊躇われたが、さらに一步踏み込んだ。姐さんなら嫌なら嫌だと言ってくれと思うから。

「元会長が壊れた理由とか……聞いてもいいかな」

姐さんは笑いを止め、静かに立ちあがった。

「少なくとも、今はまだ」

一歩、二歩と、姐さんの背中はずいぶん遠ざかる。

「……今はまだ、お話する事は出来ません」

「そっか」

姐さんは保身のためだけに、ひた隠すような人間ではない。何かしら考えがあつての事だろう。俺に出来るのは待つだけ。姐さん自身から話してくれる日を。

姐さんが、艶やかな黒髪で弧を描かせながら振り向いた。

「それでも、その様な日が訪れない事をお祈りください」

その微笑みは、生徒会室でいつも見るものだった。どこか裏がありそうな、それでいて信頼されている様なこそばゆい笑顔。

「そうしとくよ」

それでも予感した。いつか、姐さんは話してくれると。

「湿っぽい話はここまでにして、そろそろ歩きませんか？」

姐さんに釣られ俺も口角が上がった。

「今日は池田第一古墳までなんていかがでしょう」

「いや、夜に古墳は勘弁してください。それに明日見舞い行くんですよね？」

姐さんはコロコロ笑いながら踵を返し、歩き出した。

嗚呼、悲しき運命哉。どれほど批判しようが方向音痴は着いて行くしかない。

「冗談ですよ」

「で……ですよねー」

「猿投神社も今でこそ違うのですが元々は猿投の神を祭っていたんです」

「いや、夜に神社も古墳と同レベルどころかむしろ性質悪く……」

「この地域の縁運びの神なのかもしれませんね」

姐さんが先行する方面。点々と暗い光が灯されていた。

漆縁

十年前、事故が起きた。トラックが自家用車に突っ込み大破。死者が出る大惨事となった。死者は自家用車の運転手と助手席に座っていた人。俺の両親だった。その後ろには俺と沙耶もいて、俺は傷痕すら残らない軽傷だった。その理由はただひとつ。沙耶がクッションとなってしまうたから。沙耶は運び込まれた病院で一命は取り留めたものの、今なおベッドで眠り続けていた。

「ありえない……」

優希の呟き。

「ええ、驚愕です」

まさかまさかの姐さん。

「キレーだね」

微笑んでくれた土岐多さん。

静かな個室で寝続ける妹。沙耶を初めて見た三人の感想である。

「おはよー沙耶」

何故かあいさつ。唯一沙耶を知っている恭子。知っているといっても四歳の頃の沙耶。十年の歳月は起きる事ない沙耶すら成長させていた。

「恭子は除くとして……そこまで驚かれると切なくなるんだが。主に俺が」

沙耶が綺麗なのは認める。起きる事がないので色白で極端に細いのはあるが、造形的に俺には似ても似つかないということだって理解は出来る。しかし、理解出来るからといって認められるかは別問題である。

「海斗も十分カッコイイよ」

「その上で、想像を越えてきた事に一驚を喫したのです」

憐れみは時に傷付けるものである。優希はともかく、姐さんの眩しい笑顔は確信犯。

気分転換に窓に寄る。窓の傍らにある花瓶には鮮やかなガーベラが添えられていた。花を見るとさらに胸と頬が熱くなる。

それは、ここに来る途中の出来事だった。病院の最寄駅に真っ先に来ていた優希に、花はいいのかと尋ねられた。俺の知る限り、沙耶の病室に花が耐えた事は無かったので気にする事はないと言うと、優希はこう言った。

「まっ、華なら十分よね。アンタ以外」

別に上手くないからな。

この台詞を俺が最後まで言いきる事は無かった。途中で遮り顔面ウォッシュが炸裂していた、らしい。

――傍から見ていた姐さん談。

助けても良かったが、どうせ病院へ行くのなら一人ぐらい怪我してた方がいいのでは？と宣言された。いや、いいんだ。姐さんの事だもの。

そういうわけで現在、俺の頬は真っ赤だ。故に、これで格好良いなど言われても憐れみにしか受け止められない。

「沙耶ちゃん、起きると良いね」

土岐多さんの「純粹な笑顔」だけが今の俺の支えです。純粹じゃない笑顔は御察し。どっちも魅力だけはカンストしているので比べる事など無駄である。

ただ、沙耶の目が醒めてほしいかと訊かれれば即答できない自分がある。万物に対等に流れる時間は沙耶も巻き込んだが、沙耶の時計は十年間止まっている。決して埋まらない誤差。それは残酷なノイズとなって目覚めた沙耶を笑い続けるだろう。生きる限りいつまでも。

「沙耶ちゃんの笑顔見たいな」

エヘへと声を出しながら綻ぶ顔は、幸せそうに見えた。

「ああ、俺も見たいな。沙耶の笑顔」

それでも、もう一度沙耶の笑顔をこの目で。

「そんなの簡単だよ。ほら」

恭子は沙耶の口角を指で上げさせていた。

「あ。ずるーい。アタシも触らせて」

悪ノリして沙耶に抱きつく優希。このレイプ魔め。

「暖かーい」

「ねー」

「二人して何してんだよ！」

「女だけの世界に入ってこないでよ」

「入らせねえよっ！」

「あ。ちよつとトイレ行ってくるね」

土岐多さんのジャイロボール。高度過ぎて俺には捕れません。

「咲乃。待ってるね」

「待ってて、ゆーちゃん！」

土岐多さんまで乱入されたら俺にはもう止められない。というかガン見させて頂く。姐さんかというと、ずっと入口で考え事をしてるようで動く気配もない。

——ここが、最終防衛線。

最大の敵。それは優希。恭子など摘んで放れば終わりだが優希はそうはいかない。何か格闘技経験でもあるのだろうか、油断すればヤラれるのは俺の方だからだ。ならばこそ、狙うは優希の弱点のみ。
「おらあ！」

優希の背後を取りつつ、短いスカートをまさぐる。しかし、なんで休日まで制服なんだ皆。

「ちよつ。何してんの変態っ！」

硬いボツボツ、これだ。獲物を捕えた。

「あっ」

スカートから出てきたのは携帯電話。ラインストーンとラメ加工の超絶デコレーション済み。これこそが、優希の弱点。

「無……無駄よ。ロック掛ってるし」

「内容なんてどうでもいいんだよ」

「どうでもいいと言っな！」

「データを見るんじゃない、失くすんだよ」

「変態っ！ 鬼畜っ！」

「さっきまで百合な世界繰り広げてた奴が言える事じゃ——」

咄嗟に首を亀張りに窄めると、白い脚が髪を掠めた。

当たり前だが、それだけに留まらない。蹴りを主体にしつつも、突きに捌め手、肘まで繰り出してくる。

天城優希の染色体再検査を要求します。こいつがXX染色体の持ち主であつてなるものか。

次々と繰り出される手加減無用の連撃を危なげながらも捌ききつた所で反転、病室から飛び出る事を決意。さすがに廊下でまでスリートを舞わせはしないだろう。

障壁をスライドさせると目の前に白衣の男がいた。

「逃がすかああ」

俺を捉え損ねた優希の飛びヒザは、黒縁眼鏡を細い身体共々吹き飛ばした。傍目から見て交通事故並みにグロい衝撃映像である。

「……」

優希、フリーズ中。

なうろーでいんぐ……………。

……動く気配が無い。

「ただいま」

土岐多さん帰還。服も目も白い被害者を物珍しい視線で捉えている。

ふと、恭子と目があった。一流サッカープレイヤー並みのアイコンタクト。

全てが一つとなる。

「逃げるぞ！」

土岐多さんの腕を掴むと、階段目指して全力で駆け出す。しかし、土岐多さんは状況を把握していない様で、走ろうとしてくれない。その間にも、ロード完了した優希を先頭に、恭子が追隨して階段へ墜ちてゆく。

姐さんは未だ病室から出ていないが大丈夫であろう。誰だって優希のとばっちりを受けたくはない。ぱけーっとした土岐多さんになすりつけるわけにもいかないが、このままでは危ない。

土岐多さんの身体を抱えあげ逃走を試みる。ファンシーに言うなれば、『御姫様抱っこ』して逃避行。

アハハハハ！。幸せ！

階段を何十段と駆け下り、待合室の様々な視線を掻い潜りながらも走り抜ける。

九割の幸せと一割の恐怖を抱えながら病院から逃げ出す事に成功した。

病院って出入り禁止とかにはならないよな……？

邪推しつつ、自分の出来うる限り優雅に土岐多さんを降ろして差し上げ、携帯の電源を入れた途端、音を立てて携帯が鳴り始めた。

『大丈夫だった？』

「ああ。そっちは二人一緒か？」

『うん。駅前まで避難してきたとこ。あ、見つけた』

俺達の後ろに聳える看板には、駅から徒歩五分と大きく表示されている。

いや、確かに駅までの景観は開けてはいるけど……。どんだけ全力で駆けて行っただあいつら！

手を振っている凸凹コンビが見える。顔までは分らないがあれに違いない。恥ずかしい奴等だな本当。

「行こうか」

「うん」

既に切られた携帯をポケットに押し込み、ゆっくりと歩き出した。駅と挟まれたただっ広い交差点。赤い信号が俺達を止めていた。

「あの……」

少し俯きながらもアイコンタクトを試みる土岐多さん。意図的なのか知りませんがその上目使いは危険なので公共の場では止めて頂きたい。二人つきりなら是非。是非。是非。

「ゆーちゃんきょーっちも、古賀君の事下の名前で呼んでるよね」
きょーっちって恭子の事でしょうか。すごく言い辛いし分かり辛いです。

「だからね、わたしも呼んでいいかな」

この展開は……この展開はっ。俺も咲乃って呼んでもいいんだね。
「海君って呼んでもいい？」

君付き。なんですかそのサッカーとフットボールの違いみたいに微妙な距離感。

しかし、ここで負ける事無かれ。

「モチロンさ。俺も、咲乃って呼んでもいい、かな」

流れるには了承されるだろうが安心してはいけない。なぜならば相手が咲乃様だからだ。普通に「ダメ」と言われても納得出来てしまっ御方だ。

「うん、ありがとう」

不安をよそに咲乃の返事は満面の笑みだった。

赤い信号は青と変化し、歩み始めた。一歩一歩、確かに。

先に待っている二人は飽きずに手を振っていた。

捌縁

初夏である。中間テストが鎌首もたげて近づいてきても、俺は生徒会室でなすべき使命を遂行していた。

「ハア……ハア……ハア……」

「もう……いいな？」

「……待つて。まだ……出しちゃダメ」

「ハア……ハア……ハア……んっ」

「もうダメだ！ もう出すからな！」

「ダメええー」

「おりゃ！ クイーンのフォーカードによる革・命！」

今は生徒会室にて俺、咲乃、姐さん、恭子の四人でにぎにぎと富豪を開催していた。優希は何を思ったのかランニングマシンを引っ張り出し、絶賛息切れ中で水分補給。「んっ」とかガキの●いの笑ってはいけないシリーズ警察編での、窓口のお茶飲みまくるおばちゃんが出てくるからやめてくれ。

「で……優希はなぜにそんなのやってんの？」

ミネラルウォーターを補給し終えた優希は渋々ながら語り出した。
「んっ……見たまんまダイエットよ。最近油断してたらちよつと……」

数日前、事件が起きた。表沙汰にはなっていないが、優希が男数人に暴力を振るったのだ。

男数人というのは取り巻きの一員で、必要以上に優希に迫ってしまったのが原因。優希は単に父親の面影を持つ男と仲良くしていただけだというのに、一部の男には違うベクトルで受け取られたらしい。ハアハアしながら集団で取り囲まれたそうだ。

幼いころから喧嘩に明け暮れ、付け加えてかの通信空手を習った俺が全力で相手しても勝てるかどうか微妙な相手だ。そこらの奴では圧倒的な数で押し切らない限り、歯が立たないことであろう。結

果として、男共は例外なく血祭りにあげられ、病院送りとなった。

姐さんの水面下の根回しによって、事態が白昼の元に晒されることはなかったものの、取り巻きが何人も病院送りになっていれば当然噂は広まる。一説には、俺、古賀海斗が暗殺したのではないかという噂があるが、これは全くもって事実無根である。なんで俺がそんな事をせねばならんのだ。まあ、咲乃にちよっかい出す奴がいたら丁重にお消えいただきますがね。行き先は三河湾。

「実際体重とか個人的にはどうでもいいと思うんだけど、やっぱりそんな大事？」

恭子で遊んでいる姐さんが答えてくださった。

「私も気にはしませんけど、大抵の女性には大事なんですよ」

「そうそう。胸でかいとか、お姉のように身長高いとかでもないと余計目立つんです！」

なぜかキレ気味に優希。その辺はドンマイとしか言いようが無いんだけど。そもそも優希って現状でさえ細過ぎると思うんだが。

小さい順に——と言っても恭子以外大差ないのだが——恭子、咲乃、優希、姐さんと、顔より少し下へと視線を移す。姐さんが唯一平均と言われる域に達するか否かである。

「まあ、神様も全て与えるわけじゃないって事だな」

三人の殺意が集中し、口による集中砲火が入った。

「またボクを侮辱したな——！」

「どうせ世間的にちっちゃいわよ！」

「そんなにこの制服似合わない？」

咲乃はいつも通りというべきか……。スカートが少し短いと思いますが似合ってますよ。

「ダメですよ古賀さん。大抵の女性は気にするものですから」

姐さんは気にしてないご様子で一人梅こぶ茶を啜って一息ついてた。

ああ、本日は梅こぶ茶なんですな。あれも美味しいお茶である。隣では優希が再びランニングを始めていた。

「まあ男遊びが減るのはいいんじゃないか？ 親としてもその方が嬉しいと思うぞ」

優希にとつては普通に友達と遊んでいるだけなんだろうが、周りはその見てくれない。何度も異性交遊を理由に生徒指導を受けているのも事実だ。

「ああ……親は何にも言わないから」

優希は声を詰まらせた。今までに見た事のない反応。父性を異常に求めている辺り、何か理由があるのだろうと思っではいたが、そのような複雑な問題らしい。

「家庭は人それぞれですよ。私の家は厳格ですので、そういう放任主義は羨ましいものがありますね。神坂さんの所も自由でしたね」

こういう時、姐さんの心配りが効く。まずは話題自体は変えず、扱いやすい人物に移す。それをいとも自然にやるのだ。ここでアイコンタクトを図れる自分が誇らしいね。

俺の発言でこんな事態になった事を忘れる事が可能な話だが。

「ボク？ どうなんだろ？ 咲乃は？」

お前の所は放任主義だったろ。どうやら土佐ジロー以上に放し過ぎで精神年齢が止まってるようではあるが。

「お父さんとお母さん？ もういないけど、優しい人だったよ。といてもお母さんは私産んですぐ死んじゃったし、お父さんもずっと前に死んじゃったんだけど」

こんな所にも地雷が埋まっていたなど、誰が予想しただろうか。

このメンバーで家族関係の話は御法度と、我が裁判所は判決を下す。

どうこの話を切り換えるべきなのか。俺には経験不足でそんな話術スキルそもそも持ち合わせていない。情けないが、姐さんに託そうと思う。

姐さん、助けて

「お父さんつては凄いいんだよ。筋萎縮性側索硬化症っていう珍しい病気だったんだから」

確かに聞いたこともない病名だが、そんな楽しそうに言われても

笑えるはずがない。人として。

「筋萎縮性側索硬化症と言うとあれですね。古賀さんは知ってます？」

姐さんまでのらないでください……。今この場の雰囲気を変えれるのは貴女だけなんですから。恥かしい事に。

「どうやら知らないようですね。筋萎縮性側索硬化症と言うのは発症確率こそ低いものの、罹患なさると確実に死に至る難病です」

「必ず死んじゃうの？」

意外というか、やはりというべきか。興味を抱いたのは優希だった。

「現在ではまだ確かな治療法が無いはずです。他にも類似の症状がいくつかありまして、それらを総じて進行性筋萎縮症と呼んでいると記憶しています。なにぶん、うる覚えですので鵜呑みにしないでくださいね」

何故そんな事をご存じなのだろう。普通は知りませんよ。などと思ってもさすがは姐さん。雑学で皆を虜にしまい先程までとは違う雰囲気になっている。

「筋萎縮性側索硬化症の症状としては……土岐多さんは御存じかと思われませんが、まず全身の筋肉が硬化し始め、筋力が低下します。筋肉とは何も運動時に使うものだけではありません。例えば、私達の心臓は心筋と呼ばれる筋肉を使って全身に血液を送り出しています。心臓に限らず、肺を膨らませる横隔膜も筋肉です。そのような筋肉全てが硬化していくので死に至るのも当然のことです。また、障害を受けるのは運動神経のみですので個人差はあるものの、平均として息を引き取るまでの約三、四年の間、苦痛が続くそうです」

まともに呼吸も出来なくなっていくのに、苦しみが安らぐ事は死を迎えるその時まで訪れない。希望の一つもない病。

「お姉って物知りなんだね！」

「さすが和泉♪」

純粹に褒めるおばかさん達。乳酸菌取ってる？

「以前そんなお話を伺った事があるんです」
あの……そんなの一体いつ、どこで伺ったんでしょう。

週末。沙耶の見舞いも終わり、暇だったので三十分程掛けて名古屋まで出てみた。親族がお金だけは振り込み続けてくれているとはいえ、そう使えるもんじゃないので何かを買うなんてつもりは毛頭なかった。単に定期テストの気分転換みたいなものである。例え、全く勉強しなくとも、こういうのは大切ではないだろうか。

滅多に來ない名古屋の地下街を彷徨っていると、見慣れた人物を発見した。

遠くから一番分かりやすい人物。それは、姐さんではない。姐さんはオーラを隠せるように、隠してしまえば漆黒の黒髪で日本人ばかりの街中に溶け込む事が出来る。恭子も同類だ。そして咲乃は名古屋に來ない気がする。

消去法にする必要もない。そこにいたのは、優希だった。

金色が織りなす双対の髪尾を揺らしながら闊歩している優希の隣には見知らぬ男が居り、二人は始終笑顔だった。

眺めていた所為か、優希が俺の視線に気付いて振り向いた。

優希はただでさえ大きい目を広げ、口も半開きになった。

そんな新鮮な反応されても困る。ギザ十を使ってまでお釣りを無くすか、諦めて札を出すべきか悩むぐらい困る。

手を振って返してみると明らかに機嫌を悪くし、男そっこのけでこちらに詰め寄って來た。男も気付いたのか、俺を睨みつけながら優希の後を追う。

「何で手なんて振んのよ」

「こっちに來る方がオカシイだろ！」

「知り合いに会ったものの、声を掛け辛いから手だけ振ったとか、そんな距離感ってアタシ一番嫌いなもの！」

「分かってんならそれでいいだろ」

「嫌いとも言ってんでしょ」

もっと反論したかったが、口が動く前に男が優希の隣に追いついた。こちらを舐め回す様に観察している。同性に凝視されて喜べる性癖はまだないからマジ勘弁してくれ。

「なあ、優希。こいつ、誰？」

軟派でゆとりな代名詞が似合う喋り方をする男。この喋り方には隔靴搔痒の感がある。

男の方も俺の敵意を察したのか、目を細めて顔を近づけてきた。時代錯誤甚だしいうえ気持ち悪い。

我慢出来ず、ついつい頭が出てしまった。

「いつでえ！」

抑えきれない俺と頭を押さえて蹲る男の間に、優希が立ち塞がった。

「ちよつと何してんのよ海斗！」

「条件反射だ、仕方ない」

「仕方なくなんて無いわよ！」

やろうと思っただけやったんじゃない、自然に動いてしまったただけだ。何故、ここまで責められなければいけないのだろう。

言葉にしたい気持ちにも駆られたが、口に出せば何か崩れ落ちる気がした。

優希の目も、本気だった。

一度、大きく深呼吸する。肺が空気で満たされ、身体のすみずみまで酸素が行き届く。

「悪かった。俺が悪かったよ」

これが最善なのだろう。既に周囲にはヤジ馬が集まり始めている。これ以上事態を悪化させないためにも、三十六計逃げるに限る。

「じゃあ、またな」

「待って！ 海斗」

優希の白く細い指が俺の肩を掴んだが、俺はその指を振り切った。

「海斗！」

「あのなあ」

恥ずかしいのであまり人混みの中で名前を呼ばないでいただきたい。

そう忠告しようと後ろを振り向くと、先程まで蹲っていた男が目前で右腕を振り被っていた。

咄嗟に後方へ飛び退きながらも、左足で男の右脚の付け根を軽く蹴って距離を取る。

男の拳は俺の遙か前で振り落とされた。

「危ねえだろ」

距離を保ちつつも吐き捨てやった。

「ああ？」

しかし、男の眼は既に血走っていた。

「ちよつと！ 雅も海斗も落ち着いてよ」

「俺は落ち着いてるっての」

尋常じゃないのは、雅とかいう奴だけだ。

「テメエもどうせコイツの身体目当てなんだろ？」

雅とかいう奴の醜惡な笑顔を見た時、何かが弾けた。

「ああ？」

こいつはそんな目的で優希に近づいているのか？

「俺がたっぷり楽しんだら渡してやつからよ。今は消えろ！」

イラつきはもう限界を越えていた。

俺の理性は死海まで飛んでいき、水面でプカプカと浮いていた事だろう。

帰って来た時には目の前の男が血塗れで倒れていた。

忌まわしき中間テストが目前に迫っていた。しかしそれ以上に、

生徒会室が静かである事に焦燥感を覚える。

名古屋で目撃して以来、優希が学校に来ないからだ。いつも何かと突っ掛かってくるやつだが、何日も居ないとそれはそれで淋しいものがある。

「ゆーちゃん今日も来ないんだね……」

ここ最近、静かな生徒会室に咲乃の眩きが響いた。

咲乃がそんな事言々と俺も一層淋しくなる。なんで優希とあんなに仲良いんですか……。

ふと、姐さんと視線が合った。

かの名古屋駅地下街暴力事件も、姐さんが水面下で動いてくれたらしい。あれだけのギャラリーがいたのだから、相当な労力が必要だったのは確かである。

本当に、本当にすいません……。

姐さんは軽く息を吐き、お茶を啜った。

「優希さんは今、家に帰る事もなく男性を取つかえ引つかえして遊んでいる様です。最近は落ち着いてきていたのに至極残念です」

な……なんて破廉恥な！ いや、想像はつきますけども。また勘違い野郎共によって暴力事件が起きるのは時間の問題ではなからうか。

「実は昨日、彼女を見つけて指導しまして。今日はお母様と一緒に家にいるようにと忠告しておきました」

懐深い姐さんがそこまでするのは珍しい。優希は姐さんですら許容出来ない一線を画してしまったのだらうか。

などと思いに耽っていて今まで気付かなかった。何故か俺に集まる視線。

確かに淋しいとは思った。ああ、認めてやる。この静かな生徒会室は何か足りないのだ。しかし、だからと言って他人が関わるようなことではないと思うぞ。家庭内で解決すべき問題だ。俺が出しゃばっちゃいけないんだきつと。

「お願いね……海君」

咲乃による会心の一撃。気付いた時には既に退路は全て断たれていた。ただ、前進あるのみ。

「恭子。優希の住所――」

「ダメ！ ぜったいダメ！」

生徒会長による拒否権の発動。いつもなら諦めるだろうが今日はワケが違う。優希はやっぱここにいてほしい。連れ戻せるものなら連れ戻したい。それも俺の本心。

「頼む恭子！ 強き心を取り戻せ！ そして失った誇りを呼び返せ！ 観柳邸で止まった時間を動かすのは今なんだ！ 目醒める時は今なんだ！」

「二次元が初恋じゃダメですか？」

こ……このアマやりやがる。俺の発言が、る●剣の台詞且つ、う。われるものラジオの三宅×也さんがゲストの回を聞いていないとこんな返しは出来ない。困った時の姐さんヘルプ！

「恭子。いざという時に判断出来ないのは貴女の悪い癖です。しかし、それは私がどうこう申し上げても治る訳ではありません。そこで、こういうのはどうでしょう？ 私はこの紙を古賀さんに渡します。その代わり、これでどうでしょう」

姐さんがヒラヒラさせている紙の内容は俺には見えないが、恭子には見える様になっている。それを見た恭子は数秒間微動だにせず、ついに動き出したと思うとふてくされて渋々許可をした。

「では古賀さん、これを」

渡された紙には優希の個人情報が入っている書かれていた。なんと準備のいいこと。つまりはこの取引、俺が大損する仕組みだったと言う事か。相変わらず姐さんは底の知れない御方である。

姐さんに渡された紙の内容を読み、俺は優希の事を全然知らなかったという事を悟った。

優希には二つ離れた姉がいた。そう、いたのだ。もうこの世にはいない。

俺にはよく解らないが、姉は容姿端麗、頭脳明晰。それだけに親

の期待は非常に大きく、長女を悼んだ両親は、自助の優希の育児に興味を示さなくなり、冷めきった二人は別居を始めた。優希は今、母親の元にいる。優希が父親の面影を求めているのもこの辺りが大きな要因となっているのだろう。

中学の頃には既に男を侍らしていた優希は、同性から強く妬まれ、虐めの対象にもなっていた。あまりに陰険なイジメに耐え切れなくなったのだろう。クラス、学校を巻き込んだ大騒動を起こし、一ヶ月の停学を食らった。それがこの高校に進学した一因でもあるようだ。

「安心できました？」

目を通し終わると同時に、姐さんがコロコロと笑いながら尋ねてきた。どこに用意していたのか、右手には扇子まで握られている。

「えっと……どの辺りに安心する要素が」

姐さんは華麗に広げた扇子で口元を隠した。広げられた扇子には、口に出すにはためらわれる漢字二文字が大きく、赤文字で、書かれていた。

「ですから、優希さんも処——」

「姐さ——ん！」

姐さんの言葉を掻き消せれた事を祈る。

高校から遠く離れた地。車でも一時間近くかかる場所に、優希の住まう屋敷があった。

フィクションなんかでよく見る、大金持ちが暮らす広大な敷地。庭だけでまことちゃんハウスが何軒建てられるのか気にもなる。

「こちらアルファ。予定通り一九〇〇時より作戦を開始する、どうぞ」

姐さん情報によると、優希の家はセキュリティが張り巡らされており、残念な事に立花に手伝わってもらっている。本当に残念なこと

である。

そんな事も知らずに本人はやる気満々で音標記号を使っている。二人しかないと言うのに何の意味があるのだろうか。どうせ死がふたりを かつまでのシエラにでもやられたんだろう。

しょうがないので別作品でノってみる。

「古賀、出る！」

俺は塀を飛び越え侵入を試みた。

センサーに関しては全て姐さんに任せている。産地を公表する野菜よりずっと安心度が高い。

問題は囷となる立花。ここ天城家では三人の使用人が仕えてえているらしい。立花が三人、ないし二人を引き付け、その隙に俺が優希の元へ行くことになっている。

「来た！ 二人だ」

もう一人はどこにいるのだろうか。己の周りを警戒してみるものの特に気配は感じない。

「ヤベツ。あとは……任せた」

「ああんっモット！」という悪い意味で鳥肌の立つ断末魔を最期に、立花との通信は切れた。流れるのはノイズのみ。さらばだ立花。それはもう永遠に。逢ってももう近づかないでくれ。

という馬鹿やる暇はない。急がねば二人が戻ってきてしまう。案の定立花がやられたのもう特攻しかないのだ。案の定。やっぱり大事な事だから二回。

姐さんが調べ上げた警備のスキ間をかくぐり、室内へと踏み込む。

——今更なんだが、こんな事出来たなら姐さんだけで良くないか？ 俺っていらない子？

ややあつて、入ったのは地下。十分ほど前の情報によれば、優希は三階の部屋にいるそうだ。

外は初夏らしく、半袖だと肌寒い程度であったが、地下は輪をかけて冷え切っている。

吐いた息が白い煙と化す。

三階までの道のりがとてつもなく遠く感じる。外にいる使用人達がいっ戻ってくるかもわからない。見つかるわけにはいかないのだ。相反する焦りが身体を締め付けてくる。もう三階まで走り抜けよう。天城邸の見取り図を思い出し、部屋までの最短距離を手繰る。

——行こう。

飛び出したその先に、黒衣の青年が立っていた。いわゆる執事というやつか。

「お前が海斗か」

自分のことを知っている。こちらの事は調査済みという訳か。使用人の待ち伏せ。どうすべきか、俺。

「今なら何もなかったことにしよう、帰れ。これ以上優希様に近づいたなら、しばらく病院で過ごしてもらおう」

どうするも何も無い。やはり、後退などあり得ない。もう、迷わない。目の前にいる相手を、退けていくだけ。

幾度かのフエイントを入れ、右から切り込んでフックを放った。

「交渉決裂、だな」

気がつく、歪んだ床を這い、左側が真っ黒に染まっていた。左の瞼が熱く痛む。距離を取りながら立ち上がるうとした所で、ぼんやりとした頭でもようやく確認できた。

左瞼を裂かれたのだ。理解した頃には視界のブレが多少治まり、血が止まらないことにも気づいた。結構深い。頭が痛い。吐き気がする。

——この感覚が、懐かしい。かつて暴れ続けていた自分を思い出す。

自然に笑いが起きていた。熱いはずの頭の中が、冷めていく。おそらく優希に稽古をつけているのは、この執事であろう。ほんの一撃ですら、優希と同じ体捌きだと確信出来た。

最大まで引き付けてからのカウンター。当たると確信出来たその

時、防御への意識が薄れ、その甘くなつたガードを抜いてくる。

「優希様はもうお前に会いたくないそうだ。大人しく帰れ」

「んなもん知るか。そもそも訳の分からん男共捕まえているなら、俺一人会つたつて構わんだろうよ」

執事の眼光が一層鋭くなった。

「もう一度だけ言う。大人しく帰れ」

相手は自分よりも格上。弱者が強者に勝つためには、奇策しかない。しかし、片目を潰されたというのは非常に不利。

思いつく作戦はただ一つ。失敗すれば病院暮らしは免れない。それでも……

——そこにしか、道がないのなら。

再び、一気に距離を縮め、懷に飛び込んだ。

片目の距離感など曖昧なもので、タイミングがずれてしまえば、迎撃されるだろう。

それこそが、罠。

相手の右肘を俺の左腕で捌く。左腕の骨が軋んだが、その痛みをした唇を噛んで耐え凌ぐ。

そのまま、上半身を左へと捻じり、右肘を最短距離で執事の顎へと振り抜く。

衝撃は無かった。

右肘は執事の顎が合った場所を虚しくも通過した。執事がどこにいるのか、分からない。

——カウンター。

「終わりだ」

背中の方から、冷たい声が響いた。

いくら執事とはいえ、距離を取りきれてはいまい。超至近距離からの、ダウンさせられる程の攻撃。それを、背中から。

首。

敵である執事を信じ、左手を後頭部の方へとまわす。まわしきる前に、視界が大きく揺れ、外側から黒く染まっていく。それでも、

中央にはまだ光が射している。左手がクッションになつてくれたに違いない。それでも、踏み止まれる力など残っていない。頭から、崩れ落ちていく。

否、踏み止まる必要など無い。

——カウンター返し。

視界は近づく床を通り過ぎ、天井を仰ぐ。

造り出した遠心力の全てを、左足に懸けた

「あたれえええ」

胴廻し回転蹴り。

「ええええええええええ！」

確かな感触がした。と思う。自分だけを見れば、前宙を失敗して右肩から床に激突した状況である。右腕は痺れなのかわからないが、動いてくれる気配もない。それでも、左足に確かな痛みを感じた。立とうと思つても立てなかった。壁を頼りにして、強引に上体を起こすと、執事は仰向けで気を失っていた。当たるか微妙だった胴廻しだったが、運良くクリーンヒットしてくれたようだ。

世界の歪みも、吐き気も治まらないが、一刻を争う。これ以上、障害物は一つとして越えれない。三階の部屋まで何も無いことを祈るのみ。

「ま……まだだ」

振り返ったその先には執事が立ち上がっていた。足元もおぼつかない様子で、それでも確かに二本の足は彼自身を支えていた。

「お前などに優希様は渡さん！」

前方に立ち塞がれている訳ではない。無視して三階へ行つても良い。むしろ他の事を考慮するならば、無視した方が得策である。

だがしかし、俺はこの執事が嫌いではない。

「お前は多分……勘違いしてる」

俺はただ、優希も生徒会室に居て欲しいんだ。じゃないと、咲乃が悲しむ。ついでに、俺としても傍に阿呆が居るに越した事はない。俺はあくまでついでだが、な。

右半分の歪んだ世界が平衡感覚を狂わし、右腕も動かない。それでも重い左拳を掲げ、構えた。

執事も足を震わせながら、構えをとっていた。

「お前の事情など知らん。優希様の頼みは唯一つ」

執事は曲折しつつも速度を乗せて迫ってきていた。

「私はそれに応える！」

執事が消えた。否、左側の暗黒に潜られた。

後退すべきか、前進すべきか。一瞬の駆け引きを余儀なくされる。

選択は、体当たり覚悟で前へ。

「うおおおおおお」

平衡感覚が完全に無くなる。自分でも何が起きたのか全然分からない。視界が黒く霞んでいき、意識が遠のいていくのが分かった。

終わりを告げようとした世界が、歪な影を捕捉した。

その影は、微笑んでいたのかもしれない。あれこそが執事だ。そんな気がした。

息を吸い込み、今にも千切れそうな左腕を執事の胸元へと伸ばす。掴める全てを握りしめ、息を止めて己の全体重を掛け、引き寄せる。踏ん張りの利かない俺も、同時に執事へと迫る。

鈍い音が響き渡った。

数多くの強敵を沈めた技。頭突き。

既に視界がおかしくなっていたのに、頭突きをしたものだから、頭が余計に響く。それでも、今回も例外ではない。額に残るのは、後を引く心地良い鈍痛。

何故、こうして俺が今立っているのか。それは全く分からない。分かっていたいと思わない。とにかく、俺は勝てたのだということとで十分である。

足元にうつ伏せで眠った執事に今度こそ別れを告げ、満身創痍の重い身体を引き摺りながら階段を上る。その間にも幾度となく意識は薄れ、平衡感覚も一向に戻らない。それでも踏ん張り、一步一步近づく。

遂に、目標の扉が眼前に現れた。意識の糸が切れかけたマリオネツトに、今一度言い聞かせる。

——あと少し、あと少しだけ耐えてくれ。

引扉は、静かに開いていく。

重厚な扉の先に待ちかまえていたのは、優希だった。口を動かしていたが、よく聞き取れない。

言いたい事を考えてきた。けれども、それは言葉にならず、空気となって口を出て行った。

優希が、頭に付けた二本の尾を揺らしながら駆け寄ってきた。

優希は胸に飛び込んできた。俺にはもう踏ん張る力など微塵も無い。優希を受け止めることなどできず、仰向けに倒れてしまった。

胸を何度も叩かれた。さっきのような倒しに来る様な力強さは無い。しかし、叩かれる振動が頭に響く。何度も、何度も、何度も。

張り巡らせた緊張の糸が解けてきた所に、乾いた拍手が響いた。

音の先にはいくつものディスプレイがあり、そこには恭子と姐さん、そしてもう一人いた。霞んでいたので良く分らないが、おそらく優希の母親なのだろう。少なくとも、咲乃ではないことは分かった。

「残念ですが咲乃さんは諸事情で居ません」

「退くのだ和泉。ふふふふふ……。ついに……ついに！ この邪気眼を晒す時がっ！」

どうせこんな事だろうとは思っていた。全ては姐さんの掌で踊っていたに過ぎなかったのだ。

薄れゆく意識と、暗くなってゆく世界の中で、頬に冷たさを感じた。

傍らまで寄ってきた姐さんが、濡れたハンカチで顔を拭ってくれていた。

「お疲れ様です海斗さん。後は、おまかせください」

まるで臨終を看取るような言葉の中に、姐さんの真意を見たような気がした。

「ああ。まかせた、姐さん」

何度も離れかけた意識の手。俺は、今度こそ手放した。

雀の鳴き声で目が覚める。開かれた視界は、どこか仄暗い。左目に触れてみると、包帯が巻かれていた。

辺りを見まわそうと頭を動かすと、脈打つように痛みが響く。自分、この痛みとは立花以上に仲良くせねばならない様だ。

「おはようございます、海斗さん」

激しい頭痛を堪えながら起き上ると、姐さんがお茶を啜っていた。「ステイックタイプのしいたけ茶ですけど、飲みますか？」

朝一番に姐さんの頬笑み。普段のならば昇天確定。しかし、今は姐さんの目の下にうつすらと隈があり、本日の頬笑みパワーは半減していた。

「遠慮しときます」

「そうですか」

姐さんは残念な素振りも見せる事無くお茶を啜る。あれって確か十本で何百円とかいう普遍的な品なのだが、姐さんが啜っているだけで高級感が醸されている。

今一度、痛みを堪えて辺りを見回す。

まるで人かと思ううちっこい人形が、床に転がって寝息をたてているが流す事にする。

恭子が心置きなく転がれる生徒会室の二倍ほど大きな部屋。その部屋には高そうな調度品がいくつか置かれており、その最たるものが自分が座っている王室みたいなベッドであろう。

「ん？ 海斗お？」

ふいに優希の顔が、眼前に現れた。口から洩れた涎を拭こうともしせず、うつろな目を擦っている。どうやら、気付かなかっただけで傍らで寝ていた様だ。

「優希さんが手当てをしてくださったんですよ」

姐さんがいたけ茶を啜りながら、仰った。

「ありがとな、優希」

涎を親指で拭いてやると、優希の白い顔に朱が差したように思えた。顔を伏せてしまつて、優希の顔を確認出来ない。が、伏せていた顔はすぐに上げられた。

「ねえ、今のもう一度やらない？」

「だれがやるか！ 汚ねえな」

わざわざ涎を出しやがるな、阿呆め。

「まあ、冗談はさておき」

不意に、優希が微笑んだ。

「お礼を言わなきゃいけないのはアタシの方よ」

包帯越しに濡れタオルを当てられた。切られた左臉上はまだ熱を持っているようで、タオルの冷たさが心地良い。

「海斗とお姉のお陰で、またパパも一緒に住めそうなの」

優希の笑顔はとても幸せそうに見えた。

俺は暴れただけで、ほとんどは姐さんのお陰だろう。

「海斗さんの雄姿と優希さんの想いが、優希さんのお母様を突き動かしたのです。私は一押しさせていただいたまでです」

しいたけ茶を啜った姐さんが、ほっと小さな溜息を吐いた。

「というわけで」

優希は額と額が当たりそうな程まで寄ってきた。

「ありがとね」

額に軽い衝撃が走った。優希に悪意はないのだろうが、頭痛が増長され正直物凄い痛い。

それでも、何故か笑いが込み上げてきた。

昨晚、執事と対峙した時の様な冷めていく笑いではなく、自分が暖かくなる様な笑い。初めての感覚だった。

「なんて事ないさ」

「そんな姿でよく言えますね」

しいたけ茶を啜る姐さんから漏れる小言に、ぐうの音も出なかった。

少し湿った額。ご褒美にしちゃ、充分過ぎると思うだろ？

玖縁

「世の中金やあ！ 裁判だって金で解決しとんのがええ証拠ばい」
期末テストも終わり、教室の後ろに貼ってあるカレンダーには大きく夏休みへのカウントダウンが始められていた。無論数字を減らしていくのは立花とその一味である。

そんなクソをつけたくなるほど暑い中、相変わらず政治経済の時間に金の素晴らしさを熱く語る馬鹿教師。それに熱心に耳を傾ける馬鹿立花。世の中馬鹿ばっか。

「つーわけでえ、玉の輿相手募集してまゝすう」

シヨタコンということ暴露すんなと心の中で叫ばせてもらった俺も馬鹿。

「ん……そんなにお金つて重要だと思う？」

違うクラスのはずなのに俺に耳打ちしてくる優希。いくら夏休みまでの消化試合であるといえ、試合会場くらいは守っていただきたい。ちなみにこいつは馬鹿ではない、阿呆だ。

「あゝでも、他で許嫁ならしゃあないから百万で許したるう！」
すまん優希、俺が間違っていた。ここは単なる宴会場だったらしい。

そんな俺と優希のやりとりを見て、頬を赤らめている咲乃は天使様。あの、優希とは何にもないですから。

二ヶ月程前、俺は優希宅へ侵入し全治一ヶ月の怪我を負った。

怪我を負った直後に優希が復学するともあれば、あらぬ噂が起るのも道理である。特に朝倉和泉様を崇める会辺りから、韓国からのF5攻撃に匹敵するのではないかという攻撃もあった。どうでもいい事であるが、その会は現存しない。誰かの手によってデリートされてしまった。そう、誰かの手によって。誰とは言わないからなともかく、真実を知っている人はあの現場にいた人達のみ。咲乃は諸事情があつたらしく、あの現場にはいなかった。当事者である

俺が話しても説得力は皆無なのは明らかで、姐さんはそんな状況を面白がっているのか、何も話そうとしない。優希と恭子は姐さんに口止めされているクチだろう。

つまりは誰も、咲乃にあの日の出来事を正確に伝えていないのだ。俺が優希の家へ行った。優希が戻ってきた。

この事実だけを編集し、真実を歪にしたのは、立花の所業。なんと業の深い事か。血の池地獄で溺れてしまえ。

「おっ、時間だぎゃ。ほな先行くわぁ」

ぴつちり五分前に授業を終え、エセ教師は去っていく。アレは教育委員会に報告した方がいいのではないかと思いつつ、優希のグチに付き合っているとチャイムが昼休みを告げた。

「咲乃。海斗。ご飯行こ！」

「だから……お前最近居過ぎだつて」

「……嫌？」

そんな上目使いされても知りません。悔しい事に否定も出来ません。がね。

「いつつも仲いいよね二人」

咲乃さん、それはあんまりです。あくまでアナタのオプションみたいなもんですよ優希なんて。誰が好んですと一緒居たいなんて思いますか！

「なんか今すつごい失礼な事考えてない？」

「滅相もございません」

心の中見透かれてるんじゃないかと疑心暗鬼に陥る。

日常と化しつつあるこの風景が無限ではない事。それは分かっている。でも、出来る限り続いて欲しい。その為に出来る事はしていきたい。

以前、己に誓った事を改めて決意すると、教室内にノイズが走った。

「一年の古賀海斗、土岐多咲乃、天城優希は至急生徒会室に来てください。繰り返しです——」

機械的な発音。しかしそれは恭子の声だった。恭子があんな話しかつをするのを聞いた事無いうえ、普段校内放送を占拠しているのは姐さんなので、人違いという考えが拭い切れなかった。それでも不安がよぎり生徒会室へと駆けた。

「和泉が来ないの」

第一声がこんなでは誰でも拍子抜けだろう。確かに姐さんが来ないのは不安よりも不思議と違和感があるが、どうせ長くても数日の事に違いない。俺にはそれ以上に知りたいことがあった。

「さっきの放送本当に恭子か？」

「あれはボクの対力ノツサ機関用の言葉である。……っていうか、そんな事より和泉が大変なの」

驚嘆に値する事実がどうでもいいぐらい、姐さんの身に何が起ったのか。宇宙の果てを想像するぐらい想像出来ない。ひよつとすると、人類を凌駕したのか？

——それぐらいなら、恭子の声のが驚きだ。

「和泉がもう学校に来ないかもしれないよ……嫁いじゃうよ……」

……「パードウン？」

「和泉が嫁いじゃう……」

「と……トツグ？ 誰だその羨ましい且つ可哀想な奴は」

俺の裏返った声が生徒会室生室に響いた。

「何組って言ったかな。その次期頭って言ってたよ」

カシラ。現代を生きる俺達には山賊等が存在してる感覚はない。考えうる使い方は危ない、そう、大手だと山。組だとか黒い社会しか想像出来ない。

恭子は組と言ったからきつとそうなのだろう。そうになると、そこに嫁ぐ姐さんは――

「一つ聞いていいか？ 姐さんの家庭事情って……」
いくらガキに見えようが恭子は生徒会長である。それ故か知らな

いが、生徒会長スキルというのか、感化能力は人並みにはあるようだ。

「和泉の家は浅倉組の一人娘だよ」

薄々そんな世界の人じゃないかと思っっていたんだ。けれど、俺は真実から目を避けていたのかもしれない。

なあんてかつこよく決めていきたいが、そんな俺には不可能な事だ。姐さんの家庭事情がどうであろうが、姐さんは変わらない。しかし、そうなるのひとつの疑問が残る。恭子は何故慌てているかだ。たかがと言っては無礼だと思うが、嫁ぐ程度である。今日は挨拶とかで休みと言った所ではなからうか。また学校来た時に、話したい事を話せばいいのではないか。

「だから、嫁いだら和泉はもう学校に来ないの！」

だからという接続詞はおかしいと思うが、学校に来ないというのは聞き捨てならん。

「ちよっ……待てよ！　どういう意味だそれ」

「ホリケン？　いや、ホリ？」

突っ込むなら木村拓哉にしてくれ、咲乃。

空氣的に突っ込む雰囲気じゃないし、そもそもホリなんて神功開宝ぐらい古いと思うんだ。嘘です、さすがに飛鳥時代は行き過ぎました。

まあ、空気読まない咲乃も魅力的なんだけどね。

「ボクもよくは知らないけど、その筋の人に嫁ぐと完全に裏の世界の人になるから表にはいられないとかどうか。でもこんな別れ方ボクは嫌。だからかーくんをお願いがあるの」

とつくに治ったはずの頭が痛む。嫌な予感がある。

「……何だ？」

だが、姐さんに会えなくなるのは、俺としてもお引き取り願いたい。奈落以外なら喜んで火の中水の中、飛び込んでやろうじゃないか。

「婚談を潰してほしいの」

実に思考時間、一秒あつたかなかつたか。

——そこは、奈落。

「無理。さすがに俺殺される」

こんな時、姐さんがいなくて良かったと感じる。いたら微笑まれて終わりかもしれない。視線だけで動物の息の根を止めるスキルと
か持つていても納得できるお方なのだ。

「それに……そう。某幻想楽団による未だ見ぬ地平線が俺を待つて
いるんだ」

「ボクの邪気眼が覚醒していたら……くそっ！」

恭子は意味もない左手のリストバンドを擦っている。ガン無視し
つつの中二病は大概にしてくれ。

「そついえば、さつきかーくん連れて来て欲しいってメールきたん
だ」

恭子の手中にある携帯のディスプレイには、要請内容が映つてい
た。

——古賀さんを。

——今すぐ。

——よろしくね♪

全てを読まなくとも、この断片だけで把握できた。

これはお願いではない。強制だ。

偽造という可能性が無いわけではないが、恭子がそんな事すると
は思えない。そうなるとこれは本人からの強制文であつて……。

微笑む姐さんと背後の禍々しいオーラが脳裏を、そして体中を駆
け抜ける。全感覚が告げる。これは不可避たる Fate。Shad
e。Destiny。キラ無双。

何とか現実逃避しようとしている自我を保ち、恭子に正面から向
き直る。

恭子は、背筋を伸ばし敬礼していた。つられて敬礼してしまう。
二階級特進だけは勘弁願いたい。

「それでは軍曹。頑張ってきてくださいね」

こんな事をされたら、答えは決まっている。

「イエス・マム！」

生まれて初めて、フル×タル・パニックを恨んだ。

姐さんの連絡によると、今病院にいらしい。連絡通り病院内にて指定場所で立ち尽くしているわけだが、柄の悪いオジサンがウヨウヨしていて、巨大マンボウの精巢の画像を見るぐらい気持ち悪い。「おかしな光景でしょう？」

いつの間にか、廊下に姐さんがいた。いつもの制服ではなく、落ち着いた色の和服を羽織っていた。表情はいつもと変わらず微笑んでいるが、いつもより荒々しい感じが向けられた。

「えっと……こういう世界の人って公共の病院使っんですか？」

いつも完璧な笑みが微かに歪んでいた。あまりに些細な変化だが、今の自分には分かる。それほどまでに姐さんの笑みは芸術的なのだ。「勿論使いますよ。ただ、いつも多額の投資があるので隠れていますが、今回は恥を晒してもらおうと、敢えてこういう行動を取らせていただきました」

予感がありましたけど、案の定仕掛人はアナタ様なんですね。怒気も三割増しで、平然を装うので精一杯です。

それにしても、どのどいつですか。姐さんを怒らせた原因は。そして己の命を危険に晒しているお猿さんは。

院内を響かせる攻撃的な足音が急速に近づいて来た。

角から現れた人物は、左頬に大きな傷痕を残した強面のオッサンだった。

「嬢ちゃんか？　こんな真似をしやがったのは」

ストロベリートークとはかけ離れたものだったが、こんな加齢臭プンプンしそうなオッサンに乱入される道理も無い。邪魔者は邪魔なりに弁えてほしいものだ、全く。

「口に出てますよ、海斗さん」

私こと古賀海斗。時世の節句を急遽継がねばならないようです。

ああ、おじ様の目つきが江田島平 に似てますわ。

「貴方も随分と肝が据わってきたみたいですね。実に喜ばしい事です。江・島平八なんて知ってる人は、あなたの年代には少ないと思われるが。それと、その貴方。こんな真似とは心外です。先に手を出したのはそちらです。彼には注意しておいていただけます？ 体を許可無しに触るから、こうなると」

姐さんが味方だとこれほど頼もしいとはさすがです。姐さんがいなかったら、僕、おじ様に睨まれた時点で、この世の終焉を肌で感じられました。

そもそも、姐さんに狼藉を働こうなんて自殺行為なのだよ、ワトソン君。

「さっきから下手にでておけば若の事愚弄しおって！ 死に晒せや！」

仮にもここは病院である。そこで尖った光り物を堂々と出す大人を見た事があるだろうか。

——ある。注射の針とかである。

では、十七歳の女性がドスの刃を握り、大の大人を吹き飛ばす光景を目の当たりにした事はあるだろうか。

——俺は今、目の前でスロー再生にて直視した。

テレビでも見る事の無い衝撃映像。オジサンはあらゆる関節があらゆる方向に曲がっている。グロテスクでモザイク処理が必要なくらいの衝撃。

「姐さん？ これ、死んじやつたんじゃない？」

「ちゃんと生きてます。死んだほうがいいと思える苦痛とは思いますが。その様に加減しましたし、所詮は護衛術です」

いいえ。護衛術なんて遙かに凌いでいます、姐様。

今日ほど本物の武術と通信空手の格差を感じた事はないです。

ドスを掴んだ姐さんの左手から鮮血が垂れていた。出血量こそあまり無いが、止まる気配もなく、流れ続けている。

「姐さん、手！」

姐さんは左手を見つめ、何度か手を開いては閉じ、俺に微笑みを返してきた。

「骨までいつていませんし、神経も大丈夫そうです」

この御仁に勝てる人などいないのではないのでしょうか。尊敬の上の言葉は崇拜でいいのだろうか。崇拜という言葉すら生ぬるい。崇拜の上の言葉を教えて欲しい。

姐さんはそんな事より話があると言ったが、先に無理矢理病院で手当てして貰い、騒動が収まりそうになかった病院を二人で抜け出した。

今は姐さんの強い要望によりファミレスで話す事になった。

「いや、なんでこんな所？」

和服では目立つので着替えようと提案したものの、洋服が一着もないという姐さんは制服に着替えていた。また、姐さんの目の前に焼鮭定食とホットレモンティーが置かれた。さすがに合わないだろうと思いつつ、何も言わない事にする。

「いつもは親が許してくれないのですが、今は尾行もいないので来てしまいました。嫌でした？」

笑顔は歪みのない、普段の完璧な笑顔へと戻っていた。

姐さんとふたりつきりで嫌なわけが無い。しかし、姐さんの先程の発言。

——いつもは尾行されていたと受け取っていいんですね？

毎夜の散歩は二人つきりじゃなかったんですね？ シニタイ。

「その事に少し関係がある話です。今回の事の発端は私のお父様の組の後継者がいないという事です。そして、私を嫁がせて合併しようという魂胆だったのですが、先程拒否致しましたので残された道は二つ。組を解散させるか——」

再度、頭が脈打つように痛み始める。

姐さんはホットレモンティーを注ぎ、香りを確かめながらも言い

きった。

「媚を連れてくるか」

また嫌な予感がする。そんな世界に住みたくないです。

「安心してください。私としては、解散させるのが最善と考えています」

ホットレモンティーを上品に啜る。

「やはりレモンを入れてしまうと紅茶の風味が台無しですね」

「はあ……」

少し困ったかのように微笑む姐さんがとても珍しく、まともな受け答えが出来なかった。

姐さんはティーカップを机に置くと、再び語りだした。

「しかし、お父様は病気を患って余命幾分しかない身。息を引き取る前に、少しながら不安を取り除きたいと思っています。ですので、尾行の報告の中に度々出ている貴方に、媚役を演じていただきたいとも思っています」

姐さんが鮭の切り身を口にするのを見ながら血の気が引くを感じた。

組長とやらに挨拶。いちゆとり学生には荷が重すぎる。

目の前のドリアはもう冷めかかっていた。

流れに流され気が付いた時、目の前には虎がいた。

「おめえさんが古賀海斗かい？」

殺意すら感じられるその迫力。まるで魔法少女が魔王と呼ばれる所となったシーンを、映画館上映で一列目から見た様だ。つまり、姐さんの父親だけはあると言う事だ。

「皆さん下がっていただけます？」

改めて頭の整理をしたい。

俺は半ば強制的に、姐さんの家に連れていかれ、床に伏した虎の前に投げ出された。そして何回か学校で見た記憶のある男が、その虎に耳元で報告し、今に至る。

周りには姐さんと虎様しかいなくなつた。何をされるのだろう。もしかして拷問されるんじゃないのか俺。エンコ詰めるんで、タマだけは勘弁してください……。

「和泉い、なんで断つちゃうん？」

——猫がいたような気がした。

誰の発言なのか、全く分からなかった。消去法の結果と、その解を否定する思いがせめぎ合う。背理法とか必要なのかしら。すいません意味分かってません。

姐さんは動ずる事も無くお茶を啜つた。部屋中に広がる香ばしい薫り。過去の経験則からするとこれは黒豆茶だ。

「和泉。僕は普通の緑茶がええなあ」

「丹波の黒豆茶ですよ？」

完璧な笑顔は反論を許さない。

やつぱり虎が猫になつたとしか考えられないようだ。

虎といえど子に弱いのか、それとも姐さんが強すぎるのか。

「断つた件は、私の許容範囲を侵してきたからです。それに私はあの方を好きになる事は有り得ません。反論も受け入れません」

反論 も なんですな、わかります。

虎様の視線は何故か助けを求めてきているが、部外者である俺に出来る事など何一つないという想いだけ目に込めて返信を試みる。

虎様は小さく唸つた。

「あつ。吐血して布団とか汚さないでくださいな。布団が汚れますから」

このお蓮さん発言。さすがに吐血ぐらい許してあげてください。

虎様は何事も無かつたかの様に力力力つと笑つた。

「で、あんちゃんは何用かえ？」

先刻まで伸びきっていた糸が、突然張り詰められた。

いや、部下がいる時よりはずっと自然体であるのだが、それでも威圧感がある。普段から姐さんと居なければ、気を失ったかもしれない。四ヶ月近くも姐さんと関わっているのだ。何とか平然を保て

るよう賤けされているのが救いだっただ。ワン。

「ほう。あんちゃん、肝っ玉据わつとるな」

強くなった虎様からの威圧感が、急速に萎んだ。そこに反比例し、姐さんから紅黒いオーラが目認出来る。

「お父様。寿命の前に、私の手で、人生の幕を閉ざしてさしあげましょうか？」

「すんませんっしたあ！」

大猫は小さくなり子猫へと退化したようだが、すぐに大猫へと戻った。

「海斗様は、私の愛する方です」

大猫様は啞然。俺は興奮。まさか姐さんから海斗様なんて呼ばれるなんて、至福。嘘でも姐さんから愛する人と言われるだなんて、至福。

——いや、極道はお断りですけどね。

「ホンマか！ あんちゃんやるのー！ このじゃじゃ馬をよー乗りこなしおるの」

ハッハッハッ。そんな人間存在しませんよ。俺も忠告されていいますから。「私が貴方に許す最短距離は十九センチです」ってね。二十センチよりちよつとまけてくれたんでしょうか。よう分からんがな。がはははは。

「どこまでいったんよ？ ええ？」

大猫様。同性にもセクハラは存在しますからね。それに、裁判まで時間掛らない様な、横からありえない冷気が洩れてきてますから

……。ご愁傷様です。

「お父様。冗談はお辞めていただけませんか？」

「冗談をしてるのはどっちだ。なあ、和泉」

虎は姐さんに動じるどころか、冷氣すらもあつさりと呑み込んだ。

「去年と同じ過ちを繰り返えずつもりか？ 和泉よお」

「それは」

四つの瞳が俺を射抜いた。

「海斗さん次第です」

えーっと……なんか責任重大？　ですよね。

「海斗さん」

「は……はいっ！」

「以前、元会長の話をした事を覚えていますか？」

皆で沙耶の見舞いに行く前日の事。あの時は姐さんは今はまだ話せないと言った。

「もう想像もついていると思いますが、原因はこれに関連する事です」

ええ、『これ』ですね。代名詞にしてくれているのが姐さんの優しさなのだろうか。

「去年、健嗣さんはここで崩壊してしまいました」

姐さんは俺との間にある、畳縁を指した。

「退くならば、今が最期。私を信じていただけるのならば、其処を越してください」

吹き飛ばされそうな威圧。鳥肌を立ち、身震いが止まらない。

たった一步。それだけなのに、ベガとアルタイルの様に遠く感じた。

かつて、姐さんが惚れ込んだ男ですら挫折した困難。それを俺なんか越えられるのだろうか。

「あんちゃん」

虎様と目が合った。返事をしようと思いつつ、乾ききった喉は空気を漏らすだけだった。

「一步踏み出す。それだけじゃ」

姐さんの笑顔の様に、虎様の目は優しくも厳しさが見えた。

「じゃが、少しでも悩むぐらいなら静かに去れ」

有無を言わせぬ、野太く低い声。

すべき事は、この目の前の畳縁を越えるだけ。それなのに、足は竦んで進んでくれない。

虎様が息を吐いた。それは、諦めの印。

終わってしまった……。

どうして、たった一步が出なかったのか。後悔ばかりが募りゆく。
「なあ和泉。もうええやろ」

姐さんが立ちあがる音がした。

「海斗さん」

息の掛る域にまで近い場所に姐さんの究極にまで整えられた顔があった。

「今一度、本質を見つめてください」

「……本質？」

「ええ。老いぼれの余興に付き合う事でも、畳縁を越える事でも無いはずです」

「和泉？」

「何か、勘違いなされていませんか？ 海斗さんはまだ諦めてはいません」

そうだ。一体……何を血迷っていたんだ俺は。これは虎様の威圧に耐え抜く事とか関係ない。諦めたくないという気持ちだけで、周りをなにも見ていなかった。

姐さんが求めている事。

「何があっても、俺は姐さんを信じるよ」

例えどんな事が訪れようと、俺は姐さんを信じて進む。それだけである。畳縁を跨ぐのは、その為の一步でしかないのだ。

自然と俺の左脚は、目の前の畳縁を跨いだ。

「という事です」

大猫様は頭を掻き毟った。

「いや、反則じゃろ……」

「反則はお父様のが先です。脅して平常心を奪おうなどと姑息なマネを」

大猫様は視線を逸らし、口笛を吹きながら外を眺めて始めた。
「おっ。そうじゃ」

不意に好奇心溢れる猫目は俺に固定された。

「和泉。お前これからあんちゃんと行くんじゃない？」

「ええ」

何処に行くんですかね。いえ、なんとなく想像出来ますけど。出来れば当たって欲しくない場所ですが。

「万が一うちゅう事もあるわけだ」

「その万が一も起こさせるつもりはありませんが、絶対に起きないと保障はし兼ねませんね」

やっぱり万が一ということもあるんですよ。きっと、怖い人ばかり居る所ですよな。

「そうじゃろなあ。そうじゃろなあ」

どう見ても企み顔。何を考えているんだこのサディストは。

「じゃあ、ちゅーぐらいここでせーよ。ええやろ？ そんぐらい。

こつちも古い先短いこの身。和泉の晴れ姿を見る事も無いんじゃないへん。誰かが死ぬ前に、明るい未来うちゅうんを見せいや」

織田信長も吃驚のサディストっぷりだよ！

仮にそれを実行すると姐さんとの距離は零となり、俺の命の保証も零である。同時に、病院での、死んだほうが良さそうだった人が浮かぶ。ああなるぐらいなら、出来る限り痛みが無い様死んだほうがいいかもしれない。

「いや……あのですね……」

——あれ、でもさっき顔近づいた時、数センチでした？

「愛し合う仲、なんじゃろ？」

虎様の声はかの天・竜閃すら破った虎伏絶・勢より低い。今日感じた姐さんのどのオーラよりも暗く深く感じる。体温が下がり続け、全身が硬直する感覚に陥る。

「出来ん、言うんか？」

前方の虎、後方の狼。どうしようが僕の命はありません。というか、さつき己で冗談だつて決め付けただろ。今更そーいうのは持ち出さないでいただきたい。

「別に構いませんよ。ねえ、海斗さん」

それは……咲乃への気持ちが揺らぎかねないので遠慮したいが、これ以上遠慮したら命を取られかねない。

——せめてここは男らしく。

目を閉じ、少しためらったが勢いに乗せながらも軽く唇と唇を重ねた。

何秒経ったのか。ゆつくりと唇を離していった。

「あんちゃん。口と口とは期待以上の事をしてくれるのう。イヤン」

……ほえ？

目前に降臨されている現代神、姐さん。その姐さんが動かない。今、口には出せないけど謝らせてください姐さん。すいません。すいません。すいません。ですから命だけはお許しを。

世界を暗闇に閉ざし、全てを委ねる。

しばらくしても、世界は何も変わらなかった。左目を開こうかとしたその時、肩に手をそつと置かれた。

断罪の時がやってきた。自然と、肩に力が入った。

塞がれたのは、口。とても柔らかく、ほんのり黒豆の香りがする。何をされたのか分かった時には、暖かく甘いものが入ってきていた。

「おおおおおおお」

大猫様の歓喜が耳に入るが、すぐに薄れていく。

それでも俺は健全な高校男児である。姐さんに舌まで入れられて、理性が保てるわけがない。俺にも出来る事を姐さんに尽くした。絡めたり、吸ってみたり、甘噛みしてみたり。

やがて、口と口が離れる。

恍惚とした姐さんの表情に、初めて人間らしさを感じた。美しさの中にある可愛らしさを、初めて見た。

再び求め合いかけた時、姐さんが止まった。姐さんの顔を覗くと、既に人間味は消えていた。

「まあ、あんちゃんありがとよ。母ちゃんに似ちまった和泉に男が出来るなんて……夢のようだよ。もう安心して逝けるのう」

アナタの嫁さんはこのような方でしたか。ずいぶんとご苦労した事でしょう。

あと勝手に死亡フラグ攻略しけないで。

それから。

突撃した俺達は何とか目標を達成した。何とかというのは、負傷者も少なからず出たからだ。とはいっても姐さんは擦り傷程度を数ヶ所。俺も打撲程度で済んでいる。一度、銃弾により、隣に置かれていた花瓶が破裂した時には漏らしかけたが、何とか踏み止まった事は内緒だ。

基本的に二度と思い出したくない出来事だったので、多くは語るまい。

一段落ついた後も、姐さんによるキス等の御咎めは無いようで、また、虎様もまだピンピンしてるとの事。

夏休みが明けても、姐さんは未だ上の空でもあった。

「海斗これ何！」

優希の手には、今日俺のロッカーに入っていたピンクの封筒が握られていた。

隠していたはずなのだが、何故優希が持っているんだという疑問は持つだけ無意味である。

「止める！ 俺もまだ確認してないんだよ」

「見るんだ！ カノッサ機関からの警告文かもしれない。あいつらは危険だ！」

中二病は黙っていただけないと、色々ややこしくなるんです。おわかりかしら。

まさかそんな古典的な……と思いつつ開けるに開けなかった封筒。それはパスされた恭子の手によって、高々と朗読された。

——内容は、想像通りだった。

優希と恭子は大騒ぎし、咲乃は意味を理解してないようだが、とりあえず騒いでいる感じた。

もう俺の手では止められない。

「お姉も何か言ってやってよ」

上の空だった姐さんはわずかに瞑想し、普段の雰囲気に戻った。

「皆さんに言っておきたい事があります」

皆が、姐さんに注目する。

姐さんは一呼吸おいて、未来の事へのアドバイスらしき事をした。

「本妻足る者、余裕を見せましょう」

それは今までで最高の笑顔だった。

拾縁

二学期にもなったというのに、引き続いて水泳の授業があるというのはどうなのだろう。確かにまだまだ暑いが、秋は着々と近づいてきている。

普段は二クラス合同で、男女別々で行動している。しかし、今日は男子の担当教員が急な原因不明の体調不良を起こし、また、まるで狙ったかのように、他の体育教師も授業があり、学校側は様々ながら女子との合同でその問題を収束させた。それに従い、ある資本家によって寄贈された、無用の長物と化していた特大プールを、生徒会が予測していたとは思えないスピードで準備していたのだ。生徒会というよりは姐さんのスピードというべきだったかも知れない。

それにしても、この学校は使わないであろう場所が多い。よくもまあそんな金があるものだ。中には、体育館よりも大きい『調理実習館』もあつたりするのだが、調理実習室があるので使われる気配もない。

「おお……神よ。我等はあなた様を敬う事を誓います」

ほとんどの男子が、一人の漢をアツラーのように拝んでいた。教員に何かをやらかした事について拝まれている立花。俺の立花を見る目はひどく冷めているが、異様に熱いエルサレムへの効果は皆無に等しい。

「古賀はあの中に入らないのか？」

程良く鍛えられた鎧を纏う少年が話しかけてきた。

俺を除けば唯一、イスラム教の様を傍観している。クラスの最後の砦と勝手ながら思わせていただいている男。名を南風原将という。南風原は、入学当時から俺を明らかに敵視している。優希と再会した際、それは確信へと変わった。最近では薄れてはいるようだが、それでも一歩引かれているのは違いない。

彼女一筋の南風原は、この間もドラマに少し出演するからと高らかに宣伝してきた。本当に少しで――時間にして三分ぐらいの出演で――あったが、中々に見どころのある女優さんだと思った。

そんな女優さんにとって南風原将という存在は、可能性の一つとしてスキヤンダルになりうる一因になる存在。しかし、彼女はアイドルではなく女優。むしろそれで名が売れるのなら、進んで出ると言い切った。本当に彼女に全てを捧げ、他の女等どうでもいいのだろう。

「入らないに決まってるだろ。それにもし荷担したら、あの中央付近で罪悪感にかられてるだろうね」

実際に何かの要請があったが、多大な犠牲を贅に断っていた。どんな犠牲かは考えたくもない。睡眠時間が削られるのは必至。ぴびるぴるぴるぴるぴる……な事である。

「まあ……」

女子の集団から目的の人物を探すまでに一秒。今日もレーダーは良好だ。隣が目立つっていうのもあったが。

「咲乃が授業参加するなら、別の話だったかな」

咲乃は体育を必ず見学していた。今日も例によって見学席で布面積の少ない派手な水着を着た優希と談笑している。

「少しでも感心した自分が愚かだった。……ああ、愚かだったよ」

南風原の淡い期待を裏切ったところで、ゴングは静かに準備を始めていた。

この学校には指定水着が無いので、様々な色の水着が目に入る。特にプールサイドにある人が成した山から。

まだ授業時間の半分も消化してないのに、性少年は性春の情緒が抑えきれなく、女子からの反撃により沈む者で溢れていた。

わざわざプールサイドに揚げて山を作る南風原は優しいのかとふと疑問に思いつつ、その山を凝視する。怪我の程度は人それぞれではあるが、一番酷いのは立花だった。優希に手出したんだから当然と言えば当然なのだが、さすがに哀れみを受けずにはいられない。

ヨモツヒラサカに行つて魂の記憶を集めながら助けに行つてやつてもいい。

当然ながら、今までの貸しをチャラにしてくれるのならの話。でなければ、即座に振り返つて一人逃げ帰つてやる。

そんないつもの様にくだらない事を思つていた時。いつかを思い出させる、突然の校内放送。

ゴングが、遂に成り響く。

「授業中失礼しまゝす」

誰がどう聞いても恭子の声。しかも、生徒会長の恭子ではない。いつもの幼い恭子。職権濫用しすぎだと思つぞ、生徒会会長。

「古賀海斗君。前の約束覚えてるね？ そうです。デートは今週の土曜に決定しました。わゝパチパチパチ。ボクの邪気眼がもう疼いて仕方ないよ！」

前の約束。それは、初夏の事。姐さんが優希の個人情報と条件に言う事をひとつだけ聞くという事だった。

その願ひ事の概要は、皆と遊んでいた、夏休みのとある日に宣言されていた。

——古賀海斗と一日デート。

この強制的なデートにマイ人権はどこにあるのだろうか。その時は、何時かはそのうち決めておくと云つていた。それがいきなり今週の土曜とは、いくらなんでも急過ぎるだろう。さらに。そう、さらに、だ。

そんな事を今言わなくなつていいと思う。

本人は自覚してないだろうが、恭子のリビングゲッドの呼び声は、プールサイドの山の、アンデットを、呼び、起こ、して、しまつて、いるんだよおおおおおお。

「きょーち嬉しそうだね」

「あつ咲乃も思つた？」

「わかるよぉー」

その御二人方。ほのぼの会話しないでください。そんな事して

る間にも、俺は追い込まれていくんです。

俺の悲鳴が虐殺の号令となり、澄み渡る蒼い空は真っ黒に塗り潰された。

土曜日。まだ栄誉（？）の傷は完全に癒えていないが、ドタキャンすると後が怖い。先ほど寮室にて、ゾンビと化した立花を擦じ伏せるといふ重労働を終え、集合場所にやってきた。集合場所は名古屋の栄。以前に優希の事もあって、あまり良い思い出はない。しかし、高校の周りには何も無い。市街まで三十分を要する。行った所で市街は廃れている。猿投高校周辺の人間にとって、そんな場所よりも一時間で行ける名古屋を選ぶのは当然の選択だった。

そろそろ約束の三分前。恭子が現れる頃合いである。

「お待たせしました。恭子ちゃんのとーじょーです」

服装なんかには良く分からない俺ではあるが、恭子の服装は多少オカシイとも思う。小学生が着ていそうなカラフルな服装なのだ。左手の大きなリストバンドがより幼さを強調させている。だがしかし、そこはスルーさせて頂く。

「さあ、行こうではないか」

ここは「待った?」「ううん。今来たところ」という流れになるのがベタというものではないだろうか。俺も一度でいいからそんなやりとりをやってみたい。しかし、恭子とはそんな仲ではないと考え直し、目を瞑る事にする。

隣を歩く恭子は、上目使いで俺を見た。身長の差的に自然と上目使いになっているだけだが、大きな目だけに小動物が連想される。

「その傷、大変だったみたいだね。ボクって隠れファンが多いらしいから。和泉情報だけど」

姐さん情報なら確かであろう。認めたくはないが。

隠れが多いのは、好きだとなると十中八九口リコンだと思われる

からではないかと推測しかけたが、立花がなんか言っていたのを思いだした。

「ロリな面とお姉さんの面のギャップもたまらん」との事。中二病であるこいつに姉属性などありえない。どこから見出したのか聞いてみたい。単なる幻覚だと証明してやろうではないか。ただし、万が一という事もあるので、今度姐さんにも聞いておこう。

「近くで騒がれると余計傷が痛くなる。だから今日はもう喋らないでくれ」

「この男ツンデレめ。傷は舐めると良くなるんだよ。傷口出して」舐めたら口の菌が入るだけだと思う。舐められたくもない。思い出させないでくれ。

しかし、恭子は本気で顔を近づけてきやがった。
「だから、止める!」

左手で頭を押さえつけるが、全然怯む様子がない。耐え切れず右手で恭子の左手を掴むと、リストバンドに触れてしまった。

恭子が、勢いよく俺の手を振り払った。

「邪気眼に触れるは危険だ」

恭子は左手を引き戻し、リストバンド越しで左手を擦っていた。

「ぐう……邪気眼が疼いてる」

本当に……扱いに困ります。

何とか気を取り戻したのは昼。腹の具合からして、既に無意識の内に昼食は摂ったようだ。俺は大須で買い物に付き合わされていたデートというより荷物持ちが正しいと思う現状。そう考えるとなんか気楽でいいな。

「これ似合う?」

「ああ。もちろん似合わない……」

見る前に言いかけ、見た瞬間。俺の時は止まった。

綺麗や可愛いの種類ではない。とりあえず、ないったら、ない。

ゴスロリ服を着ている恭子にただ絶句した。

「……そんなのどこにあった？」

恭子は俺の後ろを指差した。

不思議に思い振り向く。すると、肩元にそいつはいた。

「強くなれ、ハ×ヲ。俺を倒せるぐふおっ……」

手始めに立花を一閃。そういえばこいつ、最近ネットゲームを題材にしたゲームを徹夜でやっていた気がする。「揺○は俺の嫁！」とか叫びながら。

立花が目を覚まさないうちに、遠くへ走る。ゴスロリ服を着せ替える時間も惜しかったので、恭子にプレゼントという事にしてお金だけ払ってそのまま出てきた。まさか生涯で一度は言ってみたい台詞ベスト四位であった「釣りはとっとけ」を本当に言う時がくるとは思いもやらなかった。

今日、これ以上何かあるとこちらが持たない。ただでさえライフ少ない状況で来たのだ。既に心身は限界を超えている。

「マジで勘弁してくれよ……」

軽く眩暈すら覚える。

「よっし。帰ろう！」

「もういいのか？」

個人的には非常にありがたい。しかし、まだ小腹が空く程昼食から経っていない。世の中ではこれからデートという人達もいるであろう時間。

「ただ、最後に猿投神社だけ行きたいのだ」

「猿投神社に？」

「うん、いいでしょ？」

「そのくらい構わんが……」

知る人ぞ知るといふ言葉が似合うはずの猿投神社が最近の人気スポットなのか？

名古屋から猿投神社へ。地下鉄を使うわけだが、ゴスロリ少女を連れての道中だという事に気が付いたのは、上前津駅内だった。一駅ごとに人が減っていく豊田線とはいえ、最悪な気分である。そん

な視線で指さないでっ！

一六になって間もない俺にはまだ原付免許もなく、自転車が主な交通手段となる。親に送ってもらったという恭子を後ろに乗せ、最寄駅からペダルを踏み続ける。

誰だ。そのぐらい構わんとか言った輩は。遠い。遠過ぎる。最寄駅が全然最寄じゃない。キンモクセイの香りを嗅ぎながら、汗を流すとか勘弁して頂きたいものだ。

「さあ、今こそ路上の鳥居をくぐるのだ」

黄色い鳥居をくぐり、道路を横断する。すると、ようやく現れた総門の横に自転車を止めた。

「久しぶりだなあ」

恭子は自転車から降りると、すぐにはしゃぎだした。っていうか久しぶりに来たんだ。なんで今来たいだなんて言っただんですか貴方。お陰でこっちは汗まみれでシャツが肌にまとわりついて気持ち悪い。

「かー君ここ見て」

「ああ？」

恭子は総門の柱を指していた。

「ほら、これ」

凝視してみると、一部分だけ決られていた。

「こりゃ酷い。誰だよ、こんな事したの」

恭子は何故か俺を指差した。

「かー君」

恭子の即答。それは、マイハートを酷く傷付けた。

「俺だっけ……？」

幼い頃にそんな事をした様な記憶もある様な無い様な。

「ボクはちゃんと覚えてるよ」

恭子が左腕のリストバンドを掴んだ。

「ぜ……お……るよ」

「え？」

俯きながら発した恭子の言葉は、よく聞き取れなかった。

近づこうと一歩踏み出した時。恭子は勢いよく顔を上げ、元気に言い放った。

「ううん、何でもない！」

やっぱり変な奴だ。

「奥まで行こー」

恭子は走っては歩き、ふと進む俺の元まで戻ってはまた走ってゆく。まるで子供だ。

「そういえばあと二ヶ月もすれば祭りか」

「うん。棒の手とかあるね。ちゃんと屋台も並ぶし」

「へえ」

幼い頃に見に来たはずなんだが、やはりあまり思い出せない。思い出せるのも酷く断片的なものばかりだった。

「ここに来るチョコバナナは、バナナよりパインのが美味しいんだよ」

「そんな超ローカル豆知識いらねえよ！」

そもそも、美味いかどうかなんて個人によりけりだろうよ。

参道の先にある広場には、中央に拝殿、そして、人を遮る中門が建っていた。中門の先は、見えないようにされている。

恭子は拝殿で足を止め、それ以上、中門に近づかない。

「どうかしたのか？」

「実は刃物って苦手なんだよね」

「刃物？」

見渡すと、中門に奉納された鎌がいくつもさげられていた。遠目からなのでよくはわからないが、鎌の側面にはそれぞれ文字が書かれている様だ。

そんなのがあったような記憶はあれど、実際目に見てみると、変に思える。

「何なんだあれ」

「かー君知らないの？」

恭子は知っているのに俺が知らないっていうのは、馬鹿にされた気持ちになる。一応恭子のが二歳程年上なのだが、精神年齢は御察しなので、そんな思いを持ってても致し方ない。

「猿投神社って大碓命を祀ってるんだって」

以前、姐さんから聞いた事を思い出した。かつては猿投の神を祀っていたそうだが、祭神も変わっている様な事を言っていた。それが大碓命という事だろうか。大碓命が誰か知らないが。

「大碓命っていうのはヤマトタケル——小碓命——と双子の兄弟だった人なんだ」

「やけに詳しいな。久しぶりとか言ったくせに」

いつもは際限ない無邪気な笑顔。しかし、今の恭子には限りが見えた。

「昔、調べた事があるんだ」

何故こんなマイナーなもん調べているんだよ。もっと一般常識みたいなのが覚えたらどうだ。

「それで、鎌とどう繋がるんだ？」

「大碓命は辺りを開拓していたみたい」

開拓していた祭神に、納められる鎌。つまりは、鎌は開拓の名残というわけか。

「しかも、大碓命は左利きとされていて、奉納されるのは左鎌なんだって」

「へえ」

既視感に襲われつつも、恭子に感心した。

横を見ると、恭子は顔を強張らせながら俯いていた。

「恭子？」

恭子は振り向き、目と目が交錯した。大きな瞳は潤み、涙を溜めていた。こんな恭子は初めてだったのでどうしたらいいのか分からない。

——先に動いたのは、恭子。

「かー君と一緒になら、もしかしてと思ったんだ」

「ど……どうした？ 恭子」

「でも、ダメだった」

恭子は一度、優しく微笑んで一歩引きさがつた。

「ダメだった？」

「かー君」

恭子の涙腺に、限界まで涙が溜まっていた。

「今まで、ごめんね」

恭子は反転し、駆け出しかけた。

止めようと、伸ばした手。恭子の左手をリストバンド越しに掴んだ。

「待て恭子。意味が分からな——」

掴んでしまったリストバンドが、腕の方に捲れた。その中にあるのは、大きな一本の傷痕。

「傷……？」

恭子は俺の手を振り払い、すぐに傷痕を隠した。

——今の傷痕は……俺が付けたものだ。そうだ。俺が恭子の左腕を斬ったのだ。恭子が奉納しようとしていた鎌で。

「ボクね、かー君が高校に来る事を……入学前から知ってたよ」

恭子は下を向き、左腕を右手で覆いながら話した。

「……すまん」

俺も断片的な記憶が、次々と繋がっていく。

「かー君が謝る事ないよ」

「いや、俺の所為だ」

俺は当時、恭子に当たってしまっていた。両親を失い、沙耶もが意識を取り戻さなくなった。全てが狂いだしていった。そんな時、恭子は俺を支えようとしてくれたのだ。毎日のように事故現場、神社の前に来る俺に対し、話をしてくれた。

「かー君、あんまり覚えてなかったでしょ？」

数年前まで暴れ狂うだけだった俺は、過去に蓋をしてしまった。それで、過去と決別をしたつもりでいた。

——だがそれは、単なる逃げだった。

「そこにボクは甘え過ぎてしまってたんだ」

「違う。全部俺の責任じゃないか！ 勝手にキレて、勝手に傷付けて」

恭子はもう一度微笑んだ。その微笑みに胸が酷く痛んだ。

「ボクはお姉さんだ。かー君を包み込んであげないと、守ってあげないといけなかったのに……出来なかった。ボクの責任だ」

違う。そんな事誰にも出来やしない。俺自身の問題に、恭子を傷付ける愚行をしてしまった。全ての責任は俺にある。

「全部、覚えてるから」

涙は遂に溢れ、恭子の頬を伝った。

「これで、最後にするね。だけど、これだけは許して」
最後って何だ。

そう思った矢先、思い出してしまった。それは、俺が恭子に捨て吐いた言葉。あの時から、恭子は来なくなり、俺はそのままこの地を一度去った。

その言葉。

——もう二度と話しかけるな。消えろ！ ——

「これい……………いで」

掠れた声を、聞きとる事は出来なかった。俺には、そのまま恭子が去って行く姿を見つめる事しか出来ない。

雨が降っていたなら、少しはこの気持ちも和らぐのだろうか。

天を仰ぐと、雲ひとつない蒼穹の空が続いている。

「あああああああ！」

天に向かい、力の限り腹から吐き出してはみたものの、何も変わらなかった。

どうしたらいいのか分からなかった。何も思いつかない。

視線をゆっくりと下げていくと、奉納された鎌が目付いた。ひとつの鎌に引き寄せられ歩き出す。その鎌はもう錆びていた。手に

して注視すると、文字が書いてあった。

錆を少し落としながら読める様にしていく。そこには、こう書かれていた。

——かーくんが、げんきになりますように。そしてしわあせになりますように——

熱を持つ目頭。視界が滲み出す。

恭子は俺なんかよりも、ずっと大人だったのだ。

「しわあせじゃねーよ……しあわせだろうが」

精一杯の反論も、子供染みていた。

拾壹縁

「そこについては海斗さんも悪くありません。気にしないでください」

慣れないと迷いやすい一角。そこに生徒会室がある。そこに居るのは、俺と姐さんだけだった。

過去、土曜日、そしてここ数日の出来事を正直に話した。姐さんに甘えてしまっているのは分っている。ただ、もうこれぐらいしか手段が思い浮かばなかった。

「蓋をしきっていた過去を見つめ直す事が出来たのは、海斗さんにとって大きな収穫でもあります。それでも問題があった。それは何故だと考えます？」

「やつぱり……左腕に傷痕を残すような怪我をさせてしまった事が、俺の最後の言葉か……」

「前者はありません。後者は、当時の恭子なら思ったかもしれないませんが、今は違うでしょう。恭子自身それを盾にはするでしょうが、本質とは異なります。隠していたのも恭子自身の為ではなく、海斗さんが思い出さない様にしていただけでしょう」

では何なのだ。分からない。そこが、分からないのだ。何故、恭子はあそこで退いたのか。何日も考えた。それでも、答えが出てこない。

その姿を見兼ねてか、姐さんは大きく溜息をついた。

「本来ならば、海斗さんが時間を懸けてでも見つけるべき答えですが、私としても恭子が此処に来ないのは困ります。なので、ヒントをあげましょう」

そのヒントとは、俺が恭子に再会した当初に思い出した黒歴史。それは、事故に遭う前。十年前の出来事。

幼き頃の俺は、公園でブランコを漕いでいた。隣では恭子が、倍程の振幅で漕いでいた。恭子は前方に大きく漕ぐと、勢いをつけてブランコから跳び降りる。弧を描き、いくつもの線が書かれている地面へと舞い降りる。舞い降りた場所は、どの線よりも遠い位置だった。

恭子はこちらに振り向き、満面の笑みと大きなVサインを押し出す。

「やった！ 新記録！」

どこまで遠くに飛べるか。恭子は俺にまで強要していた。それほど運動能力も良くなく、まだ小学生でもなかった俺には、出来るはずもなかった。そんな俺にじれたのか、恭子はよく背中を無理矢理押した。それでも絶対手を離すものかと握っていたら、一回転して死に掛けた思いをしたこともある。こうなった時はもうさっさと飛ばなければならぬのだ。

——目を瞑りブランコから飛び上がる。

感覚が左にずれてゆき、左側が熱く、痛くなる。低空で飛び、左を擦っていったのだ。

あまりの痛さに大声で泣き叫ぶ。

「もうかー君つてば、いっつもいっつもうるさいな。ほら、傷口だして」

その原因を作るのは恭子だろ、という考えも当時にはなかった。

ただ痛み泣きじやくる事しかできなかった。

泣き止まない俺を強引に起こし、擦り傷を探す。擦った場所を見つけると、砂が付着しているのもお構いなしに傷口を舐める。これがまた染みて痛かった。俺の泣き声はさらに大きくなる。恭子は俺の頭を押さえ付け、「泣かないのー」と言い聞かすが、無理な注文だった。

このような出来事が日常茶飯事であり、この世で最も恐ろしいものの代名詞は、恭子となった。それは、今なお至る。

ただし、最近はそんな事が可愛らしいと思えるぐらい、恐ろしい物事に突っ込んでいた気もしなくはないが。

——つまるところ、俺は恭子が苦手なのだ。

「優希さんの時に、言う事を聞く約束をしたのを覚えていますね。あの時、私が恭子に見せていた紙を覚えていますか？」

ずっと気になっていた。恭子が悩み続けたあの紙には、何が書かれていたのだろう。

「私があそこに書いたのは 過去の一言を無かったことに です」
十年間、そして今も恭子を傷つけ続けてしまっている俺の言葉。

恭子はその時、直ぐにそれを受け入れなかった。そして、俺とのデートなんかに変えてしまった。自分が楽になれたのに、そうしなかったのか。

「私達が海斗さんを奪い合って戯れている時、恭子だけは一步退いていました。何故でしょう」

恭子の勘違いが、ようやく解かった。恭子は、自分は嫌われていると思っているんだ。

俺は恭子に対し、冷たくあしらってきた。それは苦手意識があったからであり、嫌いなわけではない。恭子のいい所だって沢山知っている。

「お解り、いただきましたね？」

やはり、俺が悪かったのだ。そしてあの時、聞こえなかった事。

恭子が呟いたのは、「これ以上嫌わないで」という事であろう。

こんな勘違いのまま、終わりたくない。

「それでは次に移りましょう。お手伝い、いただけますよね？」

いきなりプリントを渡される。

さすがは姐さん。行動が尋常じゃ無く早い。しかしなんのプリントなのだろう。目を下してみる。

復活！ 猿投高校サバイバル。今週金曜日開催。

大きな文字情報で既に固まった。サバイバルって一体どんなイベントだ。

詳細にまで目を下していく。読めば読むほど、不思議なイベントだった。

このイベントは男子と女子で別れる。男子は狩り、女子は炊出しらしい。これは後で立花から聞いた話だが、元々男女共同、全校生徒で調理実習するイベントがあった。しかし何故か、男子の料理に關しては壊滅的で、毎年救急車が準備されていた程だったという。生命を脅かしかねない危険があったため、男子は狩りをさせようと二年前に変わった。しかしその狩りというのが、全校生徒から選ばれた男子十人を残りの男子生徒が、ペイント弾で狩るという、残虐非情なもの。

ルールは時間制限内に十人を打ち取れば狩り側の勝ち。逃げきるか、狩る側を全滅させれば狩られ側の勝ち。勝者が炊出しを食べる権利をもらえる。

当然こんなイベントは、その年で終わってしまった。使用されるペイント弾は当たり所が悪いと骨折するような代物。狩られ側十人の内、八人が骨折したらしい。選ばれたということはそういう怨念があった故での結果なのだろう。

あの調理実習館が役立っていたことにも驚きだが、選ばれる十人という文字を見ていると、背中から嫌な汗が湧く。自分の立ち位置を鑑みると、それこそ全校男子生徒に恨まれても仕方ない位置にいるのだ。

「海斗さん、それについては諦めてください。貴方は十人側で勝つ。それしかありません」

背中から声が掛けられた。

この御方は手助けしてくれるが、本当に高いハードルを用意して

くれる。

それでも、恭子に近づけそうなイベントは確かなのだ。

金曜日。無論と言ふべきなのだろう。男子票の八割以上を集めた俺は狩られ側、mob組にいた。mobとはネットゲームでいう、狩られるモンスターにちなんですつけたのだろう。しかし、本来は群衆という意味であり、逆だろうというツツコミをしようか小一時間悩んだが、止めておいた。女子からの票こそ零に近かったとの事だが、狩りに参加するのは男子だけ。既に戦場にいる八割から敵視されているのに、ここでさらにアピールしても絶望が深くなるだけだ。左耳から、ノイズが走った。

「俺には関係ないが、お前は大変そうだなあ海斗。アーハッハッハッハッハ」

ちなみに女子から九割を超える圧倒的な票数を獲得したのは漢の味方、立花である。手作り料理という魅力に負けて裏切る男が大半だろうが、お気楽な立花にそんな考えは浮かばないようである。

標的が減るのはこちらとしても痛手だが、それでも生き延びられるぐらいなら蜂の巣になっていたきたい。欲を言えば、そこで一秒でも長く堪えて欲しいものだが、天城家での不甲斐なさを思い出し、諦める。

再びノイズが走り、違う声が聞こえた。

「何故俺がこちらにいる……」

実のところ、俺と立花だけで全校生徒の殆どの票をかき集めてしまった。その為、残りの八人は一桁なのにmob組に入ってしまった。いる。

その一人が南風原将である。考えられる理由は彼女が女優だから、ぐらいである。きつとうちのクラスメイトだけの七票。ドンマイとしか言いようがない。

「将はどうするんだ？ 飯なんていらないだろ」

今年、新ルールがいくつかできた。狩りに関してmob組が余りに不利な為、mob組には無線が配られている。そしてヘルメットと胸にリング大程度の白的がついており、ペイントが付着してしまつた時点で退場となる。一方、狩り側はジャージを含め体のどの部分にでもペイントが付着してしまえば退場となる。一見、mob組が有利になつた様に思えなくもないが、それでも十対六百強。数の暴力には及ばない。

炊き出しの方でも女子にも新ルールができた。今までは、炊出しをして勝つたほう（例年狩る側）に振舞うだけだったのだが、今年はもう一品を各々が作ることにし、それを男子一人に渡すというイベント。この結果次第で男としての何かの格差が広がると思うが、それすらも姐さんの楽しみなのだろう。恐ろしい御方である。

南風原将という男は、彼女以外の女の手料理など食べない。参戦意欲も無いだろう。このままでは、すぐに死ぬと分かっている立花を含めると、いきなり八人になりかねない。能力的にも是非とも戦つて欲しいのだ。

「料理などどうでもいいが、怪我は困る。怪我してしまつては、藍那が悲しんでしまう。それだけは断固阻止だ。ということで、降りかかる火の粉は振り払うが手助けはせん。せいぜい生き延びろ」

無線からその他mobから死ね！ 羨ましい！ 等の野次が飛ぶ。しかし参戦意欲があると分かつただけでも俺は多少なりとも楽になった。

スピーカーが震え始める。

「それでは紳士の皆様。準備は宜しいでしょうか」

男共の咆哮が、校舎を揺らす。今遭遇しては絶対にいけないという警告が、体中を駆ける。

——大きな鐘の音が鳴つた。三時間に及ぶサバイバルが、今始まる。

「ぎゃああああああ」

あまりに早い悲鳴が、ノイズと共に左耳から流れた。

「ぎゃああああああ」

そして時間差で、遠い運動場のほうから聞こえた。

立花……一分持たなかったな。役立たずめ。

すぐに、学内に大量に設置されているモニターに、立花が殺される場面のリプレイが表示される。

文字通り、殺される瞬間だった。何百もの銃が一斉に立花を襲っていた。結構引きの——それも、横からの——アングルだったのだが、車で轢かれるかの様な勢いで後ろに飛んでいく立花は、序盤で既にカメラから消えていた。

ペイント弾が右から左に流れていくだけの映像が十秒近く流れる。あれで生きていたら、立花はもう人間ではない。ゴキブリと称してあげたいと思う。アレにはこれ以上ない褒め言葉であろう。なんといつても生命扱いだからな。

狩り側の鬱憤は一撃目である程度が出したのか、それから割りりと落ち着いた戦闘だった。ジャージには所々ペイントが付着していたし、足にも二回ほどペイント弾が当たり、未だに痺れが取れない。それでもなんとか逃げ切れていた。

一時間経って、現在の生き残りは三対二百四十三となっていた。

「ガフッ」

無線から小さな断末魔が聞こえ、残り三つとなっていたランプは二つとなった。残り二時間で、残りは俺と南風原の二人。なんとも厳しい現状だ。

「いたぞ！」

大声で叫ばれた瞬間背中に足ツボマッサージで痛い場所をゴリゴリされた時に匹敵する激痛が走る。背中から撃たれたのだ。背中からだと、どう考えても的に当たらねえだろが。

ペイント弾の嵐が止む気配はない。俺を痛みつけるのが目的のようだ。畜生……俺が何したっていうんだ。美少女四人と戯れてたぐらいじゃねえか。

この辺りで安全そうな場所。激痛に耐え考えてみると、一つの場所に辿り着く。何故あんな位置になるのか今までよくわからなかったが、安全面から見るとどこから襲撃が来ても迎撃可能。自己防衛の意味が強いのだろうが感謝せざるを得ない。本当に頭の上がらない御人である。

辿り着いたその場所は、生徒会室。扉を開けると、いきなり逆光で動きが止まりやすい。そして両側面は、白く塗られた金属製の壁。しかも光が降り注ぐ、一面窓ガラスは防弾ガラス仕様。つまりは、入口がたったひとつであり、中からの迎撃が圧倒的有利なのだ。敵がいるかもしれないが、迷うことなく生徒会室に飛び込む。的さえ当たらなければいいのだ。動いているほうが当たる可能性は低い。

目の前でペイントが跳ねる。目視もせずに攻撃されたであろう方向に銃口を向け、トリガーを引く。反撃は来なかった。

「海斗か。危ないぞそこ」

生徒会室にいたのは、南風原将だった。扉にペイント弾を打ち、その飛び散りで多くのハンターを殺す。

——あの扉の汚れ。俺が落すんだろっなあ……姐さんに笑顔で睨まれながら。

「お前まで来てしまったという事は……残りの二時間を、二百と少し相手に籠城か」

将の顔もさすがに強張っていた。確かにここが有利といっても、仮に残りの二百人が一斉に突撃してきたら二人では対応しきれまい。少しでも減らさねば、勝算はないのだ。

何としてもここは勝たねばいけない。だが、変にリスクを犯して負けるわけにもいかないのだ。

「仕方ない。俺はここを出る。援護してくれ」

南風原は諦めたように、地面に祈りを捧げていた。

「男たるもの、愛すべき女は一人であるべきだ」

心の中では咲乃と決めていますとも。ただ姐さんも優希も魅力的

過ぎるんだよ。そりゃあまあ……恭子も。

「が、お前は今、悩んでいる。何に対しては知らんが、そこは評価しよう」

それはありがとう。は南風原が俺を嫌っているのは薄々分かっていたが、評価されているとは思ってもよらなかった。

「此処ならば一人で考えることも出来るだろ。せいぜいもつと悩むがいい」

南風原さん。あなた、本当に高一ですか？　なんか悟りを開いていませんか。

「ちゃんと援護しろよ」

それだけ確認すると、颯爽と飛び出していった。突撃の機会を伺っていた連中は慄き、動けずにいた。

その隙を突き、将はことごとく死者を増やす。俺は少ない生き残りを狙い落としていった。

静かになった頃、モニターを確認するとこちらはまだ二人、狩る側は残り百五十人をきっていた。

将の優しさに感謝しつつ、しっかりと見つめてみたい。

恭子は、俺を立ち直らせたかった。しかし、結果として俺は拒絶してしまった。

再会したものの、俺にはあしらわれ続ける始末。確かに、嫌われていると思うても当然だ。苦手意識を持ち続けた俺が悪いのだ。蓋をする原因だけを棄てていなかった俺が。

恭子は優しい。いつも俺を気遣ってくれていた。いつも俺に無理をさせていたのも、恭子なりの気遣いだったのだろう。幼い頃、俺には友達が恭子ぐらいしかいなかった。あの無邪気な笑顔に、何度癒されたんだろう。

恩を仇で返すとは、正にこの事だ。

考え事に夢中になっていたのか、突撃された事に気付くのが遅れた。とつさに標的を守るものの、全身が痛んだ。天井と床にペイント弾を撃ち続けると、しばらくして「汚ねえぞ」という罵声のみに

なった。向こうは飛び散ったペイントですらアウトなのだ。

的は守り抜いたが、全身が痛む。特に横腹から貫ってしまったものは、骨がいつてしまったかも知れない程、脳を強く刺激していた。痛みには慣れていた。恭子の無茶な要求。交通事故。喧嘩三昧。痛みは俺から全てを忘れさせ、気持ちよくさせてくれた。

——それなのに、この痛みはただ苦痛でしかない。

過去と向き合うだけではダメなのだ。向き合ったうえで、どうするかが大切なのだ。姐さんもそう言いたかったはずだ。

過去を完全に棄てて生きる。この生き方もありだ。

ただ、俺は中途半端なのだ。曖昧だったせいで、恭子は悩んだ。そして、より傷つけてしまった。この根本をどうにかしないと、今後より大きな問題に喰われてしまう。そんな気がした。

「済まん。海斗」

それだけで、ノイズが途切れる。モニターを見上げると、一対百十になっていた。残り時間は一時間。逃げ通すのは無理だ。もう、ここで抑えきるしかない。

外から囁き声が聞こえる。いつ突入されてもおかしくない。

俺は、勝たなければいけない。

扉が勢いよく開かれた。残り少ないペイント弾を、惜し気無く撃ち放つ。何度も、何度も。もはや動き回ることもしない。一発でも多く相手に、ぶち込む。ペイント弾が足に、腕に、肩に、横腹に当たる。それでも、的には当たらなかった。当てられる気がしなかった。

——やがて、戦は静かに幕を下ろした。

先程までの殺伐しさが、嘘のように会場は潤っていた。炊出しには大勢の男が詰め寄り、一部分だけが阿鼻叫喚と化してはいたが。

「アンタもバツカね」

「海君、惜しかったね」

優希と咲乃が励ましに来てくれた。これがまた男達の怨念の的にな

るのだが、やっぱり悪い気はしない。

「咲乃。自爆に惜しいも何もないって。まあ、海斗らしいけどね」
バカといわれればバカかも知れないが、優希にバカ扱いされたくはない。お前の方がバカだ。などと、反論することも出来ない。まさか、暴発して自分に掛かってしまうとは思ってもよらなかった。

勝たなければいけなかった。そう思っていたのに。

——そう思い込んでいた。

姐さんの新ルールによつて、負けようが恭子に近づけるチャンスはあったのだ。そんなことに気付けない程追い込まれていた。それでも、その事を教えないあたりが姐さんの厳しさ。

「まあ元気にいこーよ。咲乃からのプレゼントもあるんだし」

咲乃の照れ笑い。あまりの眩しさに目が潰れそうになる。それはもしかしてあれか。あれなのか！

「残念ながら私と咲乃さん、優希さんの合作ですよ」

姐さん……立花みたいな登場は止めてください。反射神経で攻撃しかねないです。当たり前ながら、攻撃なんてしたらこっちが最期ですけども。

——いつぞやの江■島平八似のオッサンみたいになりたくはないです。

咲乃の持つお盆には、シチューが盛られていた。

「素材を斬ったのがお姉で、味付けがアタシっ！」

つまりは料が姐さんで理が優希という事だ。日本料理には、素材をどれだけ活かせるかという技術、“料”が大切であり、フランス料理等は、どれだけ美味しくできるかという調理技術、“理”が大切とされる。繊維を潰さずに「料」をしたからこそ「斬った」というわけだろうか。

「別にそんなのどーでもよくない？」

「いいや、大切な事だ」

「ふーん」

……もういいっす。

「……あれ。咲乃は？」

「私は、愛情！」

なんと最高のスパイス。

つついマジ吐血をしまった。決してさっき負傷した横腹が原因では無い。咲乃の可愛さに、だ。そう信じている。早く食したい！

「ごめんね海君。私不器用で何にも出来なかったの……」

「あれはもう不器用ってレベルじゃなかったわ」

何を申すか優希め！ 咲乃の愛情さえあれば何でも美味しいさ。

と言いたかったが、口に出してしまえば、両隣からこの世から逸脱した拷問を受けそうな気がするので、そこは押さえておこう。まだ狩りでの傷が痛むしね。

こうしている間にも、ある方の眼光が鋭くなっておられるので、頂くことにする。

「うーまーいーぞー！ー！」

シチューってこんなに美味しく出来るものなのか。味皇様なら口からビームが出せる代物である。

しかも、これはただのホワイトシチューではなかった。肉がビーフでは無くラムなのだ。

——そう、アイリッシュシチュー。

アイルランドの肉じゃがともいわれるアイリッシュシチューは、とても優しい気分になった。究極の一品ここに在り。

「しっかし……なんでアイリッシュシチュー？」

「優希さんの四分の一は、アイルランドの血が流れているんですよ。優希って、目の色的に北欧かと勝手に思っていたが、アイルランドの血が入ったクォーターだったのか。半年もの間知りもしなかった。これも反省せねば。」

「まあ他にも、日本、ドイツ、フィンランドが入ってるんだけどね……いくらなんでも混血過ぎるだろう。時代背景を鑑みると、優希の血筋は映画になりそうな経験をしてそうである。駆け落ちとか

あつたのだろうか。

ふと、いつしか見たはずの優希の母親の顔を思い出そうと試みるが、あの時はもう色々と限界が近く、全てがぼやけていた。

「雑談はこのぐらいにしておきましょう。後は……」

いつも通り、人間ではない動きでターゲットを捕捉した。誰が、とは言っていないぞ。

その誰かが捕らえたのは恭子。

「うう〜」

しばらくは足をバタつかせ抵抗していたが、恭子は料理を手に持つているうえ、相手は人外だ。勝てる道理がない。

「あ、海斗さん。後でお話が出来ましたので来てくださいね」

お話があるのではなく、出来たんですね…それ生きて帰れますか？

「さあ、どうでしょう」

「

」

「可愛く無言になっても、無駄ですよ」

マリーアントワネットも、もしかしたらこんな気持ちで最期を迎えたのかもしれない。ええ、勝手な憶測です。

「では、お預けします」

颯爽と恭子を連れ戻ってきた姐さんは、これまた颯爽と優希と咲乃を引連れて消えていった。残されたのは俺と、全く顔を合わせようしない恭子。

謝るのはだめだ。ただそれだけが、反復されていた。

「あー……恭子？」

拳動不審っぷりが激しくなるが、決してこっちを見ようとしないうちを開口こうとしない。

そんな恭子を見てるとつい笑いが込み上げ、耐えきれなかった。笑いが止まらない。

「な……なんで笑うのさ！」

「いやゝ悪い悪い。なんか可愛いなあって」

恭子は顔を紅潮させたかと思うと逃げだした。

しかし、回り込まれてしまった。

いくらドラ エをやらずに育った俺でも、それぐらいは知っている。ここで逃がしてなるものか。

かといって、何から言えばいいのか出てこない。

「恭子……」

赤みの引かない顔で正視出来ない恭子から、頑固たる姿勢が見える。少し回り道をしよう。

「その……よかったら、それ。もらってもいいか？」

それとは、恭子の手にある栗きんとん。おせち料理に出るようなものではなく、高級茶菓子のあれだ。俺の小さい頃からの好物である。毎年一回は川上屋の栗きんとんを食べねば年は越せないね。

本来は女子から男子に渡すとあった。しかし、こちらから催促してはいけないというルールはなかった。このぐらいはいいだろう。

恭子の迷いがみえる双眸は、それでも、俺を捉えた。

「悪いがすぐには変われない。でも必ず変わる。変わってみせる」

中途半端では居続けない。それが残酷な選択であっても。過去を棄てきるか、全てを受け入れるか。

「ただ、これだけは誓って言える」

これだけは、伝えたい。

「俺は恭子を、神崎恭子を嫌いになることは無い。これまでも。これから。絶対にだ」

これだけは。

「だから待つて欲しい。もうちょっとだけ」

中途半端な自分が変わる、その時まで。

恭子は顔をそむけながら、栗きんとんを差し出した。

「ボク、刃物触れないからこんなものしか出来ないけど……」

慎重に手に取り口にする。栗のまろやかな甘味が口に広がりつつ、甘さを控えている。すやよりも川上屋に近く、まさに俺好みに仕上がっていた。

「本当に美味しい」

「当たり前です。私の茶菓子を担当しているんですから」

声は正面ではなく後ろからだった。

だから、本当にこの御方は……。

「恭子も、もう大丈夫ですね？」

「うん」

まだ俺といるのは気まずいのか、避けられてる感否めない。それでも、拒絶は無くなったようだなによりだ。

「では、早速サボってくれた一週間分、しっかり働きましょうね」

姐さんの顔を見つめる。その行動が恭子と見事にシンクロした。

姐さんの笑顔は、全ての言い訳を押し潰さんという迫力。

恭子の顔色はいつの間にか蒼くなっている。

「海斗さんも、お手伝いいただけますね？」

……パードウン？

「私、働いた分はしっかりお返ししたい性分です」

この世を隔てた刺々しい空気が、逃走経路を塞ぎ切っていた。

「誰か達のせいで、生徒会の仕事が溜まっているんですよ」

マズイ。マズイぞこれは。今すぐ良心を捨てなければ。どす黒い

オーラに絡まれて、ボロ雑巾となりかねない。

「元々二人しかいなかったというのに。この一週間、私は、一人で、

やってきましたのに。おかしいですね。いつしか、手伝うだなん

て言った方も、いた、はず、なんですが」

ここで泣いたふりでもすれば役者。それでも尚、微笑み続けて強制を醸すのが姐さん。全くお役にたてず申し訳ありませんでした！

「というわけで海斗さん。これに署名を」

案の定入会届。もう、生徒会に入れということです。あはははは。

「お姉。それ私も入っていい？」

「わたしもー」

「大歓迎ですよ」

咲乃が入る。これは俺も入るしかないではないか。ボロ雑巾になるうが、やってやろうじゃないか！

これで毎日オアシスに会えるというのなら。咲乃と生徒会室でき
やいのきやいのわいのわいの。

——あれ？ いつもと変わらない。

「海斗さん」

トーンが先程までとは少し異なっていた。姐さんの厳粛な声。

「答えを出すのは貴方一人です。ですが、決して一人で悩む必要は
ありません。私がダメでも恭子がいいます。優希さんがいます。咲乃
さんがいます。頼ってもいいんです。自分の納得する答えを出して
ください。それは、甘えなんかではないのですから」

甘えではない、か。確かに、何と言われても、答えをだすのは自
分でしかない。皆から意見を貰うことも、一つ的手段。

「最早、いつ切れてもおかしくない時間です。それでも、私は海斗
さんを信じます」

姐さんが何かを言ったのか、俺にはよく聞き取れなかった。

拾式縁

暗くなりきれない夜空。そこには、満天の星空があった。星空の元、大地をしつかりと踏みしめ、今日も猿投神社からの帰路を歩む。厚着をしていようが、容赦のない風は露わとなっている肌を刺し続ける。以前は隣にいた姐さん。しかし、今はいない。最近は大虎様の具合が安定しないようで、寮ではなく家に帰っている。

一人きりの時間。たった半年前までは慣れていた時間なのに、今では寂しく思える。それほどまでにこの半年は目まぐるしく、温かった。

風が、歩み続けようとする俺に抵抗した。

「寒っ」

温暖化とはいえ、神無月を越えれば冬を感じる。露わになっている耳が痛い。

過去をどう考えていくべきか、未だに答えが出なかった。

向き合う為に、出来る限り思い出そうとした。けれど、荒れていた頃の俺は何も覚えていない。どんな人達をどれだけ傷つけたかすらも。思い出せるのは痛み、高揚感、そして、罪悪感。思い出そうとすればするほど、己の情けなさに白い溜め息が出てしまう。

全て棄ててしまえば、楽になるんだろうか。そんなことすら考えた。

——恭子の今にも泣きそうな顔が浮かんだ。

傷痕を知ってしまった今、やはり放っておくことは出来ない。かといって過去をあまり覚えていない。八方塞がりだ。

やっぱり皆に聞いてもらおう。とはいっても姐さんは父親の事があるんで、これ以上手を増やさせるわけにはいかない。恭子とはまだ微妙な関係なままだ。咲乃には悪いが、こういう話は合いそうにない。

「やっぱ優希か」

白い靄が、星空を曇らせた。

「重い」

とくダネ！ の血液型選手権が放送されるであろう頃、一人の守銭奴が教壇を去った。

咲乃はいつも通り遅刻なので、優希のクラスまで直行し相談してみたというわけだ。そんな訳なんだが、聞き間違いかもしれないのもう一度だけ確認をしたい。

あー……優希さん。今何とおっしゃったのでしょうか。

「重すぎっ！」

聞き間違いではないんですね？ 珍しく人が悩んでいるという時に。

「ダメよ海斗。アンタは確かにヘタレよ。ええ、どうしようもないヘタレよ」

俺は断じて、ヘタレヘタレと連呼されて喜ぶような性癖ではない。確かにヘタレかも知れないですけども。しっかりとオブラートを何重に包んでほしいものだ。バファリンだって半分が優しさなんだぞ。残念ながら今のキャッチコピーは『頭痛の時は、がんばるな』だな。

「ヘタレだけどころかいいとこ、アタシは知ってる。アンタは、痛みを知ってる」

ただ、俺にはその痛みを知る代償が、余りにも多すぎた。

「人なんて傷付けて傷付けられてくもんよ。これまでも、そしてこれからも。その痛みを知ってるからこそ、アタシの家族を救ってくれた。そうでしょ？」

優希は変わった。出逢った頃の優希は、自分という存在を知ってほしい。もっと自分を見て欲しい。そんな印象があった。けど、今は違う。碧眼はこちらを見据え、決して視線を離そうとしない。押

し付けではなく、しっかりと見極めて提案をしてくれる。

「海斗の欠点は、自分が傷つく事を恐れなさ過ぎて事。アンタ自身は傷ついてもいいって思ってるかもしれないけど、悲しむ人がいる事を忘れないでよね」

根本を変えろというのは難しい。これまでの、何年、十何年もの生き方を否定するのだ。

それでも優希は変わった。その一因に、俺が関わったというのは誇りに思う。でも、俺は優希の様に変わるのだろうか。

俺は、かつての自分を畏怖している。その頃の俺は、優希が褒めてくれた痛みというものを知らない。今の自分の全てを壊してしまうかも知れない。誇れるものが何もない。

「暗くなっても意味無いわ。この間の神社のお祭りみたいに明るくさ！」

「あれははしゃぎ過ぎだったろ……」

残念ながらあの時も、咲乃は居なかったしな。

——あれ、俺咲乃に避けられてる？

「古賀。どうでもいいが、そんなにイチヤついていると反感を買うだけだぞ？」

予鈴の代わりとなったのは、日本史担当の教師の言葉だった。

まだ記憶に新しいあのサバイバル。とは言っても二ヶ月は過ぎているのだが……。

姐さんの陰謀により、傷痕を必要以上に抉られた一部の男達。

キリストもびっくりであろうほどの血の涙を流し、殺意を具現化していた。殺意が行動に変わると、俺は耐え切れずに事切れてしまった。

「海くん。おはよー」

不意に天使の伊吹が耳に掛かる。本来なら昇天したところだが、先ほど地獄に送り込まれたはずで、現実はまだ引き上げてくれたのだ。

「おはよう咲乃」

咄嗟に起き上がった。目に見えるのは、落ち着いた白を基調にした部屋。時計は上で短針と長身が重なるうとしている。しかしそれだけで、咲乃の姿は見当たらない。

「横だよ」

右か左か。考えるまでもなく、反射で右を向いた。そこに天使はしっかりと降臨なさっていた。鞆を持っているので、もしかするとまだ教室に行っていないのかもしれない。そこまでして俺に会いに来てくれたのかと思うと、涙がちよぎれる。

隣のカーテンレールが擦れる音がした。

「土岐多。それキツイやつだから、くれぐれも無理し過ぎるな……よ?」

こちらのカーテンが控えめに開けられた。そこに見えたのは、細く白い男の顔。黒縁の眼鏡が、細さと白さをより強調させている。

保健医だとは思うのだが、本人が不健康そうである。

——こいつ、どこかで見たような気がする。

男は咲乃、そして俺という順に視線を移すと共に、表情も安堵から危惧へ。

「はい。わかりました」

明らかに挙動不審な保健医を気にすることもなく咲乃はいつも通り。姐さんとは別の意味で恐ろしい子……。

保健医は表情を戻すことなく、そそくさと保健室を退場していった。以前なら気にならなかったのかもしれない。しかし、今は保健医の言葉が離れない。咲乃はわざわざ薬を貰う為に保健室までやってきたのではないかと勘ぐってしまう。

「これでお寝坊治るかもしれないよ!」

必要以上に見てしまったのか、咲乃でも気付いてしまった様だ。

ところで、寝起きの薬ってなんなんだろう。それとも早く寝る為の睡眠薬だろうか。確かに睡眠薬ならばキツイといった保健医の言葉も説明が付く。寝坊が直るとはとは思えんが。少なくとも「治る」

ことはないだろう。漢字的に。

「んー」

顔を覗かせた咲乃は、見つめるなり息の掛かる位置まで寄っていた。モチロン大歓迎なのだが、あまりに急だったので退がってしまった。ヘタレと連呼する優希がほくそえんでるようで情けなくなる。

「海くん私の事……嫌い？」

「いや！ そんなことはないぞ。断つじて」

好きだとは未だ言えないがね。

「私はね、海君の事嫌いだった」

世界は灰色になった。

終わり

「でも、今は好きだよ」

現世ただいま！　なんか今閻魔大王様に会ってた気がするけど戻ってこれたよ！

これは告白か。告白なのか。返事をしてもいいのか！　淡麗グリーンラベルが返事をする。イイндаヨ！　グリーンダヨ！

「今は海くんが好き」

今の自分。それは中途半端な自分の事なのだろうか。

自分自身でダメだと思っているものを好きといわれるのは、複雑だった。変わってしまったら咲乃は好きでいてくれるのだろうか。

そんな考えと同時に、恭子の辛そうな顔が過ぎる。

「俺……今の俺は好きじゃない。いや、今までの俺は好きじゃない。ゴメン……」

変わらない自分。全てを壊し続けようとした自分。事故に遭って泣くことしかしなかった自分。それ以前の両親に甘え過ぎていた自分。全てが、好きになれない。

「でも、否定することが出来ないんだ」

「否定することなんて、ないと思うな」

優しい声が、優しい瞳が訴えかけてきた。

「実は以前私達会ったことあるんだよ。もう七年前になるのかな」

小学三年生の頃も、ほとんど記憶にない。小学校側としては問題児だったので、もしかしたら覚えていられるかもしれない。高学年の奴等と喧嘩もしていた。小学生なんて学年で成長の差が激しいので負ける方が圧倒的に多かったのだが、それでも俺は止めなかった。止められなかった。同年代以下になると慣れている分多人数相手でも負けることはなかった。そして誰からも相手にされなくもなかった。

「あれ、痛かったなあ」

咲乃は遠くを眺めた。そこに過去の俺がいるのなら、俺が殺してやりたい。なんてことをするんだ過去の俺。

「海くんは覚えてないと思うけど、その時々あったんだよ」

咲乃は父親を病で亡くしてからというもの、塞ぎ込んでしまっていた。預かっていた親族の人からの説得により、三年生になってようやく学校へ行ったそうだった。その日に、俺が殴ってしまった。その時、俺は妹のことを咲乃にある程度話したらしい。以前、妹のがどうかと尋ねたのは、そんな理由があつたらしい。

咲乃は、すぐに転校していった。

「それで、今年の春に海くんと」

偶然の再会をした。猿投神社で。嫌いなのに、近づいてきてくれた咲乃。

「お父さんがね、もう喋れもしない状況になった時に、振り絞って出した言葉があるの」

筋委縮性側索硬化症という病気で亡くなったという咲乃の父親。声も出せなくなるというのは既に末期だったのだろう。

「俺は幸せだったって。不思議でしょ？ だってお母さんを、私が生まれてすぐに亡くして、自分も苦しい病を患って。それなのに、お父さんは幸せだったっていったの」

俺を見つめる瞳は、父親の真意を解いたかの様に落ち着いていた。
「私はお父さんの笑顔が好き。だから私も、死ぬその時まで、笑っていたい」

「咲乃……」

「再会したばかりの海君は笑ってはいたんだけど、偽りの笑いつて感じがしたんだ」

過去に蓋をした俺の主な手段は、馬鹿みたいに振る舞う事だった。その無理矢理さが伝わっていたのだろうか。

「でも、最近は心から笑ってくれてる様になったよね」

皆と出逢い、俺は変わりつつある。だからこそ、過去の俺が怖くもあるのだ。

「南風原君も言ってたよ。海君はどんどん良い顔になってきてるって」

……確かに、将の俺に対する扱いはまともになってきている。

「何度でも言うよ。私は海くんが好き。嫌いだった過去の海くんを含めて、海くんが好きだよ」

過去を否定するのではない。過去を受け入れたうえで、今を見据えて行く。

咲乃は、俺なんかよりずっと先にいたのだ。

「ありがとう咲乃。自分自身のこともっと考えてみる。そしてそれが終わったら」

いつか、追いついてみせる。咲乃のいる場所まで。そしたら、返事をしたい。俺も咲乃が好きだと。

咲乃は笑ってくれた。

「返事はいらないよ。私は今、幸せだから」

咲乃の笑顔が逆光の所為か、儚げに映った。

もう一度過去を見つめようと思う。家族と共に。

その日の午後、俺は早退し、妹の寝ている病院へと赴いた。
滑らかで綺麗な顔を覗く。その顔は喜怒哀楽もない。十年間変わ

ることのなかった表情。

握った手は暖かいが、握り返すことはない。

「麻耶……」

今一度、妹の名を声にした。

皆と一緒にいれば、俺は変われる。自分を受け入れることが出来る。その時は、何があるかと麻耶を支えてあげたい。例え何年、何十年後であっても、目覚めた時は、全力で支えてあげたい。いや、支えてみせる。

「海斗さん」

入口に姐さんがいた。その表情はいつもより固い。

「残念ながら……カウントダウンが始まってしまいました」

「カウント……ダウン？」

頭はこれまでにないほど落ち着いていた。これまでの言動を基に、推測を組み立てていく。

強い薬。

ほぼ毎日の遅刻。

優希宅や神社の祭りでの不在。

異常なまでの不器用。

筋委縮症。

カウントダウン。

そして――

「咲乃……」

姐さんの合図が、推測を確信へと変えた。

一度は止まりかけていたと思っていた崩壊の時は、流れ続けていた。俺達の半年間は、今度こそ音を立てて崩れ落ちていく。

拾参縁

横たわる咲乃の病室に、皆が集まっていた。突き付けられたのは、現実。

現実という残酷なノイズは、淡い希望すら掻き消した。ノイズは、咲乃を中心に入り乱れる。

——運動ニューロン疾患・筋委縮性側索硬化症。

筋委縮性側索硬化症とは通称ALSと呼ばれる。ALSは進行性であり、半数近くは三年以内に亡くなるが、中には三十年以上生きた人もいる。

咲乃は、半年間以上無理をしたせいなのか、病状は一気に悪化してしまった。

通常はこんな若い頃から発症することも少ないという。咲乃の父親もALSで亡くなっているので、遺伝の可能性が高い。しかし、運動ニューロン疾患が遺伝することは十%程度でしかない。

また、ALSの大半は呼吸を行う筋肉の低下により呼吸困難になるのだが、咲乃は呼吸器官以上に心筋の低下に強い傾向がある。

咲乃の発症自体は二年程前で、本来は四月には入院するはずだった。しかし、咲乃は限界まで投薬してでも学校に来ていた。文字通り、歩けなくなるまで。

そう伝えるのは、保健室にもいた黒縁眼鏡の細い男だった。その医師の前で、俺は聞き入っていた。

「どうして……」

どうして今まで話してくれなかったんだ。その想いが溢れ、最後まで口に出ることが出来なかった。

「私が、止めていました」

応えたのは医師でも咲乃でもない。ドアにもたれ掛っていた姐さんだった。

いつから……いつから、姐さんは知っていたのか。何故教えてく

れなかったのか。全ての疑問を瞳に込める。

「沙耶さんの見舞いに訪れた際に、先生からお聞きしました」

医師は何も言わず、姐さんを見据えていた。

「先生は何も悪くありません。止めたのは私の提案であり――」

姐さんの視線は、ベッドへと移された。

「咲乃さんの意思でもあります」

この言葉が、痛かった。咲乃が隠していたのだ。

真っ先に出た感情は、悔しみ。咲乃にとって俺は何なのだろう。

この半年は、一体なんだったんだ。俺は、皆にとってその程度だったのか？

優希と恭子は目を背け、床を見つめている。

どうやら、知らなかったのは俺だけ。

「ハッキリと言いましよう。今の貴方では、時期尚早でした」

湿った唇から、鉄の味が漏れた。

「しかし、事態が悪化してしまったので、お伝えしたまでの事です」
もう、限界だった。

最小限の動きで、それでも全力で姐さんに向け拳を突き出そうとする。が、踏み込んだ瞬間、足を払われ、逆に床へ叩きつけられた。打った額が煮えきるほど熱い……。

「今の貴方が知ったところで、何が出来るというのです。暴れた所で、咲乃さんの為になるとも思っているのですか」

以前、姐さんは病状に関しては教えてくれた。今、咲乃に待っているのは、目に見える死。誰も、治す事など出来ない。

「姐さんだつてそうじゃないか！」

不治の病の前では無力だ。それが、姐さんであろうとも。

「確かに私にも治せません」

「だつたら！」

俺の疑問は姐さんに遮られた。

「治す事が全てではありません。私達はそれぞれの形で、彼女を支えてきました」

優希が、恭子が、姐さんが、訴えかけていた。それだけは、事実だと。

俺は、咲乃に何をしてやれたのだろう。そう考えた時、俺は何もしてあげられていない事によやく気付いた。

俺は咲乃の一挙手一投足に舞い上がっていただけ。一方的に。俺は、こんな所にはいけない人間だったんだ。

「ハハハッ」

自然と、腹から乾いた笑いが出てきた。

音なんて何も耳に入って来ない。ただ、一秒でも早く咲乃の前から消えたかった。少しでも離れたかった。もう二度と、逢わない場所まで。

ようやく聞こえてくる音は、自分の鼓動だった。そして、激しい呼吸。先月までは心地良かった風は冷気を運び、汗に塗れた俺の体温を下げていた。

息を整えると、近くにある小さな橋の上から流れ続ける水面を眺めた。猿投山から流れ出ている水は透明なまま、この橋の下をくぐって川端公園の矢作川へと合流する。俺が見た水は、何時頃辿り着くのだろうか。

一陣の風が背中から吹いた。

「遠いわぁっ」

「グベエッ」

背中痛み。そして、それよりも迫る水面。下腹部が締め付けられるかのような落下の独特な感覚。

気が付くと、川へと転落していた。

「何しやる！」

橋の上にいる犯人。それは、優希だった。

「まだまだ！」

既に優希は手すりに乗り上げ、飛び上がっていた。物理法則に則り、降下し始め、明らかに俺を目掛けていた。

——衝撃、暗転。

「げぶあふつげぼつごふ」

水を吸った冬服が非常に重く、避け切る事も叶わず満身創痍で優希を受け切った。幸い、深めで下も砂地だったので怪我こそ無いものの、溺死する所だった。

優希を退かし、息を整えようと、まずは入ってしまった水を出していく。

「おりゃあ」

優希は噎せている相手だろうが、無慈悲に水を掛ける。

なんなんだこいつは。今は一人になりたいというのに……悪ふざけしやがって。

左手で優希の胸ぐらを掴んで引き寄せる。今ある全ての悪意を込め、碧色の瞳を睨みつけた。

また、冷たい水が頬に掛かった。

拳を握った右手が、優希の顔を目掛けて直線を描く。

——拳に鈍痛が走った。

拳は優希の顎を跳ね上げ、止まっていた。幾許か置いて、優希の顎が次第に下がってくる。優希の白い頬は赤みを帯び、鼻から血が垂れていた。

三度、冷たい水が頭に掛けられた。

「少しは頭冷えた？」

何事も無かったかのように、優希は微笑んだ。まるで、咲乃かのように。

俺は誰を殴ってしまったのだろうか。不意に、罪悪感が沸いた。

「……………すまん」

優希は優しく俺を抱いた。そしてその瞬間、

「すまんで済むかあー！」

強引に押し倒してきた。手足を見事にロックされ、なす術無く川底へと沈みゆく。優希の鼻から溢れ続ける血は、水と混じり合い流されながら消えて行く。

「ぶはあっ」

なんとか解放され、咳き込みながら浅地に座りこんだ。

「痛いわ！ 本気で殴らないでよ！」

「いや、避けるかと思って……」

実際、避けられると思った。次の一手だって考えていた。

「避けられるわけないでしょ」

優希は溜息を吐いて、続けた。

「アンタの想いを」

「……無駄に臭いな」

「うっさい！」

赤くなる優希に、自然と笑いが込み上がった。耐え切れず、笑いが漏れる。

「笑うなあっ」

優希は鼻血を垂らしながら、ムキになり始めていた。

「そもそもただけ走ってんのよ。途中、酸欠で死ぬかと思ったじゃない」

腕時計を確認すると、針は止まっていた。しかし、病院から五キロ近く離れているので随分走っていたのだろう。そして、優希は追い続けてくれたのだ。

「ありがとな」

—— 少しでも、楽になれた気がした。

優希は静かに捲り上がったスカートを正し、隣に座った。

「まだ、礼を言われる事をした覚えなんてないけど？」

確かに、行動だけならば俺を橋から突き落とし、さらに水を掛けてきただけだ。何にもしていない。騙される所だったじゃないか。その優希は、鼻を拭っていた。

「アタシが知ったのはね、親がまた同居して、ちょっと経ってからなんだ」

「大分前なんだな……」

あれはまだ初夏の頃だった。恭子とデートに行っていなければ、

姐さんの父親とも対面していない。あの執事とやり合った直後の事。
「アタシも、シヨックだった」
隣の顔も、俯いていた。

「その日にね、咲乃と話をしたの」
俺は逃げてしまったのに、優希は事実にしつかりと向き合って話をした。

姐さんが俺に言わなかった訳だ。俺は、優希よりずっと弱いのだから。

水面に映る自分を見つめながら、己の弱さを噛み締められた。

「海斗の、お陰だよ」

優希の顔は、こちらに向かれていた。鼻からはまだ、血が滲んでいた。

「俺の？」

「全部変えてくれたのは、海斗」

背中を強く叩かれた。落とされる際にも跳び蹴りを受けた背中が、ヒリヒリと痛む。

「待ってるから」

優希は何かを掴もうと手を伸ばし、遥か彼方の見つめながら立ち上がった。

空を掴んだ手は、ゆっくりと胸に降ろされた。

「咲乃の所で、アタシも待ってる。だから、暗い顔でなんて来ないよね」

まるで咲乃の様に優しく微笑む優希は、動けない俺の頭に額を乗せて、しばらく重ねていた。

座っている俺と立っている優希では、どうしても俺の方が低い位置になり、目の前で水が滴る制服が広がり、落ち着かない。

静かに額を離していった優希は、川を走って横切った。河原まで走ると、水飛沫を上げながら、こちらを振り返った。

「アタシ、イイ女でしょ」

何がイイ女だ。川に突き落としてまで好き放題しゃがって。

まだ、何一つ解決もしていない。それでも、少しは楽になった気がした。

優希。お前は本当に――

「ああ、イイ女だよ」

と、優希にも聞こえないように呟いた。

優希の小さなクシャミは、冬の到来を感じさせていた。

あれから、ご丁寧にも着替えを用意してくれた優希は、あの執事の運転する車で帰って行ったのだが、その時の執事の目には、俺に対して明らかな殺意を持っていたのは良い思い出。

寮に帰ろうかと思ったのだが、いつの日にか姐さんが言っていた事を思い出した。猿投神社は縁運びの神なのかも知れないと。

両親を奪い、

恭子を傷付け、

そして、咲乃と出逢った。

誰が何と否定しようが、俺にとって猿投神社は、縁を運んで来る場所となっている。

もしかすると何かが見えるのかも知れないと、猿投神社まで足を延ばしていた。

参道を歩いていると、先日祭りの活気の残り香を感じる。両隅に続く屋台。あの時も咲乃だけは居なかった。勝手に落ち込んでいただけだ。いや、ともに落ち込んですらいなかった。優希がいて、恭子がいて、姐さんがいて。それで満足しかけていた自分がいた。拝殿にまで辿り着くと、中門の前で誰かが立っている事に気付いた。

上背は俺と同じぐらいだろうか。少し茶色掛かった短髪に長い手足。それでいて、広めの背中が男である事を証明している。そして、男の左手には柄の無い鎌が収められていた。

「奉納祈願ですか？」

男は声をかけた事でようやく気付いたのか、こちらを振り向いた。

やつれてはいるものの、均整の整った顔。

「ええ、今更なんですけどね」

男は苦笑いを浮かべた。

「本当、今更なんですけど……」

きつと、結ぶに結べない理由があるのだろう。

「まずは結んじやいましょうよ」

今の俺には大丈夫だなんて言えない。大丈夫じゃない事もあるのだと、知ってしまったから。それでも、この人の願いは間に合っ
てほしいと思う。

鎌に書かれた文字。そこにはよく見る名があった。

「……姐さん？」

「和泉の知り合いか？」

男の目には、先程まで無かった輝きがあった。

一人の名が脳裏を過ぎる。

——かつて、姐さんが愛した男。

「健嗣さん……ですか」

「君は？」

「古賀海斗。一年で、姐さんの世話になっています」

「これはどうも。僕は森宮健嗣」

健嗣という男は、俺をまじまじと見ていた。

「君は、あれを越えたみたいだね」

やつれた顔がそう見せているのかわからない。しかし、確かに羨望を感じる目であった。

「ええ、なんとか」

本当にギリギリでしたけども。思い出したくもない。あんな世界はまっぴらだ。

それほどまでに、姐さんを信じるという事は過酷でもある。

「あ……」

——俺は今、姐さんを信じられていない。

「良かったら、僕の話に付き合ってくれないかな」

森宮健嗣は姐さんの様に微笑み、拝殿に腰掛けた。拝殿とはいっても解放されている。土足で上にあがるのはともかく、腰掛けるぐらいならば問題は無いだろう。

「僕は和泉を信じ切れなかった」

「俺も今……同じです」

森宮健嗣は笑った。

「和泉は厳しいなあ」

この猿投神社での出逢い。これも縁なのだろう。俺は、これまでの事を包み隠さずに話す事にした。姐さんとの出逢い。散歩での数々の会話。そして、現状を。

話している際、森宮健嗣は真剣な眼差しで、愛の手を入れることなく聞き入ってくれていた。やがて、俺の話が終わると、一息だけ吐いてから、呟いた。

「縁を運ぶ場所か。いいね」

「はい。俺もそう思います」

「僕は、人間であろうが、神様であろうが、力の大小っていうのはやっぱりあると思う」

「そうですね。姐さんを見てると実感します」

「本当、和泉は格が違うね」

同時に笑いあった。涙腺を指でなぞると、再び口を開いた。

「出雲大社は知ってるかい？」

「ええ。それなりに」

出雲大社は、大国主神を主祭としている。大国主神には全ての縁を結ぶ神ともいわれ、出雲大社は縁結びと場としても名を馳せ、神楽殿で結婚式等も開かれる。

「大国主神は多くの災厄を克服した。因幡の白兔なんか有名だよ」

「その経験があるからこそ、縁を結ぶ力もあると？」

森宮健嗣は頷いた。

「大国主神は、神の中でも最上級の力を持つ。出雲系の中核だから当然と言えば当然だよ」

「この猿投の神には、結ぶまでの力は無い、という事ですか」
だからこそ、縁運び。

「神頼みというのは本来、己の尽くせる事を全て為した後にする事だ」

宮森健嗣の言いたい事が大体分かってきた。

「結局のところさ、縁っていうものは、自分で結ぶものなのじゃないかな」

この人は壊れたのではなく、意図的に姐さんから離れたのではない。そんな疑惑すら浮かんた。しかし、森宮健嗣は、目が合うと首を横に振った。

「去年、僕は逃げたよ」

乾いた自嘲が響いた。

「姐さんはまだ、待ってます。あなたに会わない事で、償おうとしています」

このままではいけない。こんな終わり方、許したくない。

「お願いです」

どうか、姐さんに会ってあげてください。その思いで、頭を下げる。

森宮健嗣の答えは淡々としていた。

「和泉の元から逃げたからこそ、僕は色んな物事に気付いた」

森宮健嗣は伏せながらも、力強く宣言した。

「だから、僕は和泉には会わない」

再び、目が合った。

「少なくとも今はまだ、ね」

彼の目には、確かな意思が宿っていた。

「和泉と肩を並べられるぐらいに成長したその時、会えますようにってね」

中門に掛けられた多くの左鎌を見つめた。それこそが、彼の願いなのだろう。

「君は己が悩んでなお、他人の相談にのってくれる素晴らしい人だ」

「いえ、そんな事ありません」

「君はまだ、逃げていない」

「違います。俺もただ逃げているだけです」

「いいや。確かに君は目を背けようとはしているかもしれないが、留まっているじゃないか」

「留まって……」

そんな風に考えた事もなかった。逃げると目を背けながらも留まる。この違いに今まで気付けなかった。

「少し言葉遊びもしょうか」

「言葉遊び、ですか……」

「僕はさつき、成長、という言葉を使ったよね」

「ええ、確かに」

姐さんお肩を並べられるぐらい成長したらと。

「僕はこの一年で大きく変わったんだ。でも、これが成長だとは思っていない」

「成長じゃ……ない？」

「変化に成長は真で、成長に変化は偽という事さ」

「また姐さんみたいな事を言いますね」

「和泉の受け売りだからね」

同時に小さく噴きだしてしまった。姐さんらしい考え。

だが、理解も出来た。成長とは変化のうちの一つでしかない。例え変化しても、それが成長かだなんてすぐには分かりかねないのだ。特に、人の内面というものは。

「成長しようと思って成長するということは、難しい事だと思う」

確かに、その通りだと思う。

「今の自分には足りないと思った時に大切なのは、変化する事。変化して、変化して、変化して。いつの日か、自分の通った道を振り返る。その時、自分はある時よりも成長出来たと思えば、それは十分に素晴らしい事じゃないかな」

ようやく俺にも何をすべきかが見えてきた。俺はまた、本質を見

誤っていたんだ。

姐さんが俺に教えてくれなかったのは、まだ足りない部分を感じていたから。その部分も見誤って、いじけていた自分が恥ずかしい。俺がすべき事は、足りない部分を埋めるべく変化する事。そして、その足りない部分も彼が答えをくれていた。

「本当にありがとうございます。お陰で、色々と見えてきました」
この人も、尊敬するに値する人だ。

「いやいや。僕は自分の話をしていただけさ。こちらこそ付き合ってくれてありがとう」

縁運びが持つてきた、この人との縁。俺は、自力で結んでみせる。
「俺、やっぱり納得いきません。このまま終わるだなんて」

このままでは必ず後悔してしまう。自分も、宮森健嗣も、姐さんも。

だったら、自分の出来る事をしよう。出来るようになるう。

「俺も姐さんも待つています。いつまでも」

この縁を、次へ結ぼう。

俺がすべき事は見えてきた。しかし、それは俺だけじゃ、ダメな気がした。必要なのは、俺の事を良く知る人物の協力。

恭子に電話をしようと思ったが、川に落とされた際に壊れてしまったようで、近くの恭子の実家まで赴いた。

チャイムを鳴らす。

どうでもいいんだが、なんか人の実家のチャイム鳴らすのってすごい緊張するのは俺だけだろうか。

「かー君……」

玄関から出てきたのは親ではなく、恭子だった。

「大丈夫……？」

「ああ。ありがとうな」

俺は未だ、恭子への答えを出せていない。

——過去を棄てるのか、受け入れた上で、見据えていくのか。

もう少し、時間が欲しかったというのも本音だ。

しかし、世界はそれを許さなかった。

「話したい事があるんだ。いいか？」

恭子は静かに頷いた。

「あの公園で待つて」

あの公園というのは、俺と恭子が幼い頃一緒に遊んだ公園。恭子の家から歩いて数分の距離にある。

公園には、雑草が好き放題生えていた。ただでさえ若者離れが叫ばれる田舎。公園には犬の散歩で来る人ぐらいしかないであろうことを物語っていた。

ブランコを漕ぐと、錆びがこすれ合う音を立てながらも動いた。

「おまたせ」

恭子を見ると、あの時のゴスロリ服を纏っており、思わず嘖いてしまった。

「汚いなあ、かー君」

「お前が変なもん着てくるからだろ！」

「かー君が買ってくれたものだもん！ 大切に着るよ」

さすがに堂々そんな事宣言されると恥ずかしい。顔が真っ赤になっているのが、自分でもわかるぐらいに火照っている。

—— 今度また買つてやろう。今度はまともな服を。

「それで、話つて？」

恭子は隣のブランコに座り、漕ぎ始めた。空気抵抗の大きいスカートだからあまり漕ぐんじゃありません。

「ちよつとな。昔話に付き合つて欲しいというか」

「お姉さんにまかせなさい」

恭子はスカートの事を気にも留めず、力の限り漕いでいた。

「事故が起きるまでは、二人でよく遊んだよな」

「うんうん。ここだね」

お陰で苦手意識も根付いてしまったがな。

「その後、事故が起きた」

恭子は返事をしなかった。鉄が擦れる音が響く。

「その後、俺は全てを壊してやりたくなった」

「随分と長かったね……」

思わず、苦笑いをしてしまった。

八年以上も荒れていたのだ。人生の半分荒れていた事になる。長いわな。

「どうもその時、咲乃にも出会ってたらしい」

「知ってるよ」

意外な言葉に、目を丸くして恭子を見てしまった。

「和泉が最初からかー君の事、色々知ってたのを不思議に思わなかった？」

……成程。姐さんが俺なんかに寄って来たのは恭子が原因だったのか。

「かー君は怖いんだよね。その時の自分に戻る事が」

「ああ。怖い。怖くて……仕方ないんだ」

鉄が擦れる音は、いつの間にか止んでいた。

暖かな身体が、背中から包んだ。

左手にはもうリストバンドは無く、傷痕が見えている。

「今度は……今度は何を言われても、傍にいるよ」

振り向けば、そこに恭子の顔がある。だが、振り向けなかった。

「恐怖はボクが全部包んであげるから」

「恭子……」

恭子の頭を撫でた。これが今、俺に出来る精一杯のお礼。

「ありがとうな恭子」

「ふーん。お姉さんだからね」

恭子も、以前に増して笑うようになったと思う。

「過去を、受け止めてみせる」

「うん」

これが、先延ばしにした恭子への答え。そして、今の自分への答え。

「ちなみにさ……」

「何？」

「恭子は咲乃の事いつ知ったんだ？」

「かー君が知る数分前」

「これもまた意外だった。ほとんど俺と一緒に知らされただなんて。」

「何とも……思わないのか？」

「背中を勢いよく蹴られ、ブランコから突き落とされた。」

「いだっ！」

「辛くないわけないじゃん！」

「恭子の顔をよく見ると、目が赤い。」

「でも、かー君のが辛いのだって、わかるよ。ボクはお姉さんだから……お姉さん、だから」

「恭子の強がり、俺が崩壊させてしまった。」

「恭子の元により、そつと抱きしめた。恭子が泣きやむまでは、胸を貸してあげよう。子供っぽくて、強がり、ずつと見守ってくれていたお姉さんに。」

「病院に赴いたのは、翌日の事だった。」

「咲乃の部屋には、医師と姐さん、優希も恭子もいる。」

「答えは出た様ですね」

「ありがとう、姐さん」

「姐さんのお陰で、また少し変わった気がする。」

「本当に、世界とは残酷です」

「姐さんは医師とアイコンタクトを図ると、医師が動き出した。」

「古賀君には、早速だが聞いてもらいたい事がある」

「姐さんに負けず劣らずの重圧が、医師から放たれていた。」

「事前指示書というものを知っているかな」

「……いいえ」

医師は一枚の紙を取り出した。

「これを読んで欲しい」

そこには事前指示書に関する事が書かれていた。

事前指示書というものがある。これは意思決定不能状態に陥った場合に、医療ケアに関する個人的希望を伝える法的文書。ただし意思決定不能状態と判断されない限りは有効とならない。また、事前指示書というものには二種類あり、患者本人の意思を尊重するリビングウィルと代理人の意思を尊重する医療判断代理委任状がある。また、代理委任状には連帯代理人と単独代理人とがあり、こちらは医師の考えも介入される。

「咲乃はね、今後の決定を君にしてもらいたいそうだ」

「今後の決定……？」

医師は静かに紡ぎ出した。

「ひとつ、このまま何もしないこと。咲乃君自身の生命力が途絶えたその時で終わりだ」

「それ以外にも手はあるのか？」

咲乃の病気は不治のはずだ。

しかし、医師は首を横に振るだけだった。

「ひとつ、咲乃君の肉を切り裂き、筋力を機械で代替し延命し続ける事。この二択だ」

やはり、出来て延命治療しか無かったのか。

「これを、キミに決めてもらう」

咲乃は、最期を俺に一任したのか。

この俺に。

「咲乃自身は延命を望んでいない。この延命は医学的価値がない。……いや、僕がそう思いたいだけなのかもしれないね。ともかく、僕としても咲乃の意思を尊重したいと思う」

咲乃は選択させる気など端からない。このハードルを越える為に、飛べと言っているのだ。

「前に、お父さんの幸せの話したよね」

窓の方を向いている咲乃は、目を合わせることはなかった。

「私も、わかんなかった。どうしてお父さんが、幸せそうに笑い続けていたのか」

咲乃の握られた右手が、胸に置かれていた。

「お父さんが死んじやってからの三年間。ずっと部屋に籠もって考えてたけど、わかんなかった」

「咲乃……」

「無理矢理部屋を出されて、学校に行ってみたら、いきなり殴られるし」

謝ろうと言葉を口にしようとした時、咲乃が先に出てきた。

「うつん。殴られた事自体は痛くなかったの。私が痛かったのは、その後。海君が、お父さんを侮辱した事」

「……ごめん」

過去の俺は、咲乃まで傷付けていた。既に、傷だらけの咲乃までも。

「ごめん……本当にごめん」

もう、逃げないと決めた。今の俺に出来ることは、謝ることしかない。

窓の外を見続ける咲乃の横顔には、珍しく険しさが含まれていた。
「海君の理想に近づいて、わたしの虜になってもらって、そして、大好きな人に置いていかれる」

咲乃の目が、ついにこちらを向いた。

「それが、私の復讐……だった」

その微笑みが、少し歪んでいた。

「でも、やっぱりうまくいかないね」

目に見えたはずの、笑顔の歪みが消えていく。

「ゆーちゃんにきょーっち、さらにいずみん。みんな魅力的。かないつこないよ」

「そんなことない！俺は咲乃が一番好きだ。今でも。どんな理由があろうとも。これだけは、変わらない」

咲乃は目を大きくあけて止まった。そして、少しづついつもの笑顔へと戻っていく。

「ありがとう」

少しづつ動き始めた咲乃は、笑いながら言った。

「でもね、一番の誤算はそんな事じゃないの」

咲乃はゆつくりと、上体を下げた。

咲乃の横目が、数秒だけ再び重なった。しかしすぐに、視線はそれた。

「大切な人に置いてかれちゃう苦しみは知ってた。……けど、知らなかったなあ」

咲乃は俺に振り向き、満面の笑みで言った。

「大切な人を置いていくのが、こんなに苦しいなんて」

咲乃の想いが、頬を伝う。

「あれ？　なんでだろ……」

咲乃自身が、一番驚いているようだった。咲乃が拭っても拭っても、涙はこぼれ落ちていく。

「ずっと……死ぬその時まで笑っていようと思ったのに」

耐え切れず、咲乃に駆けよって抱きしめた。咲乃は抵抗せず、ゆつくりと俺を抱き返してくれた。

咲乃もまた、変わったのだ。

「ゆーちゃんの、きょーっちの、いずみんの、海君の。皆のお陰」

咲乃の腕に、力が込められた。凄く弱く、儂い力。それでも、俺をしつかりと抱きしめていた。

「でも、皆、ごめんね。何回でも、言うよ。私も、海君が好き」

咲乃の前では、出来る限り笑顔でいたい。でも、今日だけは……

「俺も、咲乃が好きだよ」

今日だけは、許してほしい。

何年分もの涙を流したせいか、目が腫れていた。

医療判断代理委任状に署名する為、別室に移動していた。

別室には俺と姐さんの二人のみ。

「ところでさ」

後ろで佇む姐さんに話しかけた。

「どうしました？」

「昨日、森宮健嗣っていう人に会ったよ」

「……そうですか」

姐さんも驚いたらしく、返事が一拍遅れていた。

「良い人だね」

「そうですね」

「もう、彼は立ち直ったよ」

「すいません海斗さん。健嗣はもう私とは関係ないので」

「お願いもしてたよ。いつか自分が姐さんと同じ位置まで成長できたら迎えに行くって」

本当は会いたいただけだったが、これぐらいの誇張はいいだろう。

姐さんが呼び捨てで言うのは、恭子と宮森健嗣だけなのだから。本質を見たら分かりやすい人である。

「私を迎えに……ですか」

「うん。迎えにつて」

「彼は、本当にお強くなられたのですね」

「通りすがりの俺の相談なんかに乗ってくれたよ」

ふと、背中に重みを感じた。

後ろを向くと、姐さんが頭を預けていた。

「少しだけ……少しだけ許してください」

姐さんから、小さく囁く音が聞こえた。

皆が、変わった。俺も、咲乃も、優希も、恭子も。しかし、一番変わったのは、姐さんだろう。出会った頃の姐さんは、人間味の欠片も感じることが出来なかった。それが今、俺の背中を借りているのだから。

しばらくして、姐さんは勢いよく起き上った。

「申し訳ありません。先程告白なされたばかりだと言うのに」

そういえば姐さんの目の前でもあつたのにいつてしまったんだよね。ああ、恥ずかしい。でもそれ以上に、誇らしい。

「健嗣に関しては、やはり私から彼にすべき事は、もうありません」
姐さんの頬笑みにもしつかりと人間味が混じっていた。

「彼は彼の選んだ道を歩むだけです。私の道と、再び交差するかもしれないし、しないかもしれません。それだけです」

姐さんの小悪魔的な頬笑み。反則までに綺麗な姐さんに、可愛さまで兼ね備えられつつあることに戦慄を覚える。

「何？ さつそく浮気？」

「それはだめだぞ、かー君！」

いつの間にか入ってきたのか。優希と恭子がいた。

「ご……誤解だ！」

「気持ちに察します。私も好きな御方が複数になってしまっていて悩んでいるのです」

「あつ！ いずみずるい！ ボク達だって好きな人いるもん！ ねっ、ゆーき！」

「えっ、ちょ……今言わないと……ダメ？」

何も聞いてない。何も聞いてないぞ！

急いで書類にペンを走らせる。急ぎ過ぎたせいか、元から下手なのか。歪んだ文字はかろうじて古賀海斗と読みとれた。

嬉しい事も辛い事もあるけれど、それでも俺は神とやらに感謝したい。色んな縁を運んでくれた、猿投の神に。

縁結

春が訪れた。もう、一年が過ぎたのだ。十六年という短い人生の中で、最も濃かった一年。

咲乃と再会した。優希と出逢った。姐さんにも出逢えた。恭子と仲直りも出来た。

色々、変わる事が出来た。

「お疲れ、海斗」

「おお、お疲れ優希」

姐さんと恭子が卒業するにあたり、俺は生徒会長となった。優希も役員だ。

生徒会室の一角には永久名誉副会長、朝倉和泉というものが掲げられている。実に姐さんらしい去り方である。

きっとこれからもその肩書きを武器にちよくちよく顔を出すに違いない。

「僕も頑張ったです！」

「」

「そうだな。お疲れ庄司、智晴」

生徒会は新たなメンバーも何人が加わった。新一年生ばかりという所は、姐さんの威圧の名残があるからかと考えたりもする。

「失礼します、古賀会長。もうお昼ですがいいのですか？」

「ん？」

「病院です。妹さんが待つておられるのでは」

「沙耶なら元気にしてるよ。そのうち編入すると思うから、仲良くしてね」

「会長のご命令とあらば」

「いや相馬……俺としては、普通に友達としてがいいんだけど」

「はい。友達を装いながら接してみせます」

「はい！ 僕も仲良くしてみせます！」

「うん……皆よろしくね」

数ヶ月前、妹の意識が戻った。

始めこそ沙耶も戸惑いもしたものの、優希に姐さん、恭子のお陰で日常生活への復帰まで順調に歩んでいる。

——ただ、沙耶は咲乃を見る事は無かった。

沙耶が目覚める数日前、咲乃は息を引き取った。

皆が哀しみに暮れる中、沙耶は戻ってきてくれたのだ。

もしかしたら、咲乃が縁を運んできてくれたのかもしれない。そう思わずにはいらなかった。

「じゃあ海斗、名古屋にでも行かない？」

「名古屋×優希は良い思い出が無い」

「アンタが勝手に血の海にただけでしょ！」

「血の海っ！」

「いや、そこまでじゃない。優希！ 変な事下級生に吹き込むんじゃないか！」

たった一人を半殺しにただじゃないか。

……半殺しもマズイわな。反省反省。次に活かせばいいんだ。

「そういえば、雄一郎が再戦に燃えてるんだけど、やらない？」

「俺はもう暴力では訴えないって決めたの。そもそも雄一郎って誰だよ」

「うちにいる執事」

十カ月程前の死闘を思い出す。あんな奴に勝てたのはマグレだ。十戦やっただって一回勝てるかの領域。それももう日が経っている。向こうは磨きをかけている事だろう。

「俺、それ死ぬと思う」

「アタシもそう思うわ」

じゃあ提案しないでくれますか……。

「恭子なら楽しんでくれるかな」って

「嫌がらせにもほどがあるわ！」

「あ！ 神坂恭子さんですね。それなら分かります！」

「庄司。口を慎みなさい。今は痴話喧嘩中なんですから」

「はい……」

痴話喧嘩とかじゃないですから。

俺の好きな人は咲乃に固執し続けるつもりもない。というかそんな事は咲乃が許さないだろう。

でも、今はまだ咲乃を想っていたい。俺自身が成長出来たと思える、その時まで。

優希もそれを感じてくれているのか、それとも元から興味がないのか分からないが、いい友達として傍に居続けてくれている。勿論、ここにはいない姐さんも恭子も。

「まあ、皆さんお疲れ様でした。本日の仕事は終わりです、解散」

「おつっ」 「おつかれです！」 「お疲れ様です」 「」

それぞれがそれぞれの返事をした。

窓から見降ろす。見渡す限りの田舎だが、俺は好きだ。

一匹の蝶が、窓を横切った。

「ちよつと海斗！ バッグ！」

俺は追いかける。縁を運んでくれる蝶を、今日も追いかける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5200u/>

縁

2011年7月24日03時12分発行